博　多　36

—第59次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集

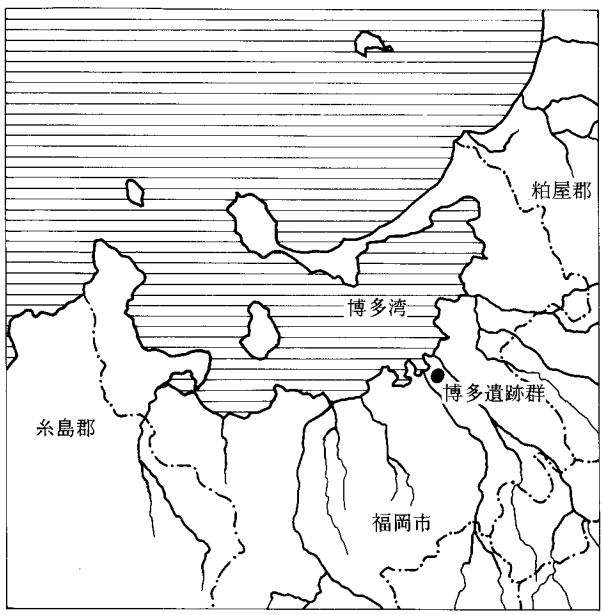
1 9 9 3

福岡市教育委員会

博　多　36

—第59次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集



1 9 9 3

福岡市教育委員会

序

JR博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には古代以来、大陸との貿易拠点として栄えた中世都市「博多」が包蔵されています。

近年、この地区は都市基盤整備が進み、高層ビル化が進んでいます。これらの再開発事業に伴い、100ケ所に近い発掘調査を実施しています。

本書は、祇園地区の第59次調査の発掘調査報告書です。調査においては、古墳時代から中世の遺構を検出し、多種多様の遺物を得ることができました。特に古墳時代初期の住居址からは、鉄器製作に関連するまとまった遺物を得ることができました。

発掘調査から資料整理、本書発行までの費用負担をはじめ、多くのご協力を賜った四宮正信氏をはじめとする関係者各位に対し、心から感謝の意を表します。

最後に、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成５年１月

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は、博多区祇園町187－226の四宮正信氏による駐車場ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年11月から翌年２月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第59次調査の報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、山口譲治、牟田裕二（故）、大塚恵治、石本恭二、岡崇、清川朋和、石田晴美、泉明美、井手かすみ、尾崎君枝、甲斐田嘉子、坂井昭美、星子輝美、森優雅、山口朱美、山崎美枝子があたった。

3．本書使用の遺物実測図は、古代までの土器を平川敬治、中世の陶磁器・土師器を亀井明徳、堀苑京美、その他の遺物を山口譲治、太田明子があたった。

4．本書使用の写真は、遺構を山口譲治、牟田裕二が、遺物を平川敬治があたった。

5．本書使用の図面の製図は、山口朱美があたった。

6．本書使用の方位は磁北である。

7．本調査出土の古式土師器の胎土分析を奥田尚氏、赤色顔料分析を成瀬正和・本田光子氏、中世の陶器のガラス状付着物の分析を山崎一雄・肥塚隆保氏にそれぞれ依頼し、分析結果については本書に収録した。なお、出土鉄器など鉄器生産に関連する遺物については大澤正巳氏に教示を得た。

8．本書の執筆は、第１～４面の出土遺物については亀井明徳が、第４章については目次に明記し、他は山口譲治があたった。

9．本調査地出土遺物および本調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本　文　目　次

第１章　序説

１．はじめに……1

２．調査体制……1

第２章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と立地……3

２．博多遺跡群の調査……3

第３章　調査の記録

１．調査概要……7

２．層序について……9

３．第１～３面の調査……10

４．第４面の調査……37

５．第５面の調査……55

６．第６面の調査……61

第４章　自然科学的分析

１．博多第59次調査ピット0018出土の無釉壺に付着した緑色ガラスの化学分析

……山崎一雄・肥塚隆保……87

２．土器表面にみられる砂礫……奥田　尚……89

３．博多遺跡第59次調査出土の赤色顔料について……本田光子・成瀬正和……97

第５章　結　章……99

挿　図　目　次

Fig. 1　博多第59次調査地点地形実測図 …… 4
Fig. 2　博多遺跡群調査地点位置図 ……（折り込み）
Fig. 3　第59次調査地点 …… 5
Fig. 4　第１面遺構配置図 …… 6
Fig. 5　第１面遺構分布状況（東から） …… 6
Fig. 6　第59次調査地点遺構配置図 …… 7
Fig. 7　調査区東壁土層断面実測図 …… 8
Fig. 8　第２面遺構分布状況（東から） ……10
Fig. 9　第２面遺構配置図 ……10
Fig.10　第３ａ面遺構配置図 ……11
Fig.11　第３面遺構分布状況（西から） ……11
Fig.12　第３ｂ面遺構配置図 ……12
Fig.13　第６号井戸出土遺物実測図 ……13
Fig.14　第２・６号井戸出土遺物 ……14
Fig.15　第６号井戸出土遺物 ……15
Fig.16　第５号井戸（SE―05）実測図 ……16
Fig.17　第２・５・25号井戸および第９・10・12・13・15・20号土壙出土遺物実測図 ……17
Fig.18　第11号土壙および第６号井戸出土遺物実測図 ……18
Fig.19　第11・12号土壙出土遺物 ……19
Fig.20　第16・18号土壙（SK―16・18）実測図 ……21
Fig.21　第９・10・13～15号土壙出土遺物 ……22
Fig.22　第14号土壙出土遺物実測図 ……23
Fig.23　第16号土壙出土土器実測図 ……24
Fig.24　第16号土壙出土遺物 ……25
Fig.25　第21号土壙出土遺物実測図 ……26
Fig.26　第20・21号土壙出土遺物 ……27
Fig.27　第17号井戸（SE―17）実測図 ……28
Fig.28　第25号井戸（SE―25）実測図 ……29
Fig.29　第28号土壙（SK―28）実測図 ……30
Fig.30　第17号井戸上・下層出土遺物実測図(1) ……31
Fig.31　第17号井戸井筒内出土遺物(1) ……32
Fig.32　第17号井戸井筒内出土遺物(2) ……33

Fig.33　第17号井戸上・下層出土遺物実測図(2)……33
Fig.34　第26号井戸・第27号土壙出土遺物実測図……34
Fig.35　第25・26号井戸出土遺物……35
Fig.36　第27・28号土壙出土遺物……36
Fig.37　第４面遺構配置図……37
Fig.38　第30号土壙（SK―30）実測図……37
Fig.39　第34号土壙（SK―34）実測図……38
Fig.40　第34・37号土壙完掘状況……38
Fig.41　第35号土壙（SK―35）実測図……39
Fig.42　第37号土壙（SK―37）実測図……39
Fig.43　第39号土壙（SK―39）実測図……40
Fig.44　第28・30・31号土壙出土遺物実測図……41
Fig.45　第30・31号土壙出土遺物……42
Fig.46　第34号土壙上層出土遺物……43
Fig.47　第34号土壙上・下層出土遺物実測図……44
Fig.48　第34号土壙下層・第35～37層土壙出土遺物……46
Fig.49　第36・60号井戸および第37号土壙出土遺物実測図……48
Fig.50　第39号土壙上・下層出土遺物……49
Fig.51　第39号土壙上・下層出土遺物実測図……50
Fig.52　第60号井戸出土遺物……51
Fig.53　各柱穴出土遺物(1)……52
Fig.54　各柱穴出土遺物(2)……53
Fig.55　第１～４面出土遺物……54
Fig.56　出土和同開珎……55
Fig.57　第５面出土土器実測図(1)……56
Fig.58　第５面出土土器実測図(2)……57
Fig.59　第５面出土土器実測図(3)……58
Fig.60　第５面出土遺物実測図……59
Fig.61　第６面遺構配置図……60
Fig.62　第６面遺構検出状況……60
Fig.63　第41号竪穴式住居址（SC―41）実測図……61
Fig.64　第41号竪穴式住居址出土土器実測図(1)……62
Fig.65　第41号竪穴式住居址遺物出土状態(1)……63
Fig.66　第41号竪穴式住居址遺物出土状態(2)……64
Fig.67　第41号竪穴式住居址出土甕形土器……65

Fig.68　第41号竪穴式住居址出土土器実測図(2)……66
Fig.69　第41号竪穴式住居址出土土器……67
Fig.70　第41号竪穴式住居址出土鉄製品……67
Fig.71　第41号竪穴式住居址出土鉄製品実測図……68
Fig.72　第41号竪穴式住居址出土遺物……69
Fig.73　第41号竪穴式住居址出土遺物実測図……70
Fig.74　第43号竪穴式住居址（SC—43）実測図……71
Fig.75　第43号竪穴式住居址出土土器実測図……72
Fig.76　第44号竪穴式住居址出土土器実測図……72
Fig.77　第44号竪穴式住居址（SC—44）実測図……73
Fig.78　第44号竪穴式住居址石器実測図……73
Fig.79　第45号竪穴式住居址出土土器実測図……73
Fig.80　第48号竪穴式住居址（SC—48）実測図……74
Fig.81　第48号竪穴式住居址出土土器実測図(1)……75
Fig.82　第48号竪穴式住居址出土土器実測図(2)……76
Fig.83　第48号竪穴式住居址出土二重口縁壺……77
Fig.84　第48号竪穴式住居址出土遺物実測図……78
Fig.85　第48号竪穴式住居址出土遺物……79
Fig.86　第49号竪穴式住居址（SC—49）実測図……80
Fig.87　第49号竪穴式住居址出土土器実測図……81
Fig.88　第57号竪穴式住居址出土土器実測図……81
Fig.89　第54号竪穴式住居址出土土器実測図……82
Fig.90　第58号竪穴式住居址出土土器実測図……82
Fig.91　第58号竪穴式住居址出土土器……83
Fig.92　第６面出土土器実測図(1)……84
Fig.93　第６面出土土器実測図(2)……85
Fig.94　出土金属器実測図……86
Fig.95　第６面出土他時代遺物実測図……86
Fig.96　0018柱穴出土遺物実測図……87
Fig.97　第５面出土磨石実測図……98

第1章　序　説

1．はじめに

博多区祇園町の大博通りに隣接する一画に、四宮正信氏によって駐車場ビル建設が計画された。この地周辺は博多遺跡群のなかで、もっとも高い博多砂丘上に位置している。ビル建設の計画者である四宮正信氏の依頼により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下、埋文課とする)は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、計画地の北側は攪乱を受けて破壊されているが、南側では、地表下1.4m前後の標高4.3m前後で遺構面を検出した。また、遺構面では多量の古代から中世にかけての陶磁器類が出土した。試掘調査結果および周辺地の発掘調査の成果から、埋文課は、計画地北側の地下埋設施設がある部分を除き、計画地南側については古墳時代から中世の遺構が遺存しているとし、計画変更し保存するか、全面的な発掘調査が必要であると決定した。以上の決定を受け、埋文課と四宮正信氏は協議を重ね、現状保存は困難であり、記録保存のための調査を実施することとなった。

以上の調査決定を受け、調査費・調査期間・出土遺物の扱いなどについての協議に入り、それぞれ契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所用プレハブの設置、表土層のすき取り後、弥生時代から中世の各時代各時期の様相把握を目的とし、約4ケ月にわたって実施した。

遺跡調査番号	8957	遺跡略号	HKT－59	分布地図番号	049－A－1
調査地地籍	博多区祇園町187－226			調査実施面積	276㎡(7面)
調査期間	1989年11月7日～1990年2月24日				

2．調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分な体制を組むことはできませんでしたが、四宮正信氏をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行いたしました。

整理報告作業は調査担当者である山口の調査業務繁多により、1989年度の調査にもかかわらず、本年度で実施いたしました。四宮正信氏をはじめとする関係各位にこの場をお借りし、お詫び申し上げるとともに、ご協力に謝意を表します。

調査主体　　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係

教育長　佐藤善郎(前)　井口雄哉　前文化部長　川崎賢治

	文化財部長　花田兎一　　埋蔵文化財課長　柳田純孝(前)　折尾学
	第二係長　柳沢一男(前)　塩屋勝利
調査担当	山口譲治
試掘調査担当	横山邦継(主任文化財主事)　小畑弘巳　常松幹雄
事務担当	松延好文(前)　中山昭則　吉田麻由美
調査指導員	亀井明徳(専修大学文学部)　大澤正巳(新日鐵)
調査・整理補助員	故牟田裕二　平川敬治　犬丸陽子　堀苑京美　山口朱美
調査・整理協力者	大塚恵治(現八女市教育委員会)・石本恭二・岡崇・小川勝彦・清川朋和
	後藤和武・柳澤竜広・泉明美・森優雅（以上、福岡大学）　赤星攝　有
	吉千栄子　石田晴美　池田礼子　井手かすみ　大久保沙波　太田明子
	尾崎君枝　甲斐田嘉子　神谷玲子　吉良山益美　坂井昭美　佐々木美子
	品川伊都子　中原尚美　西野敦子　能美須賀子　平野徳子　星子輝美
	松下節子　村田洋子　矢川みどり　山崎美枝子

なお、整理作業のなかで、古式土師器の胎土分析を奥田尚氏、陶器付着物の分析を山崎一雄（名古屋大学名誉教授）・肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）両氏、赤色顔料の分析を成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）・本田光子両氏にそれぞれ依頼し、分析結果については本書に収録した。また、鉄器生産関係の遺物については大澤正巳氏に分析を依頼し、本書に収録の予定であったが、山口の怠慢から遺物の図化が遅れたため分析できなかった。同遺物については、大澤正巳氏より教示を得たことを明示するとともに、本報告後、同氏に分析を依頼し、分析結果については、次年度以降の博多の報告書に収録する。

第２章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と立地（Fig.１・２）

福岡市の博多湾岸には0.3～２km前後の幅をもつ砂丘が形成されており、砂丘は東から多々良川・御笠川・那珂川・樋井川・室見川など北流して海に注ぐ河川によって切られている。博多湾岸の砂丘上には、南北幅が広いほど古い時期からの大遺跡が所在している。博多遺跡群は、博多湾岸中央部の御笠川・那珂川に挟まれた砂丘上に位置している。博多遺跡群は、大きく海側の「息の浜」と内陸側の「博多浜」両砂丘上とその間に所在している。現在、この地域は都市基盤整備が進み、商業地域として市街化し、標高４～５m前後の平坦な地形をなしている。

本調査地は、JR博多駅から海に向かって一直線に延びている大博通りの祇園六差路に第65次調査（本年度報告書発行、福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集）を挟み接している。博多遺跡群のなかでみていくと南部にあたり、「博多浜」砂丘の頂部から南斜面に位置し、現在標高は5.7m前後である。国土地理院発行の５万分の１地形図（福岡）の北から17cm、東から15.3cmの位置にあたる。

２．博多遺跡群の調査（Fig.２）

博多遺跡群の調査は、都市高速道（地下鉄）建設に伴う調査を端緒として、現在まで90地点の発掘調査と20ケ所前後の立会い調査が実施されている。現段階の調査実施面積は４ha強にもなっている。しかし、博多遺跡群は80ha以上の広がりをもつと考えられ、現段階では本遺跡群の約５％前後の調査が実施されているに過ぎないといえよう。

本調査地が所在する「博多浜」砂丘は、聖福寺を中心とした地域から祇園町周辺（万行寺を含む）にかけて鉤形に高い。「博多浜」砂丘は、聖福寺を中心とした高まりと祇園町から万行寺にかけて広がる高まりに細分でき、本書では後者を「祇園」砂丘と仮称し、述べていくことにする。博多遺跡群のなかで、「祇園」砂丘地区については都市高速道に伴う調査以来、比較的調査が実施されている。ここでは、「祇園」砂丘のこれまでの成果を、古墳時代までに視点をあて概観することにする。

「祇園」砂丘で、最古段の遺物としては、第17次調査（以下、第17次とする）で夜臼式土器があるが、現在まで弥生時代中期初頭までの遺構は検出されていない。中期初頭までの遺物は第17・50次で出土している。中期前半から同後半にかけて「祇園」砂丘上に甕棺墓と住居址が営まれている。甕棺墓は、都市高速道店屋町祇園Ｉ区B･C区で20基、同祇園出入口で６基、第22次で６基、第24次で１基、第36次で５基と第32次で数基検出されている。第22次を除き、他は同一の甕棺墓群で、博多遺跡群に２ケ所の墓域があると考えられる。甕棺墓はいずれも中期

前半から中期後半のものである。同時期の生活遺構としては、第30次で竪穴式住居址が1基検出されているのみである。同時期の遺物は、第45・50次など「祇園」砂丘上の各調査で出土している。後期前半から中頃の遺構は現在まで未検出である。ふたたび遺構がみられるようになるのは後期後半からである。都市高速道店屋町祇園Ⅰ区のO区で後半から終末にかけての土壙が、第17・20次でも同時期の竪穴式住居址3基と土壙5基が検出されている。博多遺跡群での人の痕跡は弥生時代初頭に遡るが、生活の痕跡は中期前半以降、「祇園」砂丘上で墓が先行する形でみられるようになる。中期および中期以前および後期前半から中頃の生活遺構は存在の可能性があり、検出が待たれる。

弥生時代終末から古墳時代に入ると、「祇園」「博多浜」両砂丘上の各調査区で生活遺構・墓地が検出されている。「祇園」砂丘では都市高速道店屋町祇園Ⅰ区のO・Q区で土壙、祇園出入口で竪穴式住居址がまず最初に検出された。第17・20・27・33・36・45・50・59・65次で竪穴式住居址、第33・36・45・50次で土壙、第22・24・27・59次で溝が検出されている。第17・20・45・50次検出の生活遺構のなかにやや先行するものがあるが、他は布留式土器期の古段階のものである。この時期の土器は第25・37・51次などでも出土しており、「祇園」丘陵の高まり上に

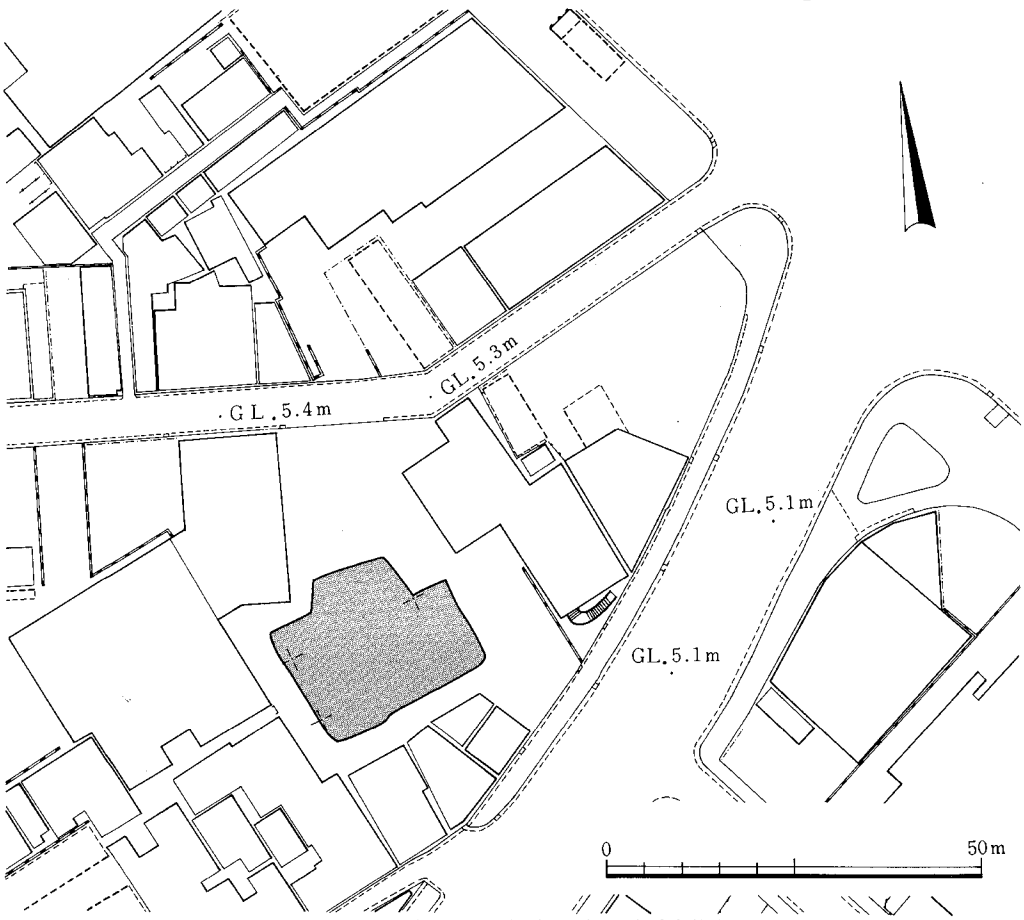


Fig. 1　博多第59次調査地点地形実測図

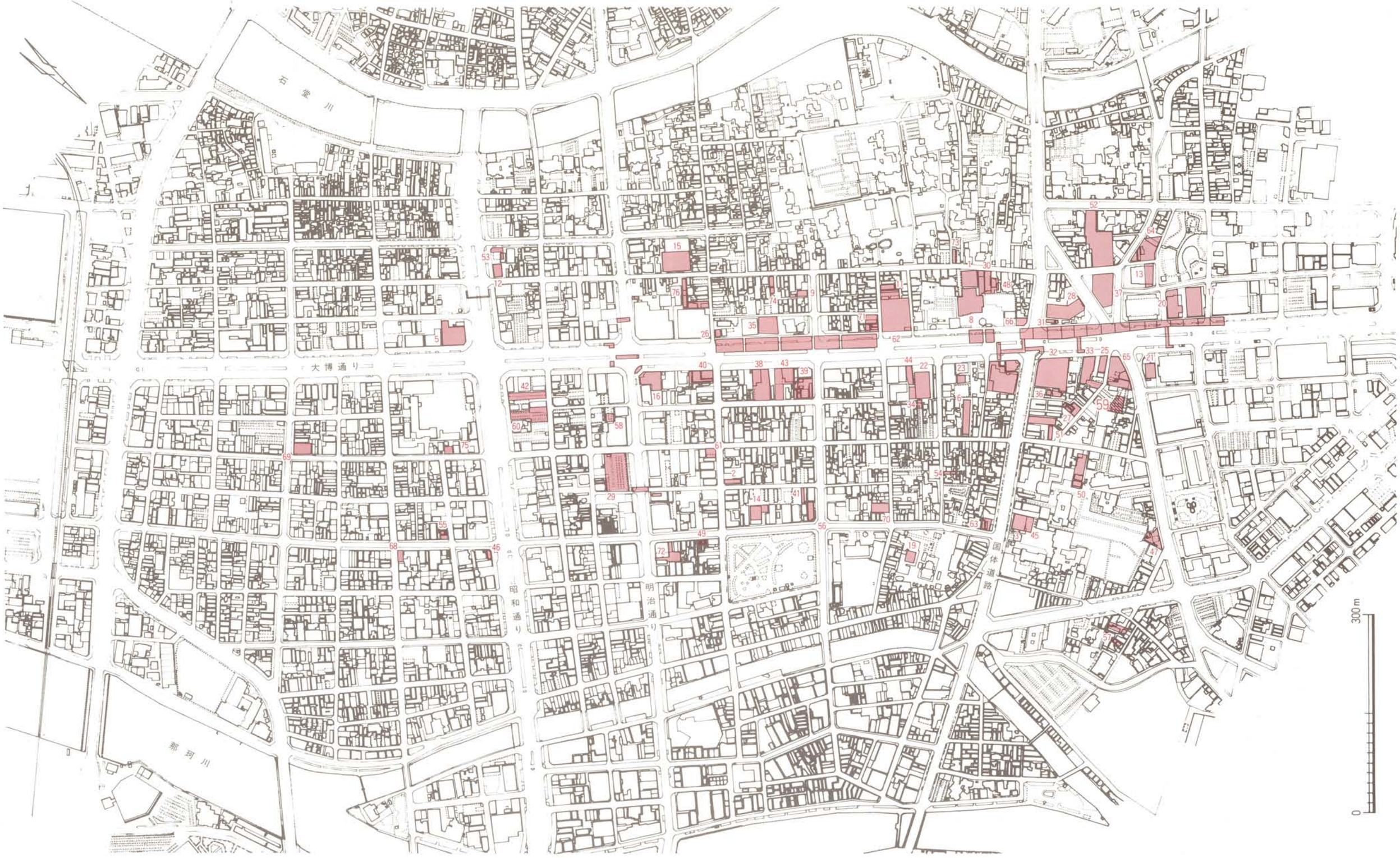


Fig. 2　博多遺跡群調査地点位置図

生活遺構は分布している。この時期の遺物をみていくと、畿内系・山陰系や大陸系の土器がかなりの量入っている。第17・20・50・59次で碧玉の剝片・玉未製品が、第59次で水晶製品核が出土しており、玉製作が行なわれていたことが推定できる。第59・65次では、鉄素材・鉄片・椀形滓・鉄滓・鞴・鍛造鉄片など鉄器生産に関する遺物が出土しており、鉄器製作も行なわれている。鉄製品は第50次で鉄鎌、第59次で鉄鏃？などが出土し、第17・45・59次で銅鏃、第50次で筒形銅製品が出土している。第45次で蛸壺、第59次などで浮きが出土しているほか、土錘が出土している調査地もある。布留式土器期から５世紀の遺構としては、第17・20・27・36・37次で方形周溝墓・粘土槨などの埋葬主体部、第28・31次で前方後円墳が検出されている。また、第62次でも方形周溝墓が検出されている。これらの墓地は「博多浜」「祇園」の両砂丘の中央部に位置し、第62次の方形周溝墓、第28・31次の前方後円墳は規模から主長墓系譜に入るものといえよう。古墳時代前半期の検出遺構および出土遺物・立地条件から、この時期に大陸・畿内・山陰との交流で大きく成長し、福岡平野の一大拠点となったといえよう。

５世紀後半から６世紀後半までの約１世紀間は、点的に須恵器が出土しているのみで博多遺跡群のなかの空白期である。６世紀末になると都市高速道店屋町祇園Ｉ区のN区で竪穴式住居址、O・Q区で土壙、祇園出入口で７世紀の木棺墓が検出されている。第17・20・50・59次で竪穴式住居址（第33・45次で７世紀後半のものあり）、第17・20・33・45次で土壙や溝が、第28次で小石室が検出されている。６世紀末以降になると「祇園」「博多浜」砂丘の頂部のみではなく、谷部にも竪穴式住居址が検出されており、古墳時代前半よりも集落は拡大化している。７世紀になると、各調査区で柱痕跡をもつ柱穴が検出できるようになり、掘立柱建物群の所在が想定できるが、後世の遺構の切り合いにより、現在まで建物として確認できたものはない。遺物の出土量は６～７世紀初頭より増加していることから、集落はさらに拡大化していると考えられることから、今後の調査に期待したい。

Fig. 3　第59次調査地点

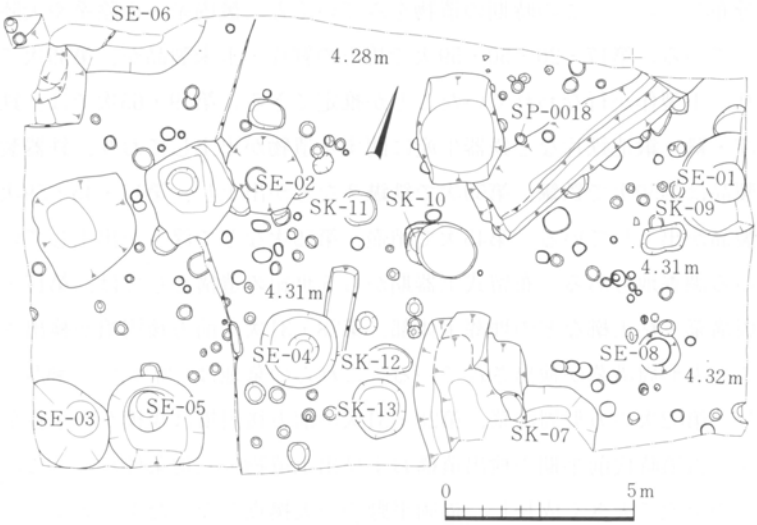


Fig. 4　第１面遺構配置図

Fig. 5　第１面遺構分布状況（東から）

第３章　調査の記録

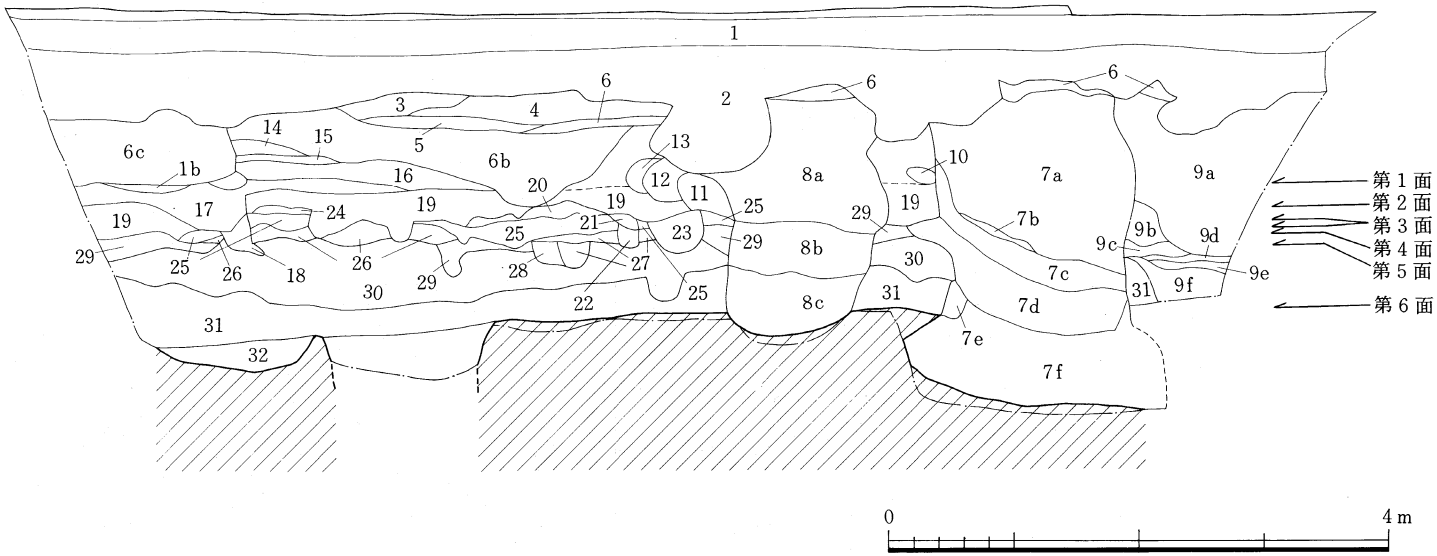
１．調査概要

駐車場ビル建設予定地は、大博通りの祇園六差路の西70mに位置し、北側は幅６mの道路に面し、東側は第65次に接し、西側・南側は民有地に接している。予定地の北側15×18mには地下埋設の施設があり、試掘調査の結果、遺構面はすべて破壊されていたため、調査対象から除去した。また、予定地南東部には調査事務所用プレハブを設置したため、10×15mの引きを取り、南西部および南側は民有地と接し、民有地と約１mの段差があり、ブロック塀があるため、それぞれ４mの引きを取り、東側12m、西側17m、東西23mの台形の調査区を設定した。この調査区終了後、遺構が北側に延びているため、埋設施設の際まで拡張して調査を行なった。

調査対象地は、駐車場として利用されていたためにアスファルト舗装が行なわれていた。調査は、表土層すき取り（１m前後）後に現代から近世にかけての攪乱・整地層が残存していたので、これらの層を重機で除去することから始めた。近世までの整地層を除去すると、焼土を多く含む茶褐色砂質土を基盤とする遺構が検出できたので、これを第１面として調査を実施した（標高4.28～4.35m）。以下、4.1m前後を第２面、標高４～3.75mを第３面とし、上部を３a面、下部を３b面、標高3.9～3.65mを第４面、標高3.8～3.4mを第５面（厚さ20cm前後の包含層）、標高3.35～3.1mの褐色砂層の下部を第６面として調査を実施した。

第１～３面では、近世から現代の井戸と中世前半期の井戸・土壙・柱穴など多数の遺構を検出し、中世の輸入陶磁器・土師器など多種多様な遺物が出土した。第４面では、古代から中世にかけての土壙・井戸・柱穴などの遺構を検出し、

Fig. 6　第59次調査地点遺構配置図



1.現代整地層
2.近・現代の攪乱、暗灰色砂質土(煉瓦・瓦・20cm程度の大石を多量に含む)
3.近代の攪乱、暗灰色砂質土(瓦・染付けを多量に含む)
4.近代の攪乱、暗灰色砂質土
5.暗灰色砂質土
6.黒褐色砂質土、淡黄色粘質土の層状整地層
6b.近・現代の攪乱、黒褐色土(瓦・ガラス瓶・砂利・染付け・煉瓦を多く含む)
6c.攪乱(炭多い)

SK-14 埋土
7a.褐灰色砂（砂粒粗い）
7b.暗灰色砂（焼土小ブロックを含む）
7c.灰褐色砂（砂粒粗く、焼土・炭化物の小片含む）

SK-14 埋土
7d.暗灰色砂（灰色土ブロック・焼土・炭化物を多く含む）
7e.暗灰色砂・茶褐色砂混じり
7f.黒褐色砂（炭化物、黄褐色砂小ブロック状に含む）

8a.茶褐色砂質土（炭化物・焼土を含む）
8b.暗茶褐色砂質土（炭化物・黄褐色砂ブロックを含む）
8c.黒褐色砂・黄褐色砂ブロック状に混じる（炭化物を含む）
9a.暗灰色砂質土、褐色味をおびる（炭化物・焼土を多量に含む）
9b.灰褐色砂・淡黄灰色砂、層状堆積層（炭化物を含む）
9c.暗灰色砂（炭化物、わずかに焼土を含む）
9d.暗黄褐色砂
9e.暗灰色砂（炭化物を含む）
9f.褐灰色砂

10.暗灰色砂質土（炭化物を含む）
11.黒灰色砂質土、茶褐色砂混じり（炭化物・焼土を含む）
12.暗茶褐色砂質土（炭化物・焼土を含む）
13.暗茶褐色砂質土（12層より炭化物・焼土を多く含む）
14.灰褐色砂質土
15.褐灰色砂質土（炭化物・焼土を含む）
16.暗茶褐色砂質土（粘土が多く混じる）縞状堆積
17.黒灰色砂質土
18.黒灰色砂質土
19.茶褐色砂質土（焼土を多く含む）
20.茶灰色砂質土

21.暗灰色砂（焼土を含む）
22.黒灰色砂
23.暗灰色砂（炭化物・焼土をわずかに含む）
24.焼土層
25.暗褐灰色砂
26.黒灰色砂
27.暗灰色砂（炭化物・焼土を含む）
28.黒灰色砂質土（炭化物・焼土を含む）
29.暗灰色強い茶褐色砂質土（炭化物・焼土・白色粘土を含む）
30.暗茶褐色土・弱粘質砂・灰色砂の縞状堆積
31.暗褐色砂
古代包含層
32.黄褐色砂（赤味をおびる）遺構埋土
33.黄褐色砂（地山）

Fig. 7　調査区東壁土層断面実測図

瓦器・土師器などの遺物が出土した。第５面では、遺構は検出できなかったが、奈良時代の須恵器・土師器と金属器が出土した。第６面では、古墳時代の初期と６世紀の竪穴式住居址を検出し、古式土師器・須恵器・鞴・鉄器・鉄滓・石製品などの遺物が出土した。検出遺構については、井戸をSE、土壙をSK、溝状遺構をSD、竪穴式住居址をSCと遺構記号を使用し、検出順に通し番号を付した（例　SE－01……SK－07……SC－41……SD－59）。なお、柱穴はSPの遺構記号を使用し、検出順に４桁の通し番号を付した。なお、本書中では、遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物については、金属器は895700001から、土器は895700501から通し番号を付し登録番号としているが、本書では遺構および各検出面ごとに通し番号を付し、金属器はK、石製品はSt、鉄滓はSrを番号の頭に付した。

２．層序について

本調査地は10cm前後のアスファルト舗装がされており、その下に60cm前後の現代の整地層、第３～17層は近世の整地層で、ここまで重機を使用し除去した。

第19層は調査区全域に分布しており、ほぼ水平の層をなしている。この層の上面を第１面とした。第20～24層は調査区東壁でみるように、ほとんど遺構であり面的な広がりをもたない。調査においては切り合い関係を重視し、複雑に遺構が切り合うため上から順に第２～３b面に便宜的に分け、調査を実施した。

第25～27・29層は黒灰から暗褐色の砂層で、炭化部・焼土を含み、同一層群をなし、この上面を第４面とし調査を実施した。この第４面をなす層群は、わずかに南へ傾斜している。

第30層は調査区全域に分布し、第４面と同様南へ傾斜している。この層は30～70cmの厚さをもち、検出面から20cm前後まで奈良時代の遺物を包含し、下部は無遺物で、断面でみると縦縞がみられる。

第31層は第30層と整合堆積をなし、やや南へ傾斜し、まれに柱穴、皿状の落ち込みがあるが、第30層が詰まっており、遺構と断定できなかった。第31層の下部で、竪穴式住居址・柱穴が検出できたので第６面とした。第31層の上部は、古墳時代後期（６C末～７C前半）の遺物を包含している。古式土師器の竪穴式住居址は、南へわずかに傾斜をもつ黄褐色砂層の上面で検出された。第33層は30cm以下になっていくと白味が強くなる。調査終了後、下部遺構の有無を確認するため標高1.5m前後まで掘削したが、遺構も遺物も検出できなかった。

3．第１～３面の調査（Fig. 4・5・8～12）

第１面は、近世までの整地層を除去した面（標高4.35～4.28m）である。この面の西側５m幅は、表土すき取り時に第２面の深さまで除去している。まず、攪乱およびSE－01・02・06・08（井戸）、SK－09（土壙）の現代遺構を除去することから始め、遺構確認作業を行なった。検出遺構のうち、SE－03、SK－07は近世のもので、中世のものは井戸２基（SE－04・05）、土壙３基（SK－11～13）と116基の柱穴である。

第２面は、第１面で平面プランが不明瞭な遺構を検出するために20cm前後下げた標高4.1m

Fig. 8　第２面遺構分布状況（東から）

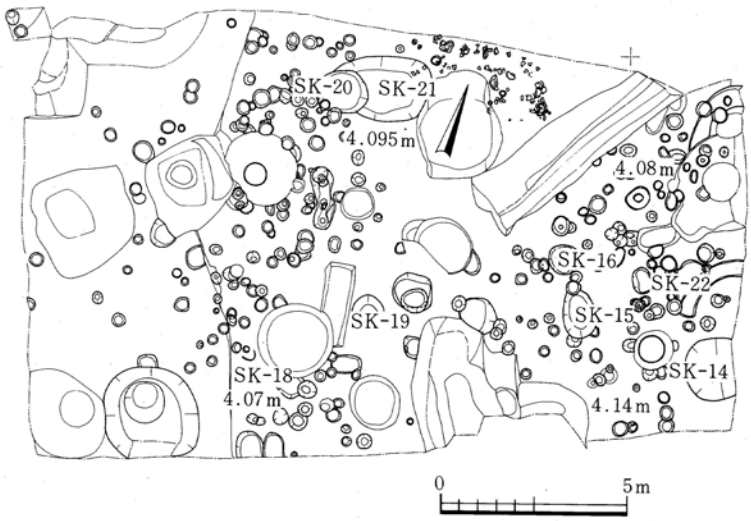


Fig. 9　第２面遺構配置図

前後の面である。第２面検出の遺構は、土壙10基（SK－14 ～ 16・18～24）と柱穴200個（SP－0117～0316）である。

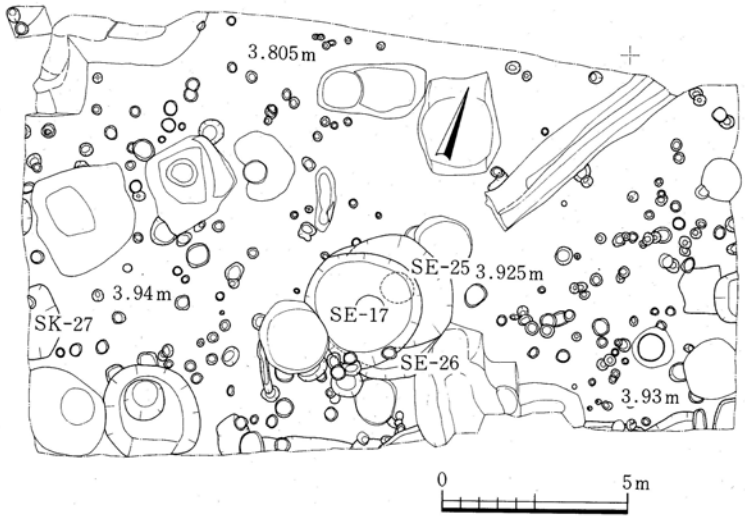


Fig.10　第３a面遺構配置図

第３a面は、第２面で平面プランが不明瞭な遺構を検出するために20㎝前後下げた標高3.9m前後の面である。第３a面検出遺構は、井戸３基（SE－17・25・26）、土壙１基（SK－27）と柱穴146個（SP－0317～0325・0328～0464）である。

第３b面は、第３a面を10㎝前後下げた標高3.8m前後の面で、土壙１基（SK－28）と柱穴77個（SP－0466～0542）を検出した。

第１面検出面と第３b面検出面は55㎝前後のレベル差があるが、検出遺構の時期差はほとんど

Fig.11　第３面遺構分布状況（西から）

なく、遺構切り合いが連続しており、明瞭に生活面と考えられる土層面もとらえることができなかった。第1～3面検出遺構は同一層群中のもので、中世前半期のものといえよう。

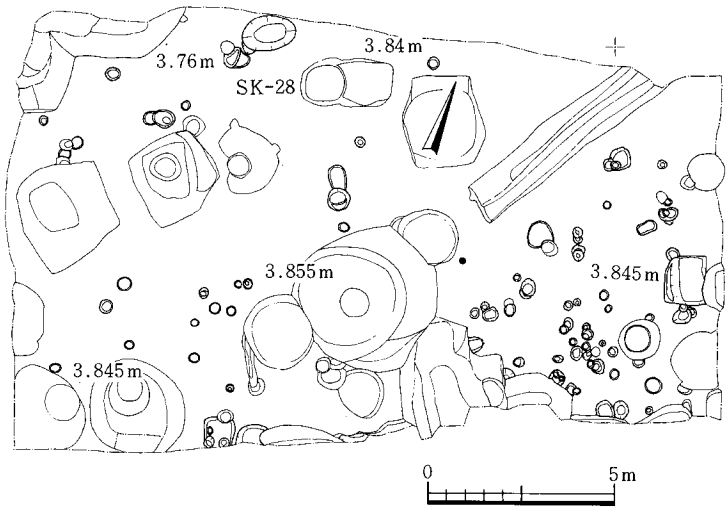


Fig.12　第3ｂ面遺構配置図

1）近世および現代遺構と出土遺物

SE-02（Fig.14・17）

竜泉窯青磁小皿を検出。オリーブ色ガラス質釉を厚く施す。他に12世紀後半期の竜泉窯青磁共伴。

SE-06（Fig.13～15）

1の土師器は、高台付き小皿で、糸切り底。2も糸切り底坏。3～8は青磁。4はオリーブ色透明釉がかかり、外底は碁笥底状。6は初期竜泉窯製品で、外面はヘラ刻桟状文、内面は片切彫り花文ののち点綴文を煩瑣にいれ、光沢のある緑色透明釉をかける。9・10は白磁。11は無釉陶器壺で、黄褐色を呈し、糸切り底。12は茶色釉耳付き壺、14も無釉で、赤褐色の精製粘質土であり、底部は早い回転であげ底状に削る。15・16は瓦器椀で、16の口縁内側には沈線が巡り、磨きは比較的丁寧である。18～21は竜泉窯青磁。22は石鍋。

SK-09（Fig.21）

1・2とも白磁碗で、2は周囲を打ち欠き、外底は平滑となり転用硯であろうか。

2）第1面検出遺構

SE-05（Fig.16）

本井戸は調査区の南西部に位置し、SE－03に切られている。径2.5m、深さ3mの平面形円形で、深鉢状の掘り方をもち、やや北寄りに60cm前後の木枠組みの井筒をもっている。井筒底面の標高は50cmである。

SK-10

本土壙は調査区の中央に位置し、径1.5mの土壙に切られている。1m前後の隅丸方形を呈する土壙で40cm前後の遺存である。

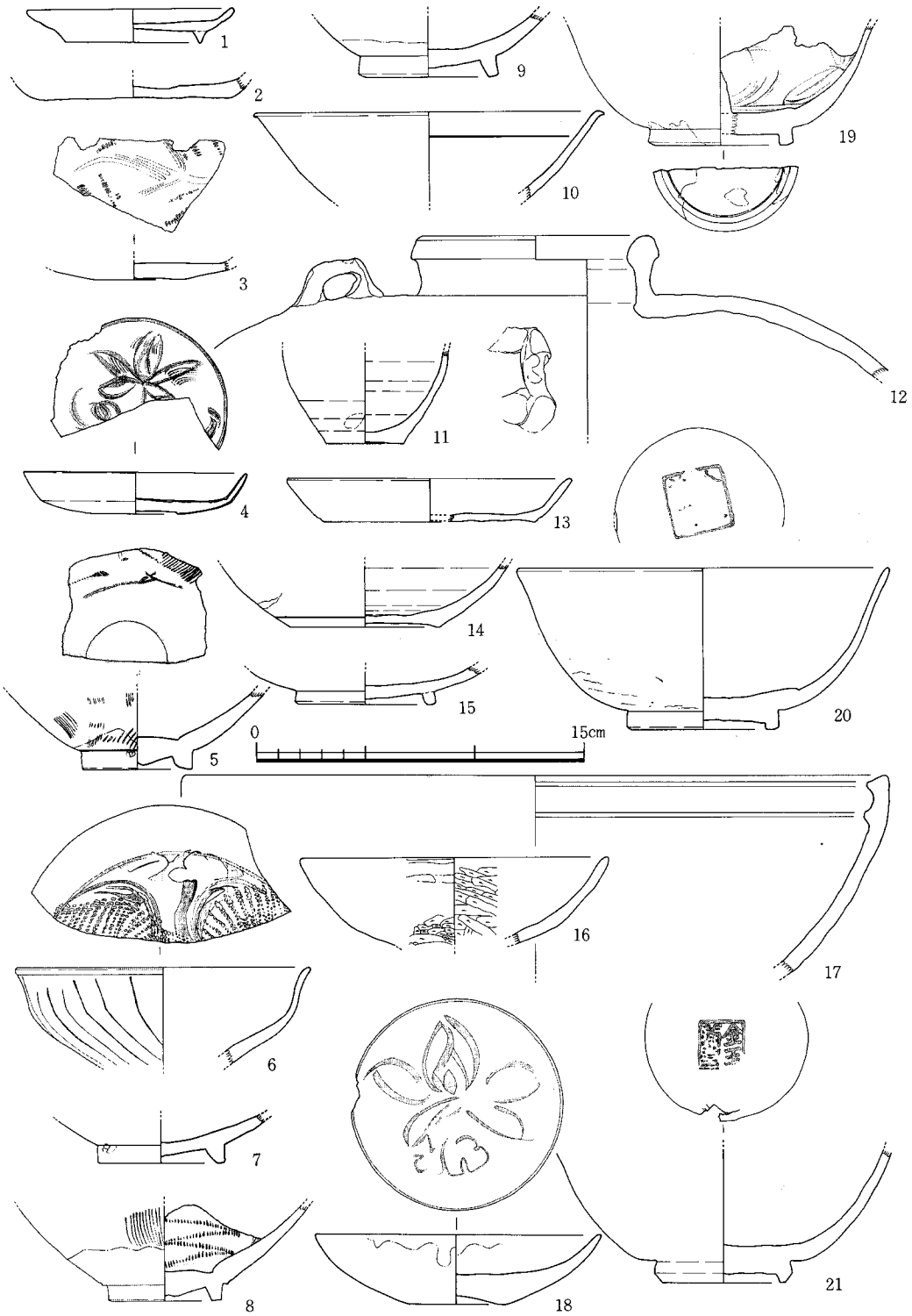


Fig.13　第６号井戸出土遺物実測図

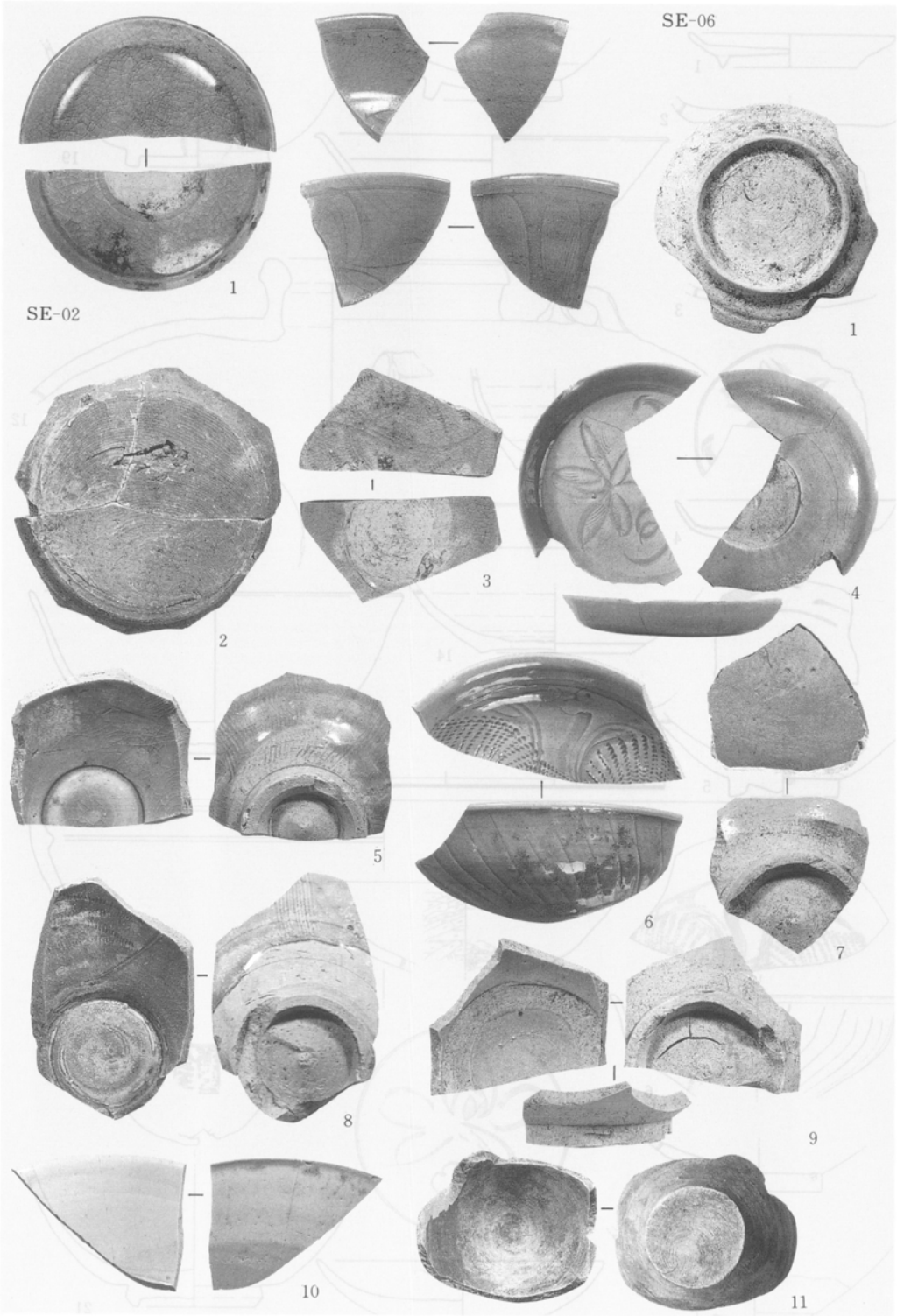


Fig.14　第２・６号井戸出土遺物

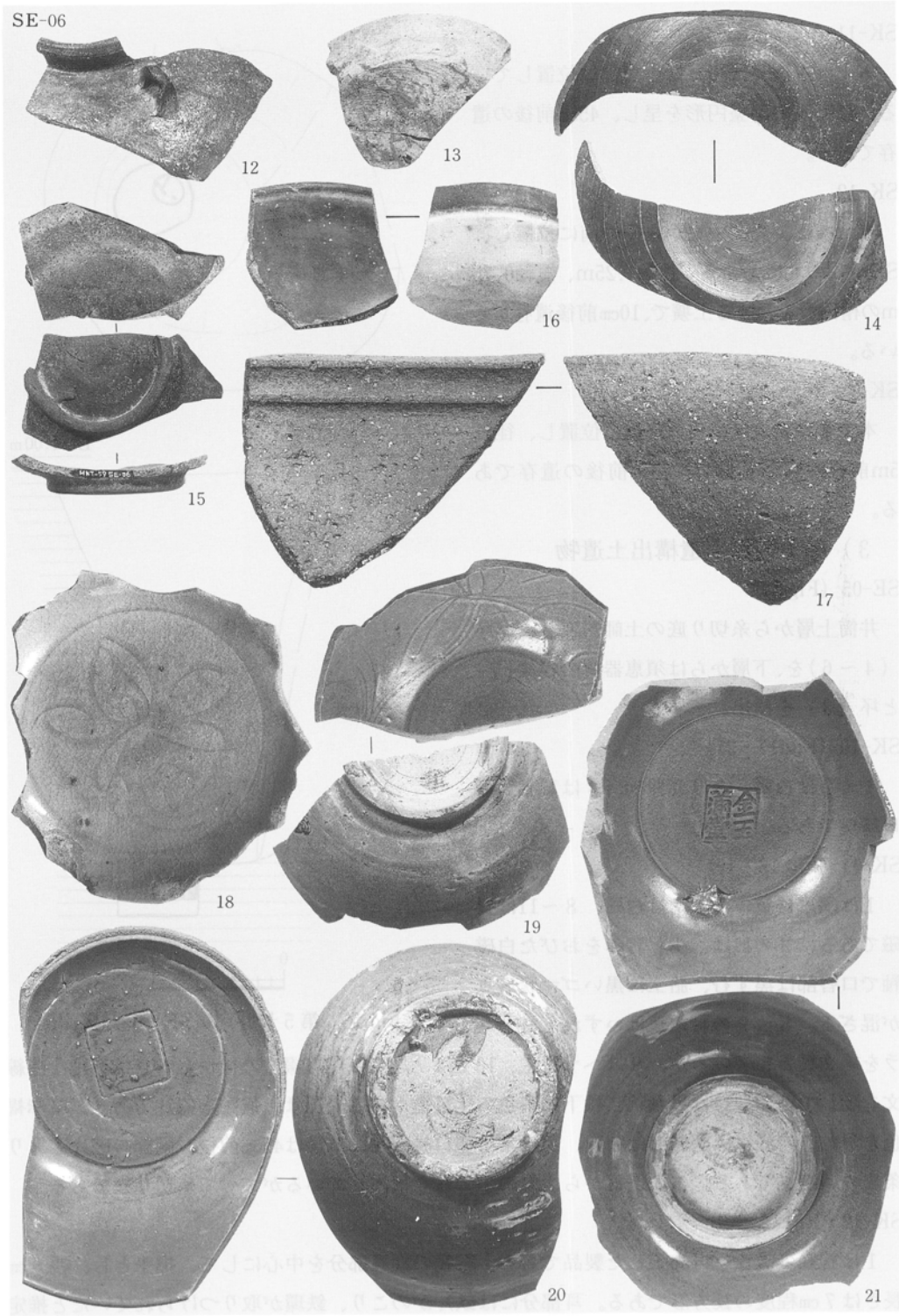


Fig.15　第６号井戸出土遺物

SK-11

本土壙も調査区のほぼ中央部に位置している。径95cmの不整円形を呈し、45cm前後の遺存である。

SK-12

本土壙は調査区中央からやや南に位置し、SK－13の北にあたる。長軸1.25m、短軸0.75mの楕円形を呈する土壙で、10cm前後遺存している。

SK-13

本土壙は調査区中央の南端に位置し、径1.5m前後の円形を呈し、40cm前後の遺存である。

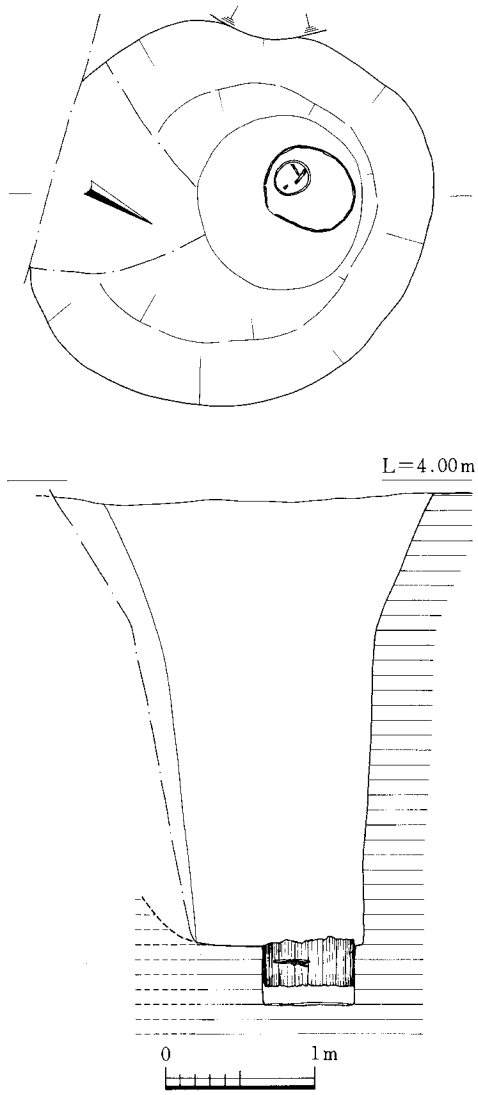


Fig.16　第５号井戸（SE—05）実測図

３）第１面検出遺構出土遺物

SE-05（Fig.17）

井筒上層から糸切り底の土師器皿および坏（４～６）を、下層からは須恵器質の捏鉢（７）と坏（８）を検出。

SK-10（Fig.17・21）

１・２は白磁。３は瓦器椀、４は黄釉鍔形口縁盤である。

SK-11（Fig.18・19）

１は須恵器質、２～７は白磁、８～11は青磁である。２の皿は、少し青みをおびた白磁釉で口唇部は黒ずむ、胎土に黒いゴマ状斑点が混ざる。８～９の青磁皿はいずれも櫛とヘラを施文具としているが、９はヘラを主、10では「之」字形点綴文の後からヘラで乱雑な曲線文を配している。11は黒釉碗、釉下に茶色の化粧塗がある。13は、無釉陶器鉢であり、暗赤褐色を呈し、内底には磨滅痕はない。14は常滑壺口縁部で、口径は45cm前後、胴部の破片もあり、条痕の叩打文である。この遺構から少量の土師器を検出しているがすべて糸切り底である。

SK-12（Fig.17・19）

１は石鍋の破片を再加工した製品である。石鍋の縦耳部分を中心にして、把手とし、幅６cm、長さは７cm程度の長方形である。耳部分には鉄片がのこり、鉄環が取りつけられていたと推定

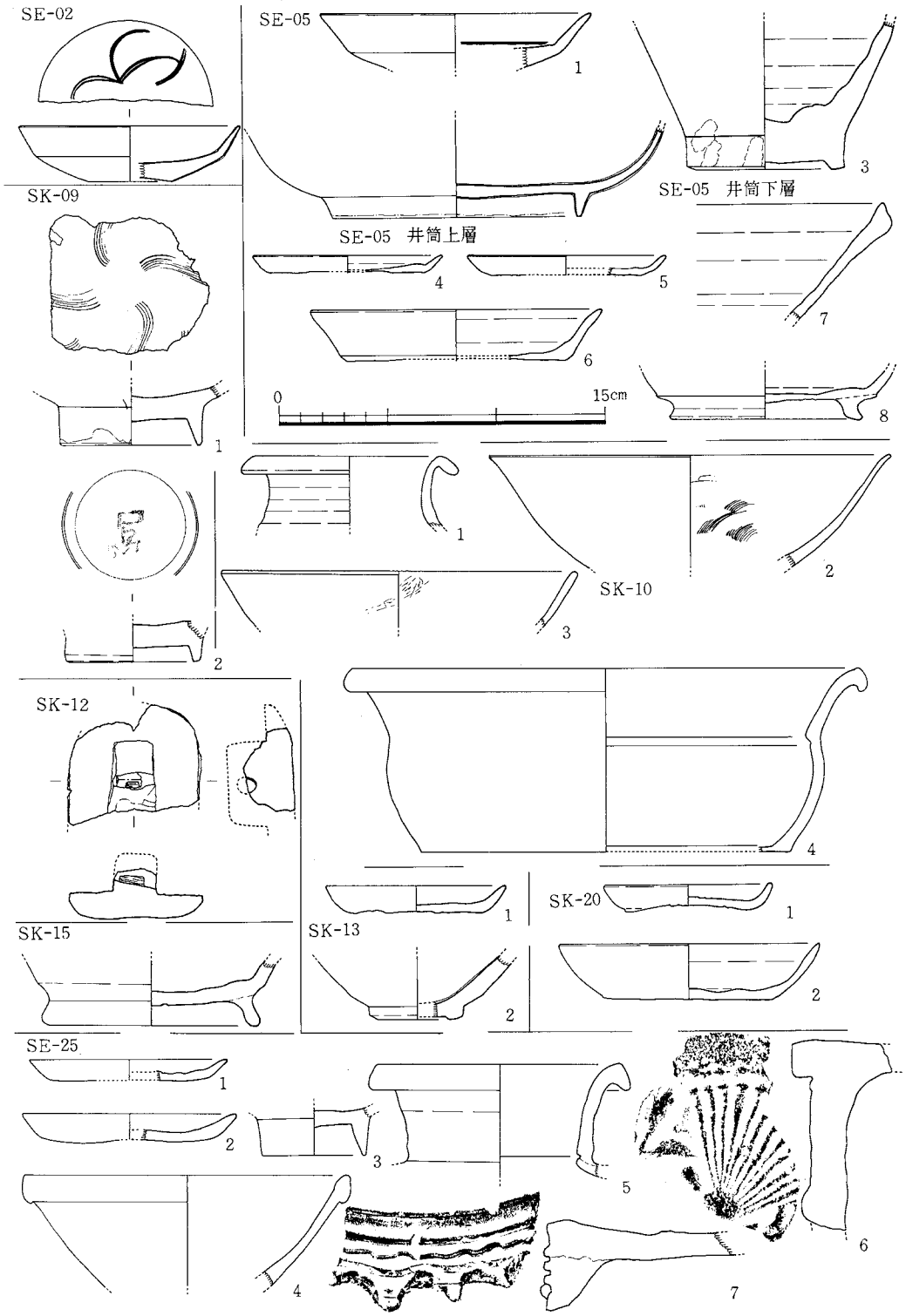


Fig.17　第２・５・25号井戸および第９・10・12・13・15・20号土壙出土遺物実測図

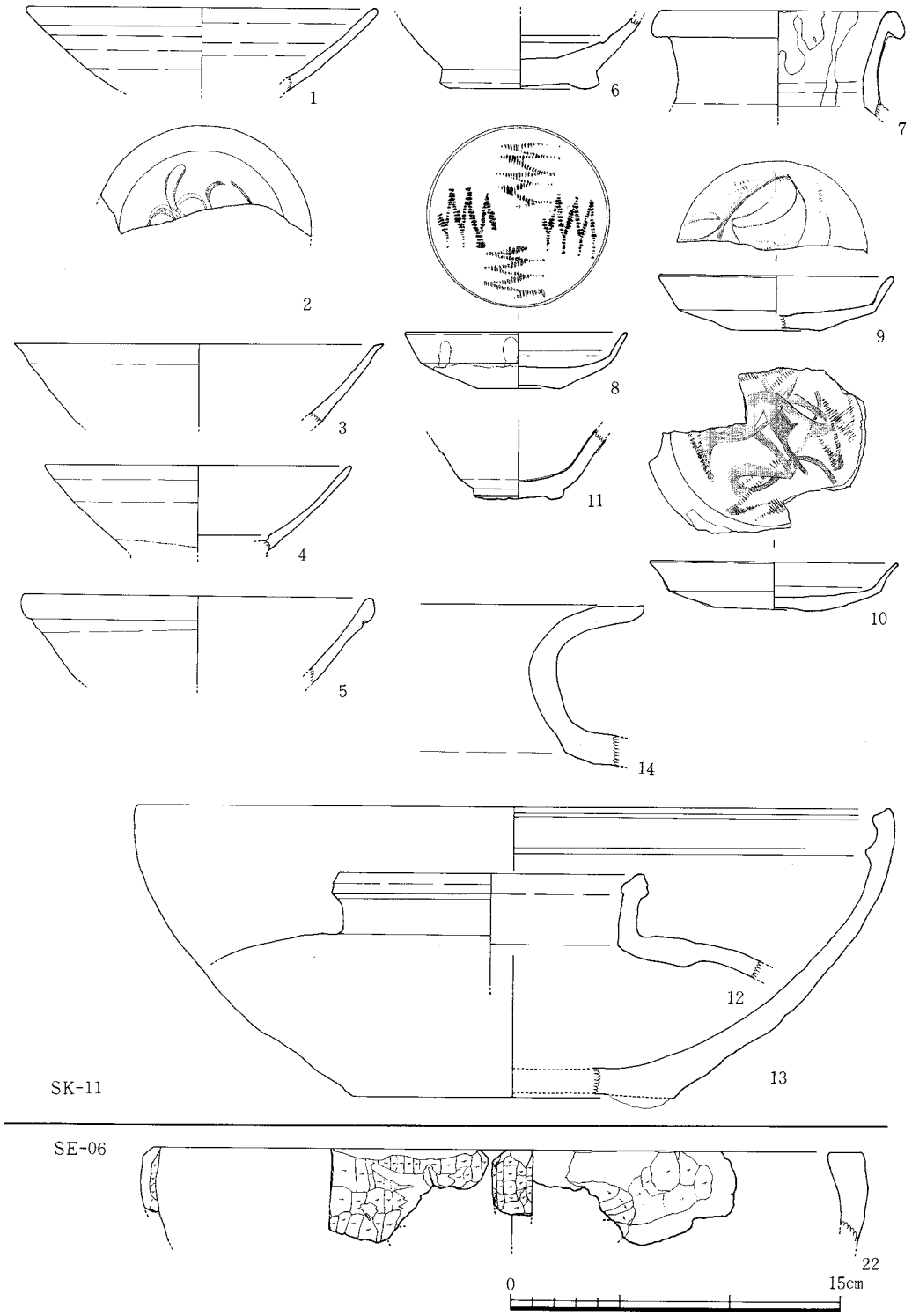


Fig.18　第11号土壙および第６号井戸出土遺物実測図

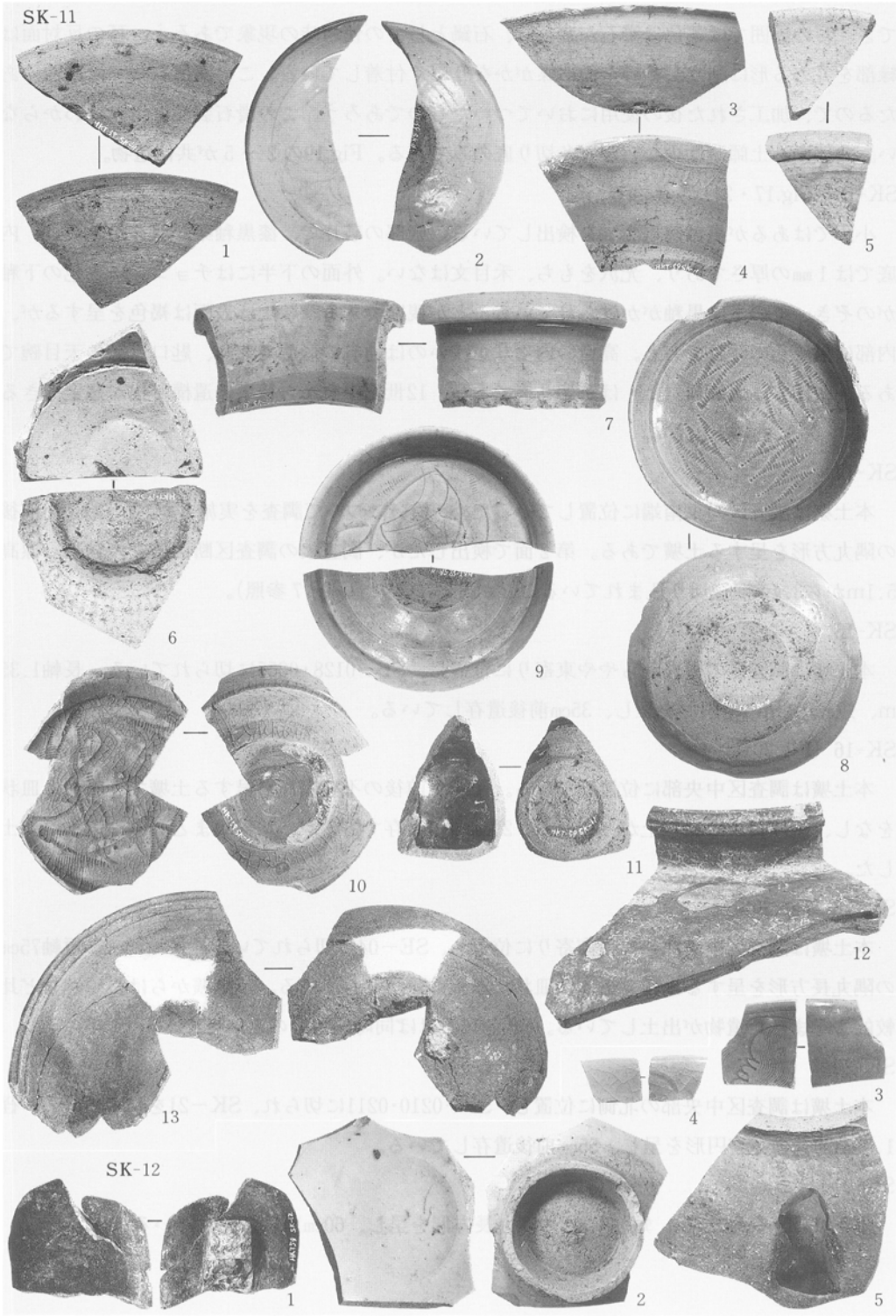


Fig.19　第11・12号土壙出土遺物

でき、耳の周囲では茶色に滑石が変色し、石鍋としての使用時の現象であろう。耳の反対面は縁部を丸める形に削り、その全面に煤がかなり厚く付着している。この面は石鍋では内面にあたるので、加工された後の使用においてついたものであろう。この滑石製品の用途はわからない。共伴する土師器は少ないが、糸切り底のみである。Fig.19の２～５が共伴遺物。

SK-13（Fig.17・21）

小片ではあるが黒釉碗（２）を検出している。底部の破片で、漆黒釉薬が厚くかけられ、内底では１㎜の厚さであり、光沢をもち、禾目文はない。外面の下半にはチョコレート色の下釉がのぞき、その上に黒釉がかけられていることが観察できる。胎土は表面は褐色を呈するが、内部は黒灰色の砂目である。高台の内ぐりが浅いのは通有の形態であり、匙口口縁の天目碗である。共伴する土師器（１）は糸切り底であり、12世紀中葉から後半の遺構年代が想定できる。

４）第２面検出遺構

SK-14

本土壙は調査区の東南端に位置しているため、約⅔について調査を実施した。一辺1.5m前後の隅丸方形を呈する土壙である。第２面で検出したが、調査後の調査区断面精査の結果、標高5.1mから3.4m前後切り込まれていることが確認できた（Fig.７参照）。

SK-15

本土壙は調査区の中央からやや東寄りに位置し、SP－0128・0255に切られている。長軸1.35m、短軸0.9mの楕円形を呈し、35㎝前後遺存している。

SK-16（Fig.20）

本土壙は調査区中央部に位置している。径80㎝前後の不整円形を呈する土壙で、床面は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。20㎝弱の遺存であるが、比較的まとまった遺物が出土した。

SK-18（Fig.20）

本土壙は調査区中央部のやや南寄りに位置し、SE－04に切られている。長軸85㎝、短軸75㎝の隅丸長方形を呈する土壙である。皿状に25㎝前後遺存している。本土壙からは白磁碗など比較的まとまった遺物が出土している。SK－16とほぼ同時期のものといえよう。

SK-20

本土壙は調査区中央部の北側に位置し、SP－0210・0211に切られ、SK－21を切っている。径1.35m前後の不整円形を呈し、55㎝前後遺存している。

SK-21

本土壙は、長軸2.5m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈し、60㎝前後遺存している。

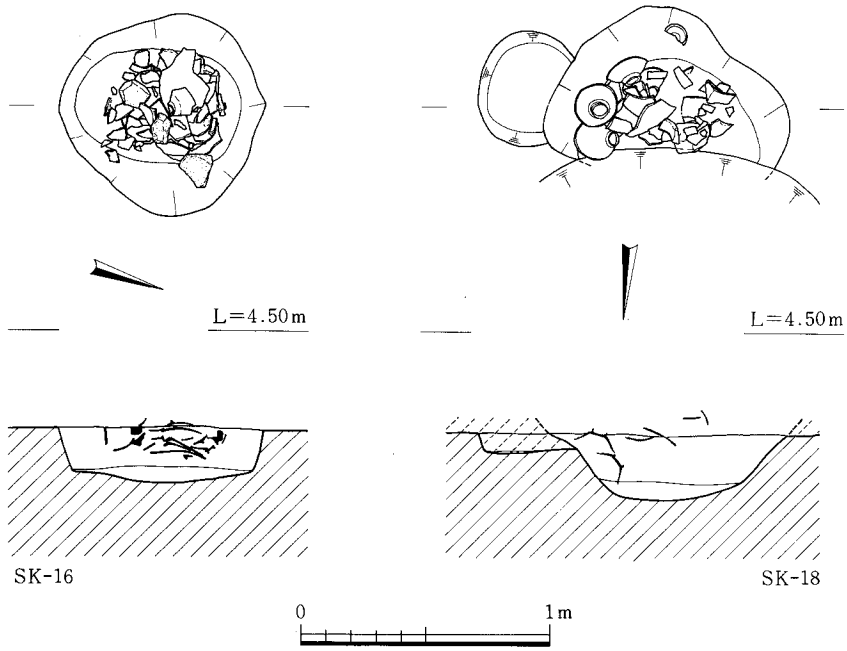


Fig.20　第16・18号土壙（SK—16・18）実測図

５）第３面検出遺構出土遺物

SK-14（Fig.21・22）

土師器皿のうち、３・４・６・７はヘラ切り、他は糸切りである。両者とも調整は同じで、底部には板状圧痕がある。土師器丸底坏のうち、５は体部中位に鈍い稜をもち反転する。11は高台付椀で糸切り痕に輪高台を貼付している。12～17は瓦器椀で、12・14・16は外面はヨコナデ、13・15は高台脇まで乱雑な磨き、17の体部下半はヘラ磨きし高台付近には指頭痕がみられる。18～21はいずれも白磁碗であり、青磁は検出していない。18は内底に櫛描文をいれ、わずかに緑色をおびた灰白色釉が高台付近までかけられ、ピンポールが少しみられる。20も類似した釉調と櫛描文で、高台高さ1.5cm、口縁は外反する。内底に圏線を巡らしている。

12世紀の前半を中心とした年代を想定する。

SK-15（Fig.21）

図示したのは土師器椀で、高台径9.3cmをはかり、褐色の精製土を用いている。高台は約１cmと高く張り出している。内底は凹まし、ナデ調整、体部はわずかに残存し、直線的な形態のようである。これに共伴して低い高台をもつ黒色土器Aの底部破片がある。

SK-16（Fig.23・24）

土師器がなく中国陶磁器を相当量検出した。１～６は白磁である。１・２はよく似た皿で、平底は施釉後に釉薬を削りとり、１には径3.5cmほどの黄色円圏の塾餅痕がのこる。内底の花文

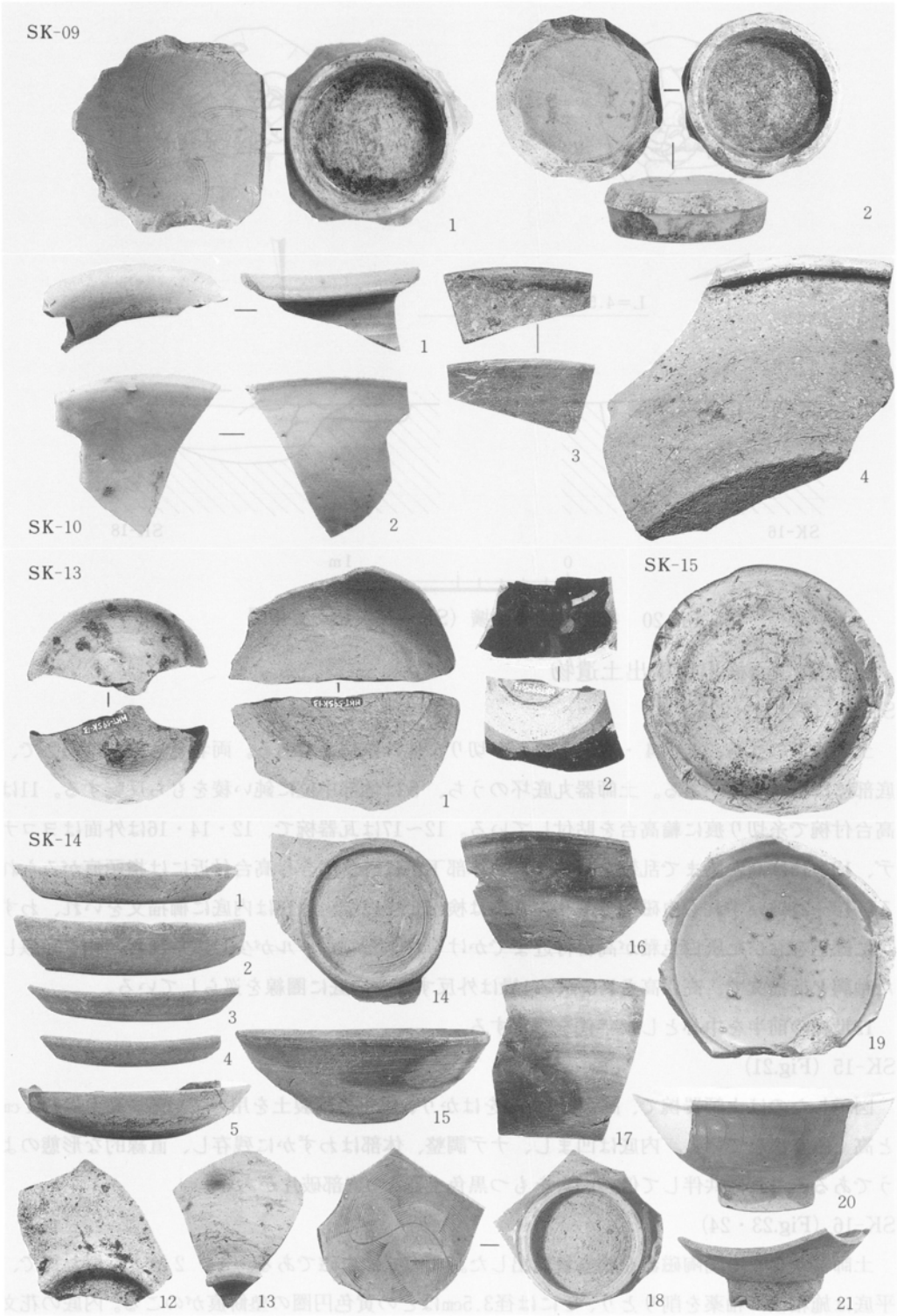


Fig.21　第９・10・13～15号土壙出土遺物

SK-14

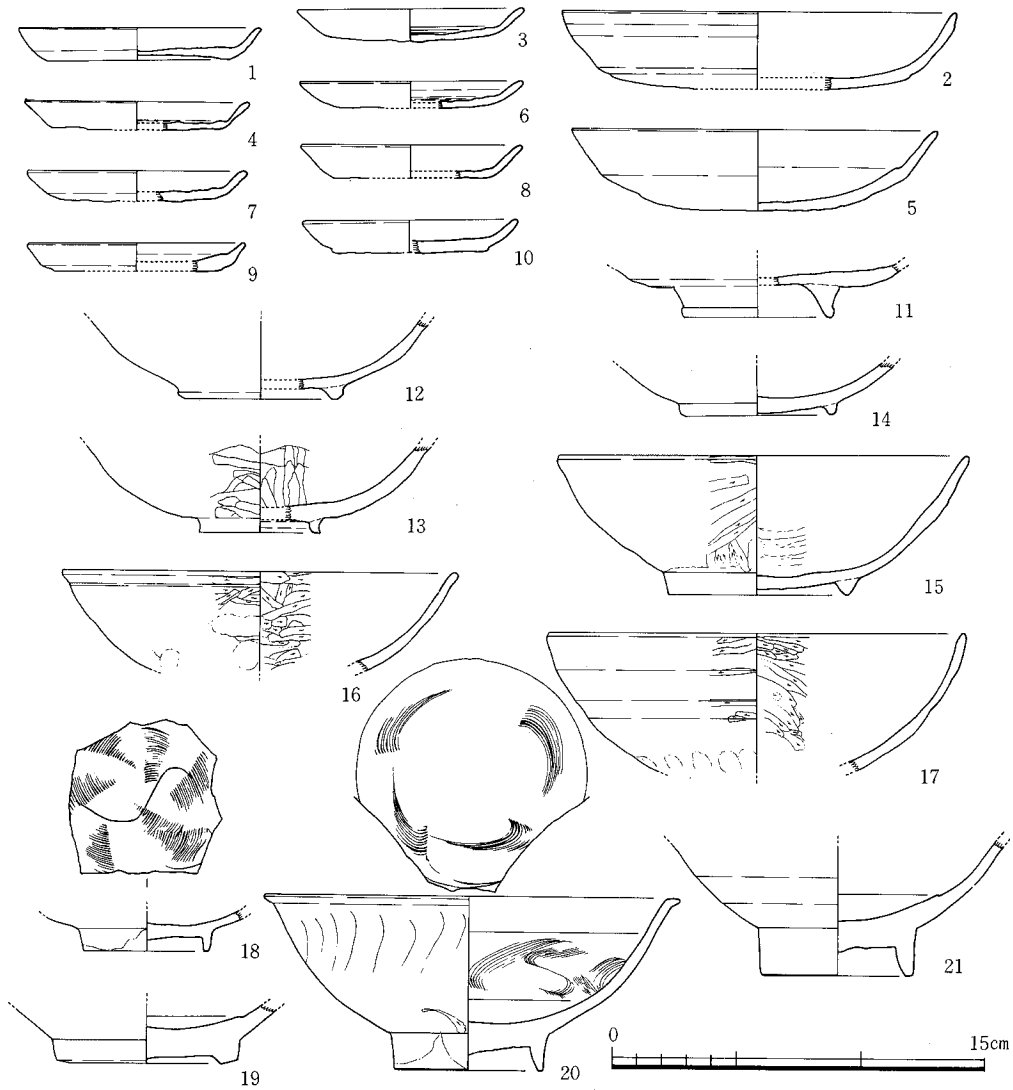


Fig.22　第14号土壙出土遺物実測図

は比較的丁寧な片切彫りで、わずかにうす緑色をおびた透明灰白色釉がかけられている。3～5の碗は微妙な相違はあるが、胎土、釉調、器形など共通しており同一窯の製品とみたい。釉薬は高台をもっての浸し掛けで、腰付近以下は露胎、焼き台とは畳付で接している。高台削り出しの際、体部側を少し深く削るため圏線上にのこり、外底中央を小さく兜巾状に削る点などの特徴が共通している。白磁碗はこの形式のみを検出した。7以下は青磁。7と8はいわゆる同安窯系青磁で、8の碗の高台は深く肉厚に削り、外底中央部は兜巾状にする。黄緑色釉下の施文は櫛文の後にヘラ描文がなされ、初期竜泉窯のあり方と逆転している。9はガラス質の釉薬、内底見込みの形態、外底の兜巾状削り残しは8の特徴と類似するが、高台は低く広く削り出さ

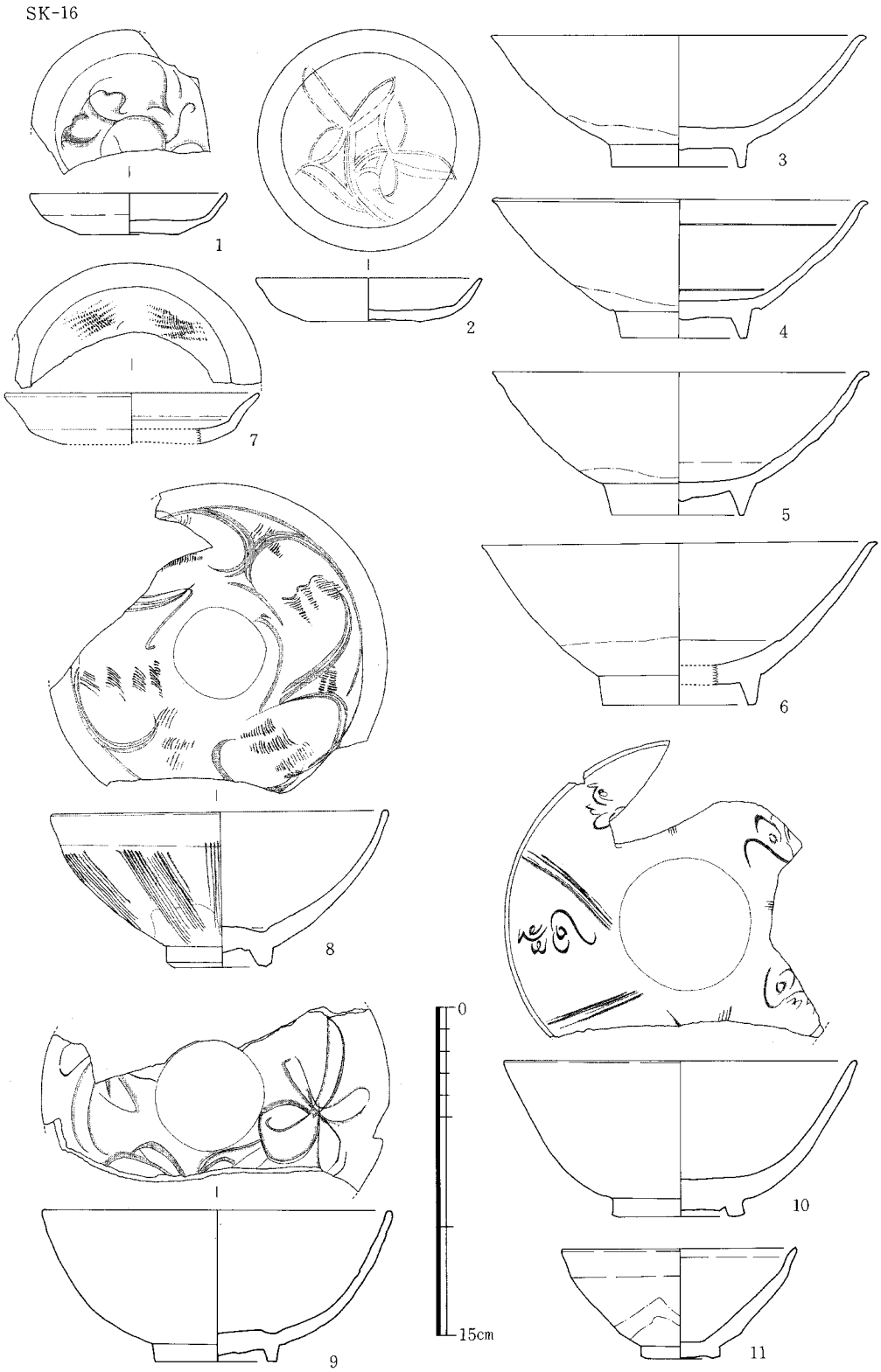


Fig.23　第16号土壙出土土器実測図

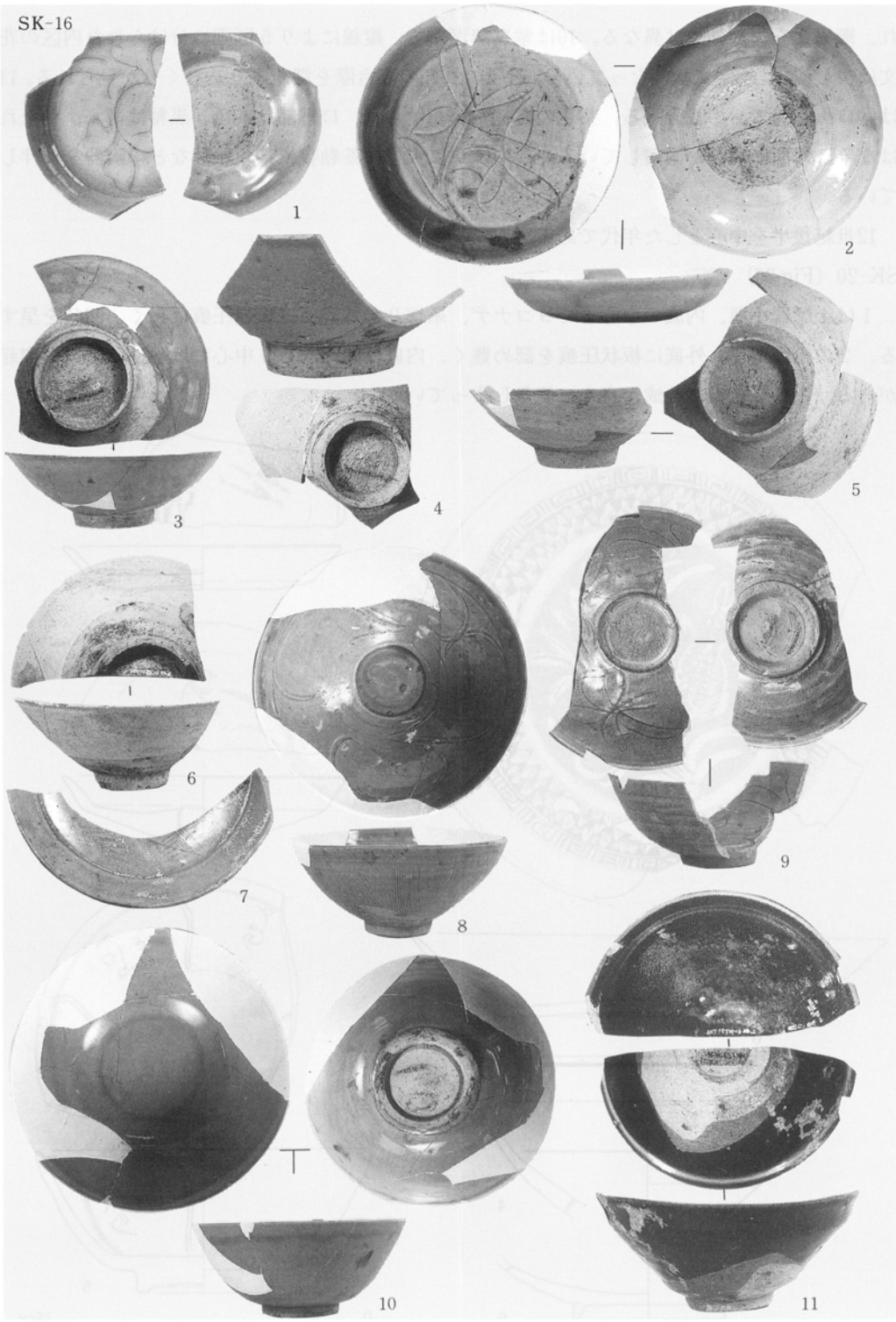


Fig.24　第16号土壙出土遺物

れ、櫛描文を欠き施文は異なる。10は竜泉窯青磁で、縦線により５区画に分けられた内区の花文は少し便化しS字文状になっている。露胎の外底の高台際を深く削り込むくせが見られる。11は匙口黒釉碗で、半裁分残る。茶色の化粧釉がかけられ、口唇部は茶色、黒釉は薄く、釉たれはない。外面に窯滓が固着している。このほかに大型緑茶釉甕、茶色釉鉢などの陶器を共伴している。

12世紀後半を中心とした年代である。

SK-20（Fig.26）

１は土師器小皿、内底の中心までヨコナデ、糸切りの外底には板状圧痕はなく、凹状を呈する。２の土師器坏も外底に板状圧痕を認め難く、内底は凹凸があり中心にはヘソ状に低い突起がある。１・２ともに焼成が良く、焼きしまっている。

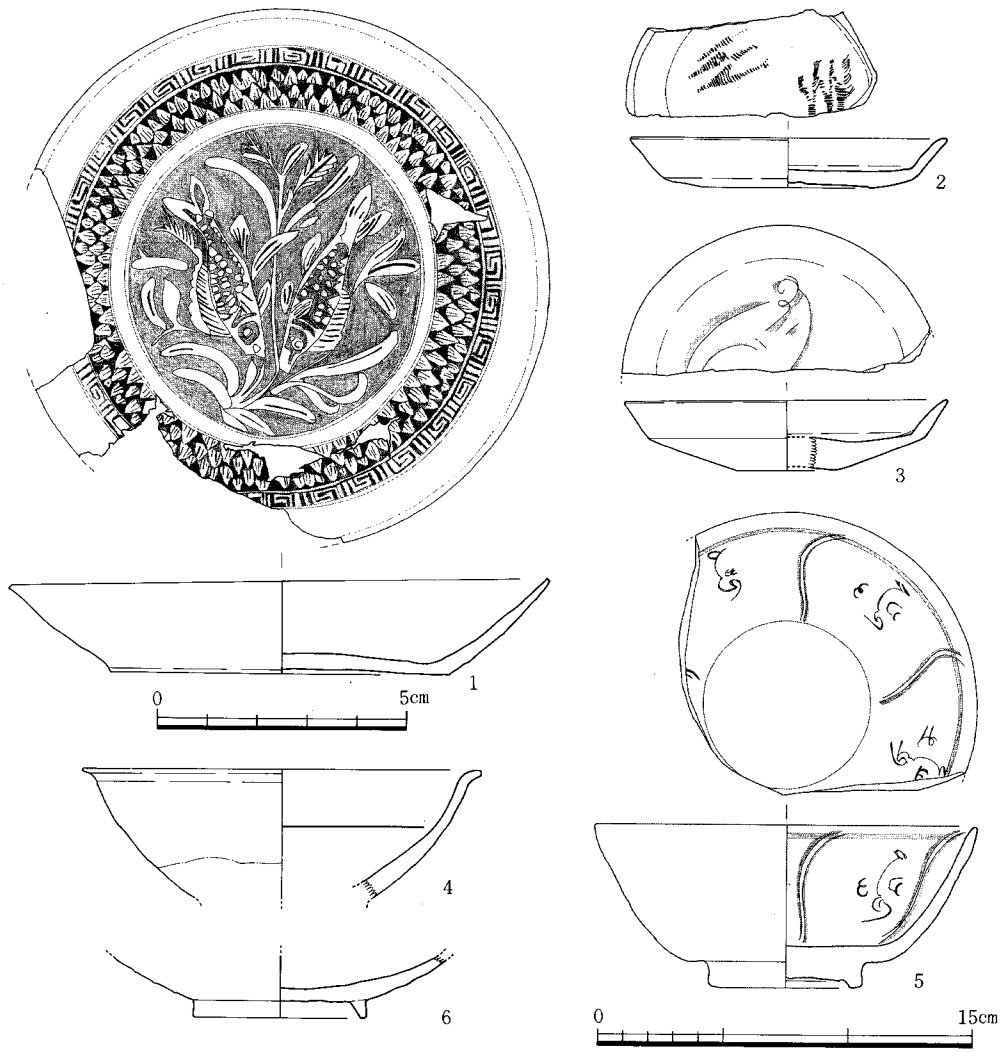


Fig.25　第21号土壙出土遺物実測図

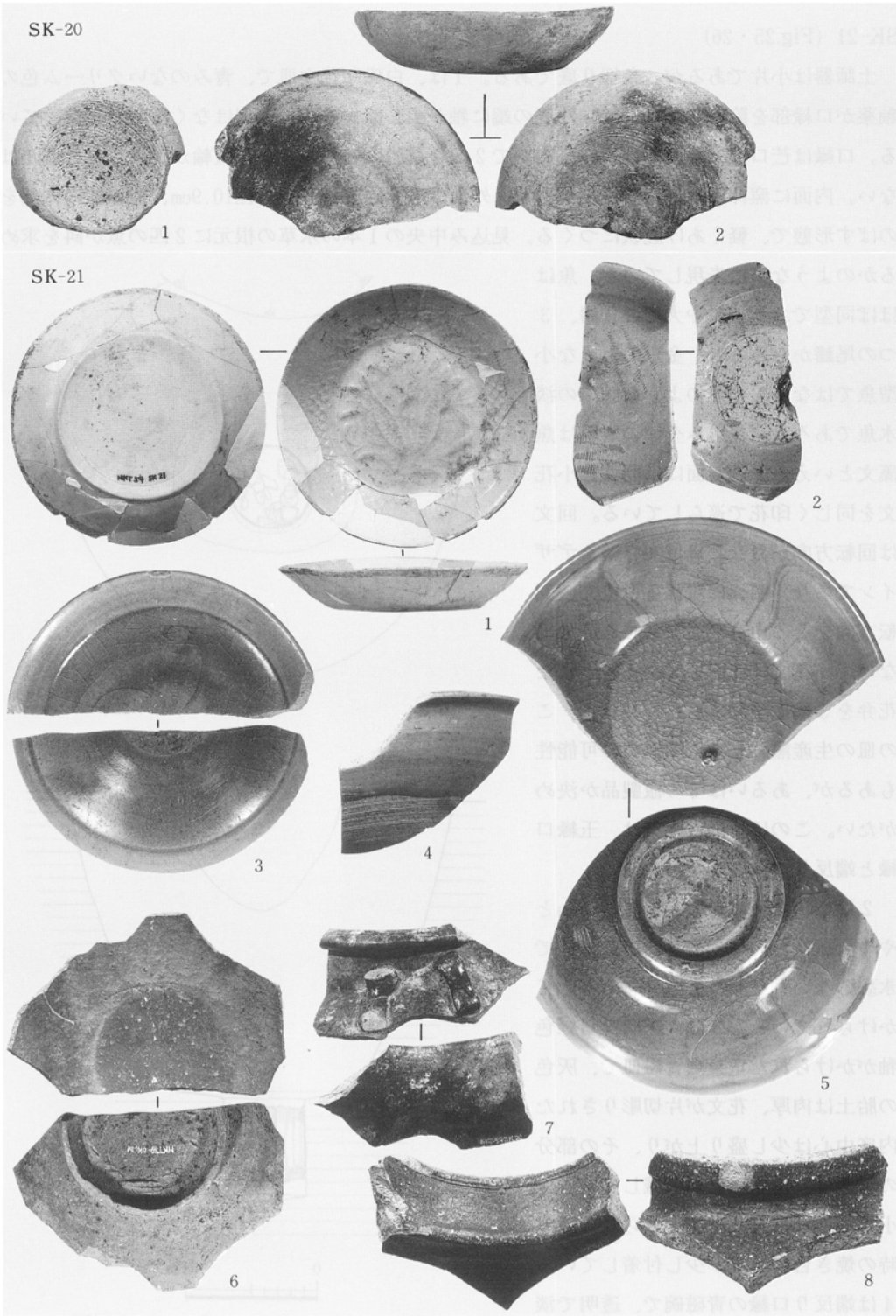


Fig.26　第20・21号土壙出土遺物

SK-21（Fig.25・26）

土師器は小片であるが、糸切り底である。1は、白磁印花文皿で、青みのないクリーム色の釉薬が口縁部を除いてかけられ、外底の端に釉が少し溜まるが、氷裂はなく滑らかに溶けている。口縁は芒口で、外面で幅5㎜、内側で2㎜を露胎にしているが、覆輪が付けられた痕跡はない。内面に窯滓とみられる汚れがあり、外面にも認められる。口径10.9cm、直線的に体部をのばす形態で、軽くあげ底状につくる。見込み中央の1本の水草の根元に2匹の魚が餌を求めるかのような姿に表現している。魚はほぼ同型であり、やや大型の背鰭、3つの尾鰭からみると、金魚のような小型魚ではなく、桂魚のような江南の淡水魚であろう。見込み全体の表現は魚藻文といえる。内側面には回文と小花文を同じく印花で巡らしている。回文は回転方向がおなじ単位文を繋ぐデザインであり、明代に現れる単位文の回転方向をその中心で逆転させる形ではない。小花文は花脈を2～4本いれた花弁を3段に重ねて巡らしている。この皿の生産窯として景徳鎮窯の可能性もあるが、あるいはその倣製品か決めがたい。このほかに白磁では、玉縁口縁と端反り口縁の碗がある。

2は櫛描文青磁皿で、口径12.3cmとやや大振り、肉厚であり、淡黄緑色で氷裂のない釉薬が外底部分をのぞいてかけられている。3は、透明な暗緑色釉がかけられた竜泉窯青磁皿で、灰色の胎土は肉厚、花文が片切彫りされた内底中心は少し盛り上がり、その部分の釉薬は、使用のため摩滅している。小さい外底は釉薬を掻きとられ、焼成時の焼き台の黒点が少し付着している。4は端反り口縁の青磁碗で、透明で淡

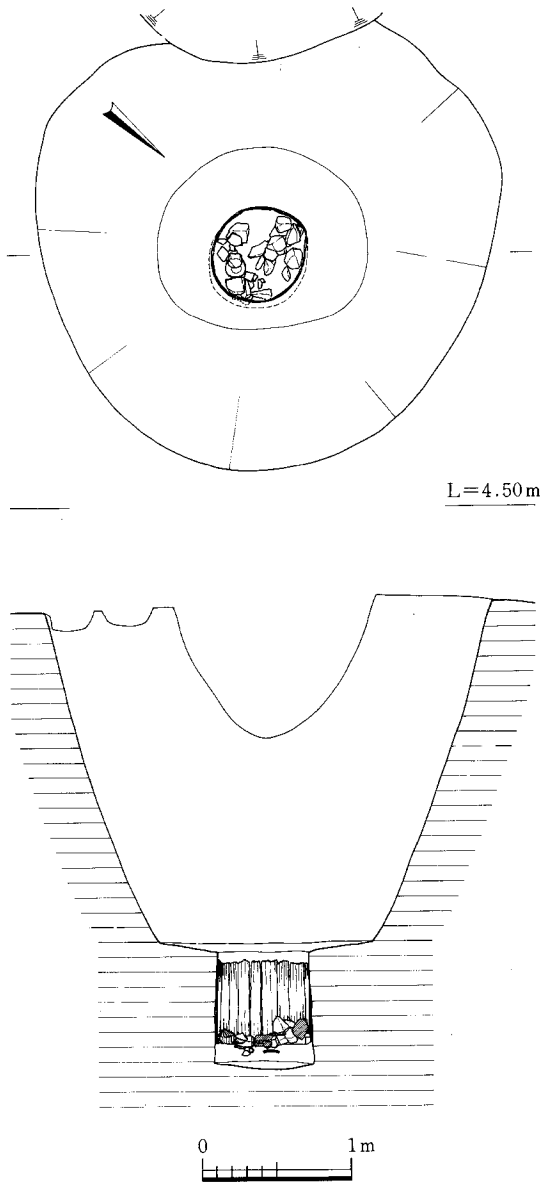


Fig.27　第17号井戸（SE—17）実測図

緑色、氷裂のない釉薬が体部中位までかけられているが、それ以下は褐灰色の露胎である。内面中位に細い沈線が巡っている。胎土は白灰色の磁質であり、竜泉窯のそれとは異質のようである。５は、竜泉窯青磁六弁花文碗で、暗緑色、一部は黄緑色で透明な釉がかけられている。その釉薬は、高台畳付は一部を除いてかけられ、外底は釉薬が拭き取られているようで、径3.3cmの焼き台痕が観察でき、また、高台際は溝状に抉られており、釉薬が流れこんでいる。６は瓦器椀とみられるものであるが、通有の博多遺跡群出土のものに比べて異質である。胎土に石英粒を含む砂質で、器壁が薄く、焼成がかたい。高台は0.7cmの高さで直立し筑前産瓦器と比較してシャープである。高台内に糸切り痕が残り、高台の外側はヨコナデ調整されており、内面は磨きの痕跡は残存部では認められない。内底に径6.5cmの高台径と同じ重ね焼きの圧痕がある。

12世紀後半を中心とした年代を想定する。

６）第３面検出遺構

SE-17（Fig.27）

本井戸は調査区のほぼ中央に位置し、SE－04に切られ、SE－25･26を切っている。径３m弱で、2.85m前後の鉢状をなす掘り方をもち、井筒は径60cm前後で、掘り方のほぼ中央部に位置している。井筒は幅10cm前後、長さ55cm前後の板材を枠として用いている。井筒下面には拳大の角礫が投げ込まれていた。井筒底面の標高は75cmである。

SE-25・26（Fig.28）

SE－25は径３m強、２m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方のほぼ中央部に径70cm前後の井筒が設けられている。井筒には部分的に木枠が遺存している。井筒底面の標高は1.07mである。

SE－26もSE－25とほぼ同じ規模をもつと考えられるが、掘り方の一部が遺

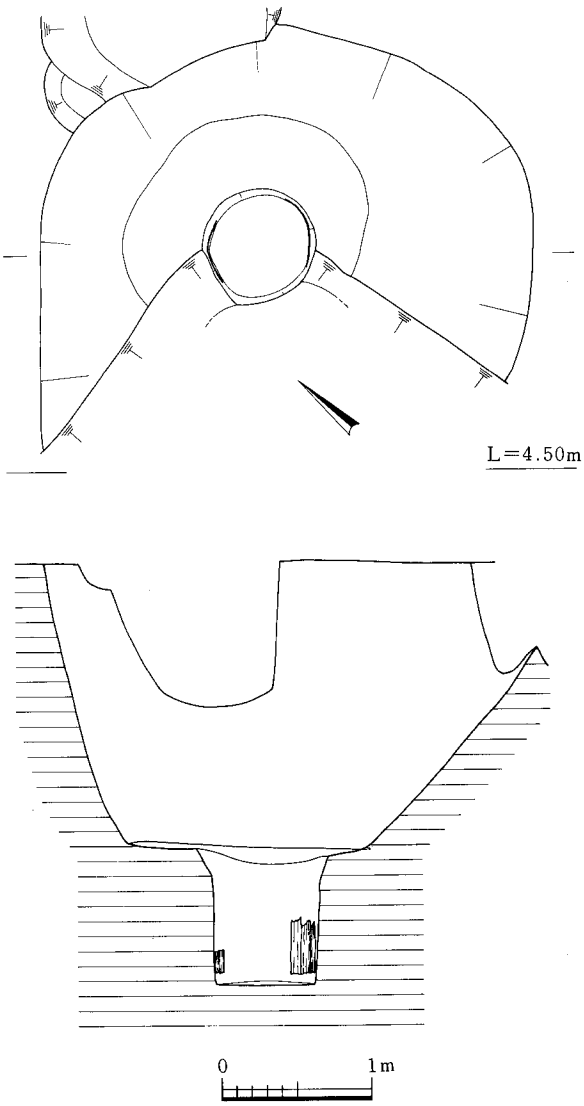


Fig.28　第25号井戸（SE－25）実測図

存しているのみである。

SE－17・25・26は約１世紀の間に営まれたものと考えられ、SE－26がもっとも古く、SE－17がSE－25より新しいといえよう。

SK-27

本土壙は、調査区の西南部に位置し、長軸２ｍで隅丸長方形を呈すると考えられるが、調査区端で検出したため完掘できなかった。

SK-28

本土壙は、調査区中央部からやや北西寄りに位置している。長軸1.4m、短軸0.9m弱の楕円形の土壙で、床面は皿状をなし、壁は緩やかに立ち上がっている。

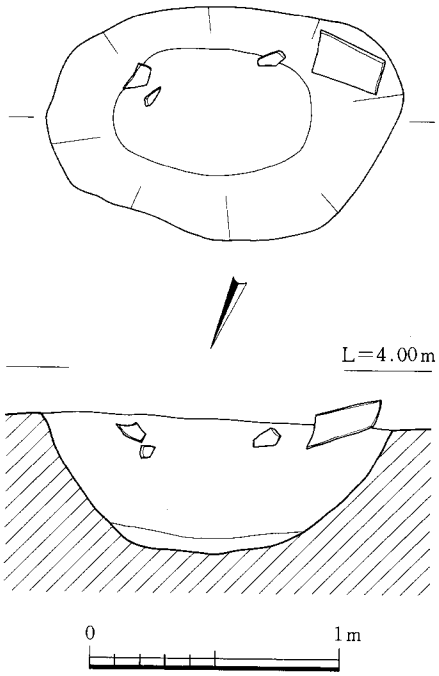


Fig.29　第28号土壙（SK－28）実測図

７）第３面検出遺構出土遺物

SE－17（Fig.30～33）

１・２の土師器は糸切りで、２の口径は12.4cmである。３・４は白磁碗で、４は低い高台、内面に櫛とヘラにより施文し、灰色透明釉が高台上までかけられている。５～12は青磁である。５は五輪花小碗（口径10.4cm）で、灰色の胎土に青灰色の透明釉が高台脇までかけられ、全体にきれいな氷裂文をつくる。露胎の外底は茶色に呈発し、径2.2cmの塾餅痕が認められる。６は灰色胎土に黄緑色釉、外面はヘラによる桟状文である。７・８はともに内底に圏線、外底は平坦に削る。９・10は「金玉満堂」銘竜泉窯青磁碗で、10は外底にも釉薬が付着し、高台内側に砂がついている。11は５区画に内面を分ける施文で、「冨」銘はスタンプではなく削り出しのようである。胎土は暗灰色、露胎の高台部分は茶色を呈し、畳付に４個の珪砂目跡がついている。12は内面に蓮華文を片切彫りで丁寧に施文する竜泉窯製皿であり、畳付にも斑状に釉薬が付着し、外底に塾餅痕がある。13は径20.2cmの小型黄釉鉄絵盤、15は薄く青磁釉がかけられた長胴壺で、露胎の底部に「十六□」の墨書がある。これらの他に、青白磁型押魚藻文皿、同合子蓋、白磁堆線小碗、白磁四耳壺、高麗青磁碗、押圧文軒平瓦などを、井筒上・下層から検出。12世紀後半。

SE－25（Fig.17・35）

出土した遺物は多くない。１の土師器はヘラ切り離し底で、小片ではあるが口径9.0cmをはかる。他に土師器を検出していない。２は瓦器皿で、内面は灰色で全面磨きがされ、口縁から体部の外面は黒色を呈し、ヨコナデ調整がなされ、底部には糸切り痕が残る。３は白磁碗の底部で、高台の高さは1.7cmと高く直立している。この部分には純白の釉薬が垂れ下がっているが露

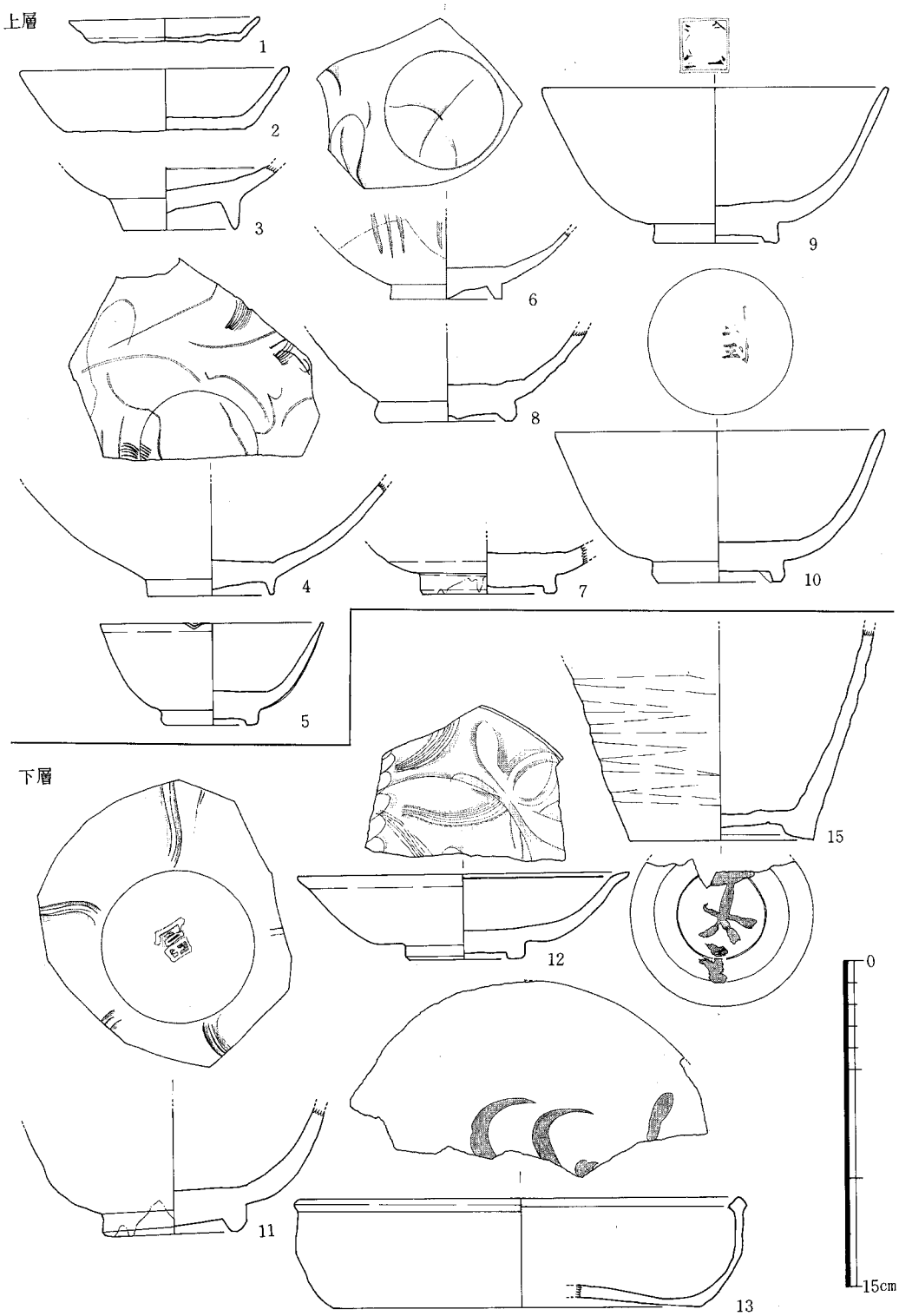


Fig.30　第17号井戸上・下層出土遺物実測図(1)

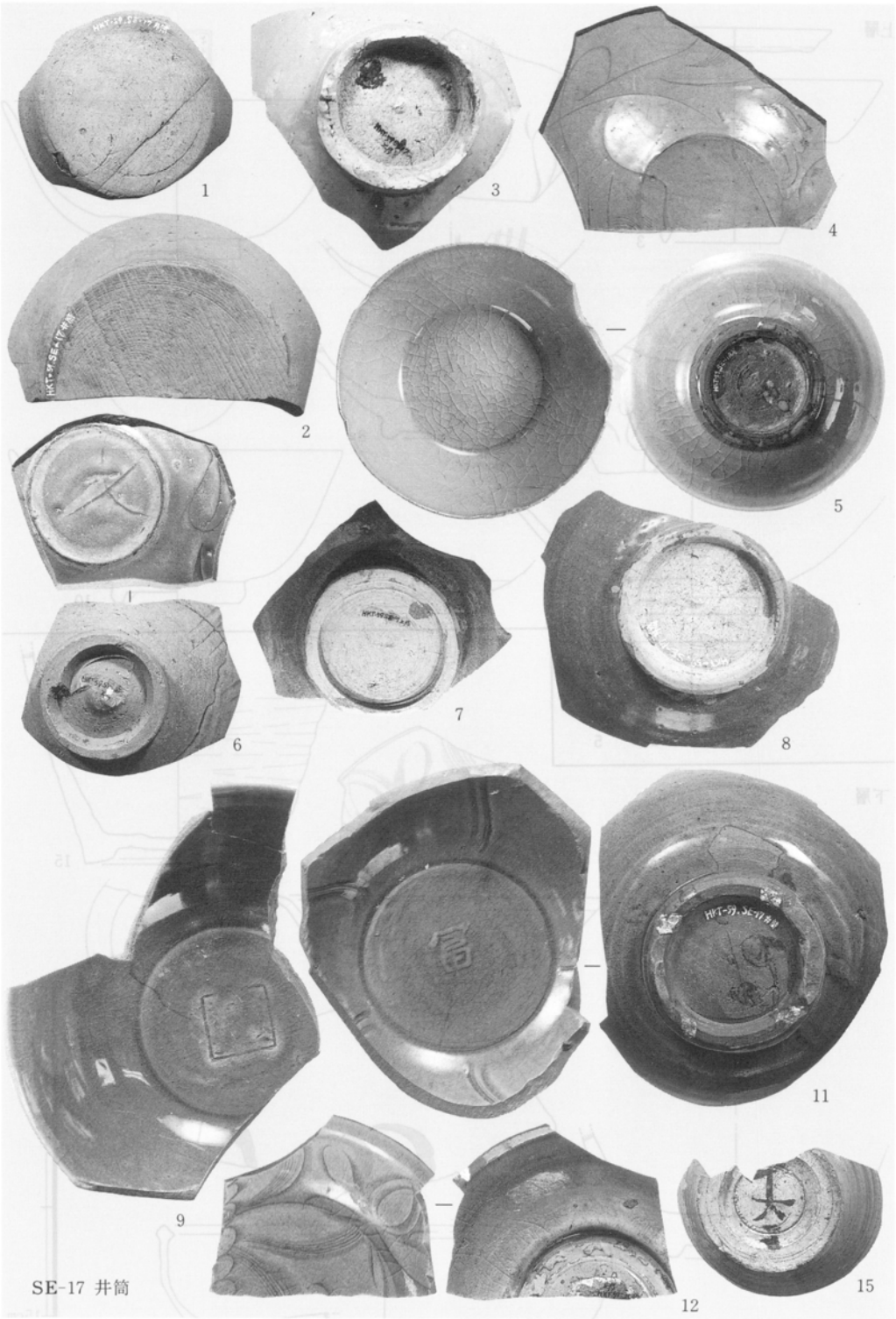


Fig.31　第17号井戸井筒内出土遺物(1)

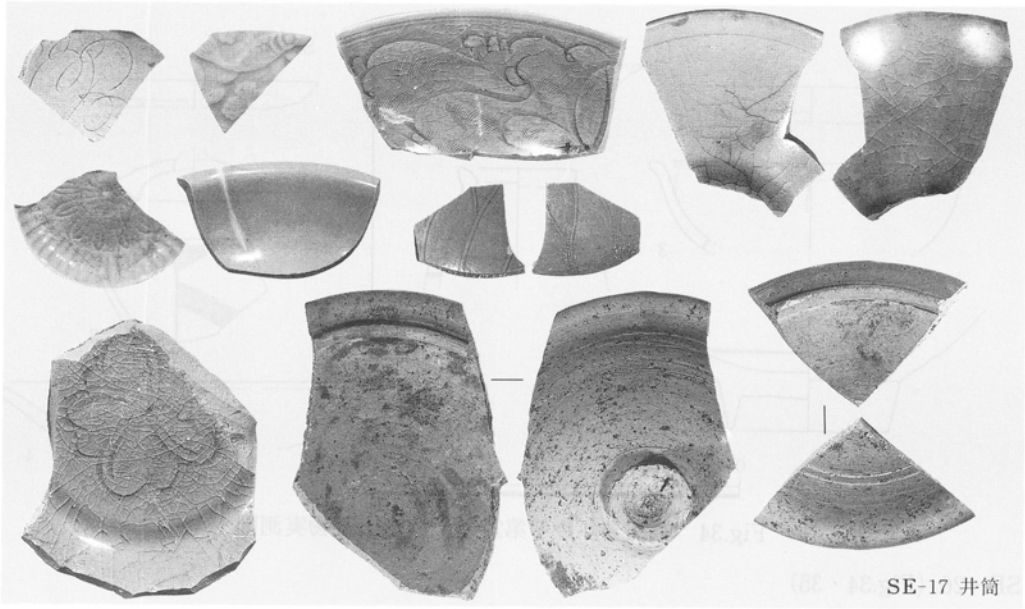


Fig.32　第17号井戸井筒内出土遺物(2)

胎である。高台内抉りは早い回転で削り出されており、窯滓様の黒焦げ斑点が付着し、かつ記号様の墨書があるが不鮮明である。このように高台が高い白磁碗は、11世紀後半に江西省景徳鎮窯で作られ、12世紀に盛行する福建･広東省かとおもわれる端反り白磁碗につながる祖形の可能性がある。４は玉縁口縁の白磁碗で、濁白色の釉薬が体部中位までかけられている。端反り口縁白磁碗も検出している。５は四耳壺の頸部で、頸部高さは4.5cmほどであり、氷裂のない灰白色釉が内外にみられる。胴部との接合は頸部を嵌め込むのではなく、単に重ね合わせて強く押さえて密着しているようである。

６・７の瓦は井筒内から出土したものである。６の草花文軒丸瓦は厚みの薄い瓦当面に筒瓦を嵌め込み、接合部を補強している。７の押圧文瓦は、須恵器質に焼成され、下辺部を布をあてがって押圧し滴水瓦にする。凸面には縄目叩き文が残る。

出土遺物からみると、この遺構は12世紀前半代に埋没したと推定する。

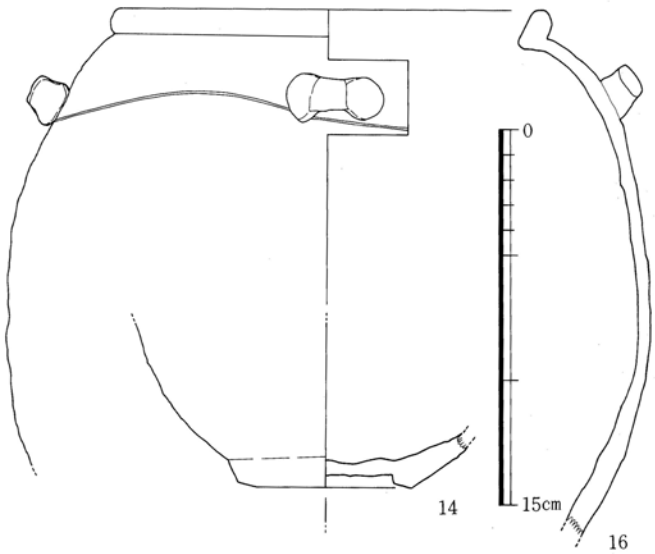


Fig.33　第17号井戸上・下層出土遺物実測図(2)

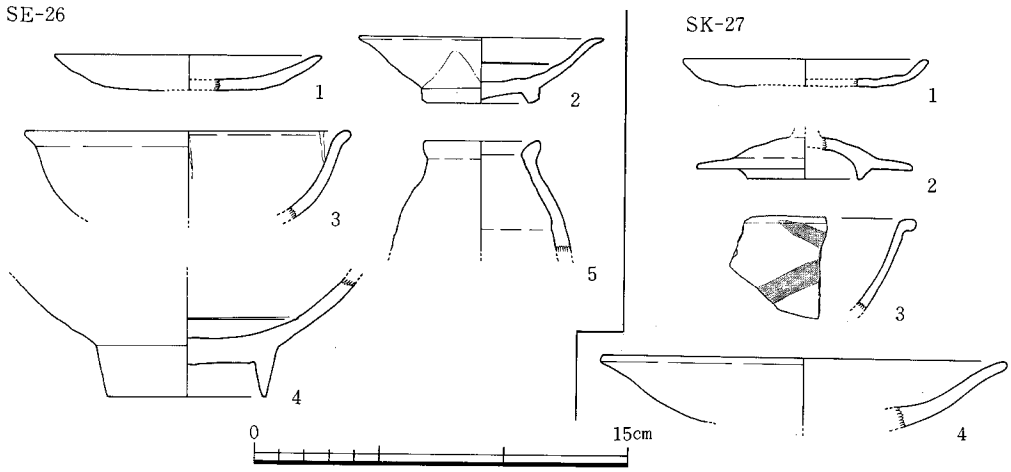


Fig.34　第26号井戸・第27号土壙出土遺物実測図

SE－26（Fig.34・35）

1は、SE－25出土の2と類似した瓦器皿であるが、本品のほうが磨きが外面にもおよんでいる。外底には板状の圧痕が認められる。2～4は白磁で、2は高台付皿、内底の釉薬を輪状にかきとり露胎部分に黒色の重ね焼きの痕跡がある。灰白色の透明釉は外体部には無造作にかけられている。3は白堆線を口縁から垂らす碗で、玉縁碗などと同じ灰白色で、ピンポールのある釉薬がかけられている。4は、端反り碗で、高台の内抉りはざっくりと削り出され、外底に墨痕が認められるが、判読できない。5は暗緑色釉が内外にかけられた陶質長壺である。

このほかに、白磁玉縁口縁碗、青白磁倒笠型碗、竜東第2期青磁碗、同安窯系青磁碗、黒釉陶質瓶が共伴している。12世紀中葉前後の年代を推定する。

SK－27（Fig.36）

遺物は非常に少ない。1は糸切り底の土師器皿、内底に強いナデ調整がみられる。2は、白磁蓋で、灰白色の磁質胎土に白灰色の不透明釉がかけられている。内側は露胎で、黄褐色を呈する。3は、白磁鉄絵鉢の口縁部の小片で、白色で氷裂の多い釉薬が内外にかけられている。4は、青磁皿で、暗緑色で、不透明な釉薬が厚くかけられている。遺物の混入も考えられる。

SK－28（Fig.36・44）

完形の平瓦を検出している(8)。厚みは薄いが、均質によく焼成され、堅く焼き締まり須恵器とかわりない。凹面はやや粗い布目で、上辺はナデ調整が幅4㎝の範囲にみられる。凸面は、縄目叩打文を上辺では強いナデにより擦り消している。中位でも同様にして一部の縄目は擦り消されている。上縁は未調整、下縁はヨコナデ調整され、左右側は内側から半分を切断し、残り半分を割る、4枚作りの方法をとっている。長さ28.9㎝、上弦幅22.7㎝、下弦幅18.0㎝、重量1,390gを計る。これに共伴して、1・2は土師器で、1はヘラ切り、2の坏は口径15.0㎝、

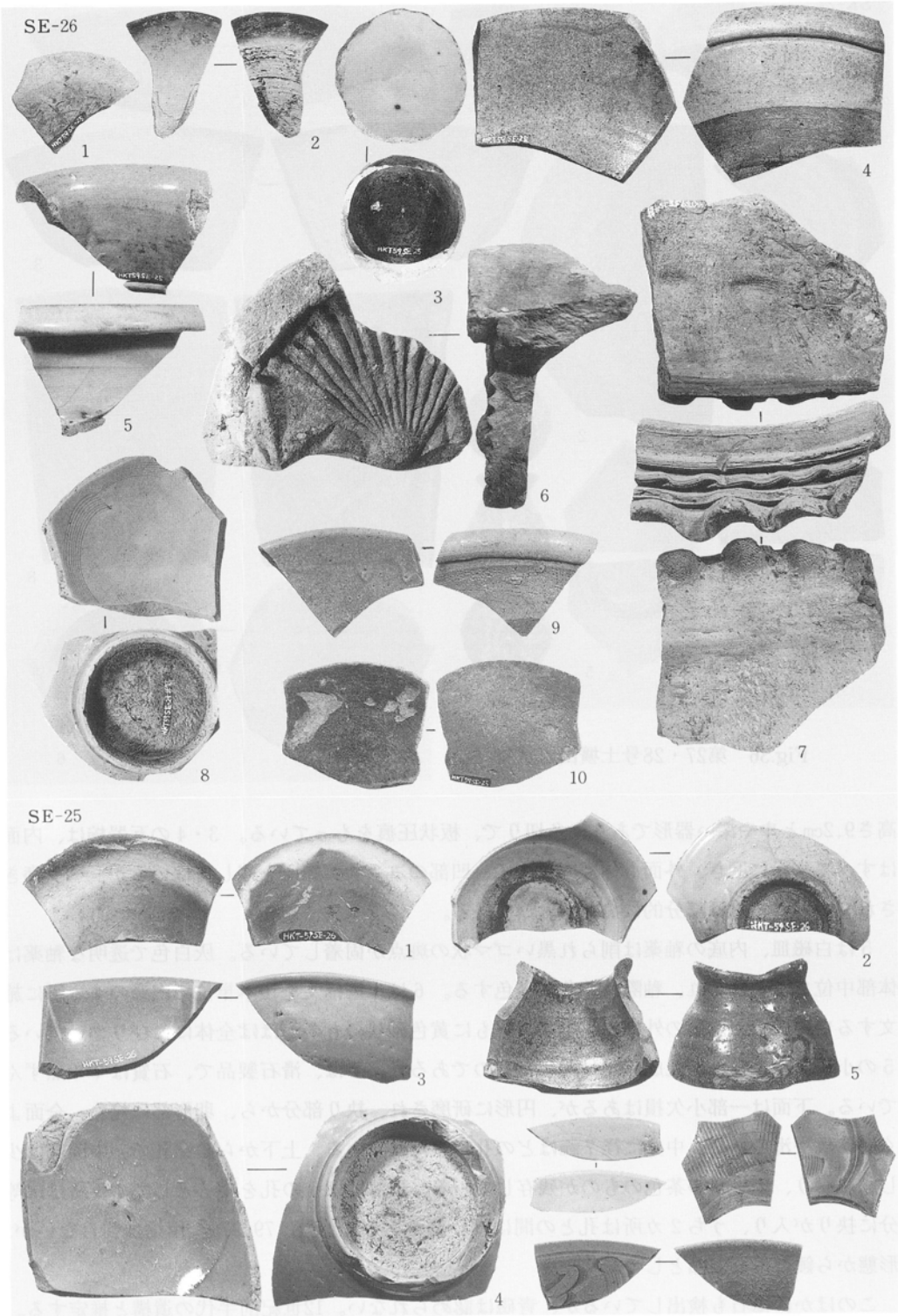


Fig.35　第25・26号井戸出土遺物

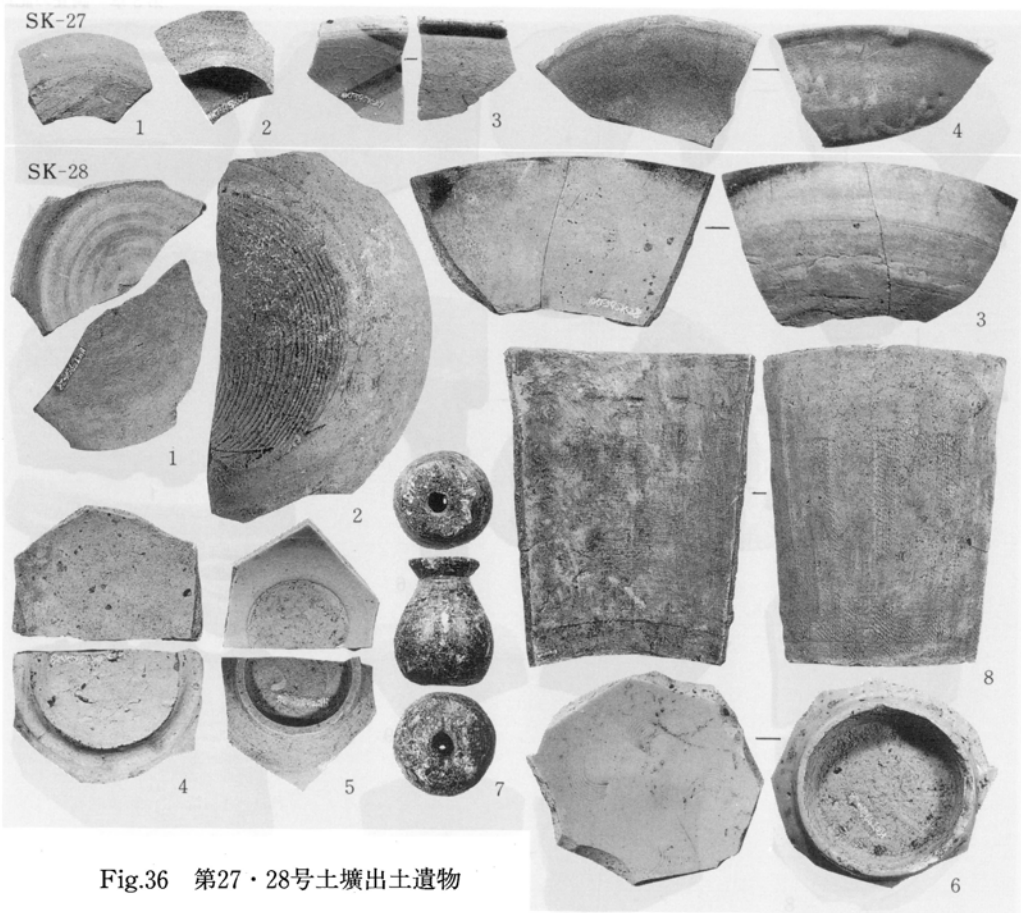


Fig.36　第27・28号土壙出土遺物

高さ9.2cmとやや深い器形であり、糸切りで、板状圧痕をもっている。3・4の瓦器椀は、内面はすべて平滑に磨き、外面も体部中位まで、凹部のヨコナデ箇所を残してはいるが、ヘラ磨きされている。口縁は部分的に黒色をおびている。

5は白磁皿、内底の釉薬は削られ黒いゴマ状の斑点が固着している。灰白色で透明な釉薬は体部中位までかけられ、釉際は黄色に発色する。6は、櫛描文を10本単位で内底の4カ所に施文する白磁碗で、露胎の外底に黒斑点とともに黄色砂状のものがほぼ全体にこびりついている。5の小皿にもみられ、焼成時に付着したものであろう。7は、滑石製品で、石質はやや黒ずんでいる。下面は一部小欠損はあるが、円形に研磨され、抉り部分から、卵形部に続く。全面よく磨かれ平滑であり、中央に径7㎜ほどの孔が穿たれている。上下からの穿孔で、中間部は少し細くなり、繊維状の茶色のものが残存している。頂部にはその孔を中心として4カ所ほぼ等分に抉りが入り、うち2カ所は孔との間に細い溝がある。重量は79.97g。用途は判らないが、形態から錘型滑石製品としておく。

このほかに砥石も検出しているが、青磁は認められない。12世紀前半代の遺構と推定する。

４．第４面の調査（Fig.37）

第４面は、第１～3b面の層群をはずした黒灰から暗褐灰色を呈する砂層の層群の上面である。第３b面との土層堆積状態は整合をなし、境は明瞭である。標高は3.9～3.6mと南へわずかに傾斜している。

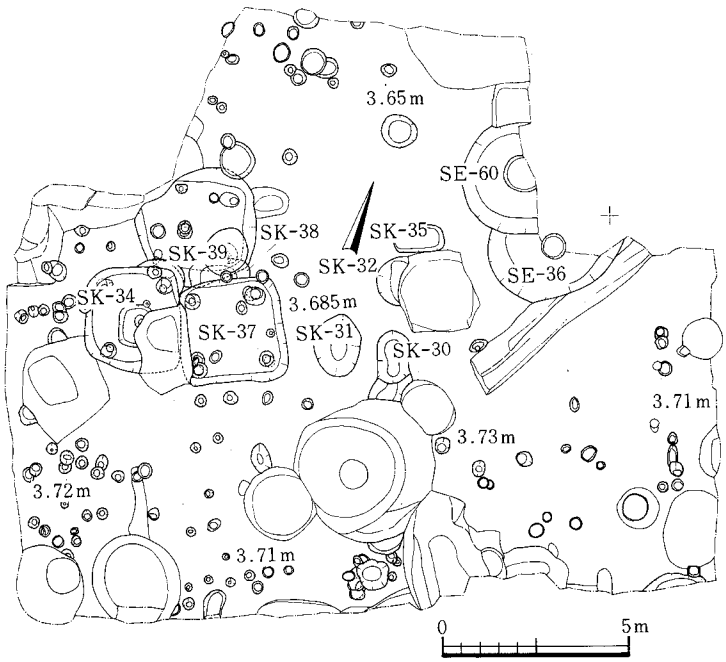


Fig.37　第４面遺構配置図

検出遺構としては、井戸２基（ＳＥ－３６・60)、土壙８基（SK－30～32・34・35・37～39）と柱穴101個がある。

１）第４面検出遺構

SK－30（Fig.38）

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、幅85cm前後で溝状をなしているが、土壙の連続的な切り合いとしてとらえた。55cm前後遺存している。

SK－31

本土壙は調査区中央部に位置し、SK－30とSK－37の間にある。長軸1.65m、短軸1.3mの平面形楕円形を呈し、60cm弱遺存している。

SK－34（Fig.39・40）

本土壙は調査区の西側に位置し、SK－37を切っている。平面形は2.4m

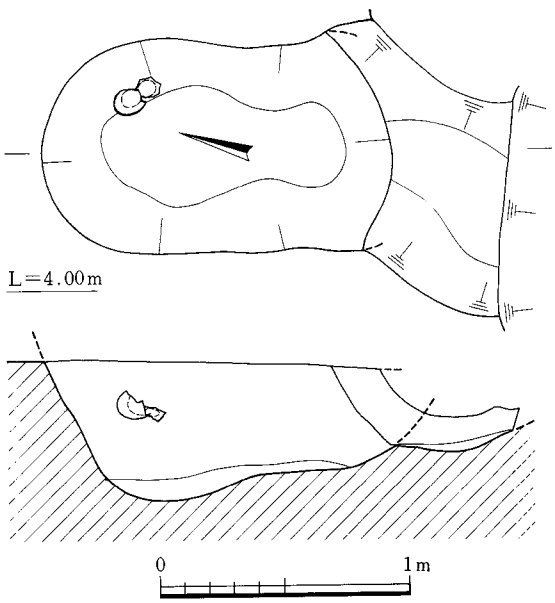


Fig.38　第30号土壙（SK—30）実測図

前後の隅丸方形を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。床面はほぼ平坦で、一隅は攪乱により破壊され不明であるが、他の隅部には径40cm前後の柱穴がみられる。本遺構は90cm前後遺存している。

本土壙は屋構造をもつ倉庫と考えられ、土師器・瓦器椀など12世紀前半のまとまった遺物が出土した。

SK－35（Fig.41）

本土壙は、調査区中央部の拡張区との境界で検出した。長軸1.35m、短軸0.7mの隅丸長方形を呈し、10cm強の遺存で、土壙墓状をなしている。

SE－36

本井戸は調査区中央部北側の拡張区と調査区境界に位置し、SE－60に切られている。径3.5mで1.35m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方中央に径65cm前後の井筒が設けられている。本井戸は、調査区境界に位置するため完掘できなかった。

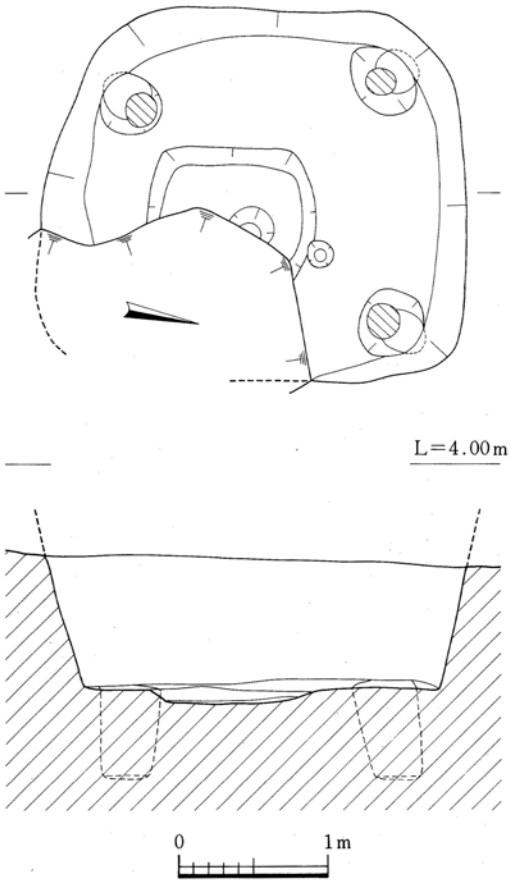


Fig.39　第34号土壙（SK—34）実測図

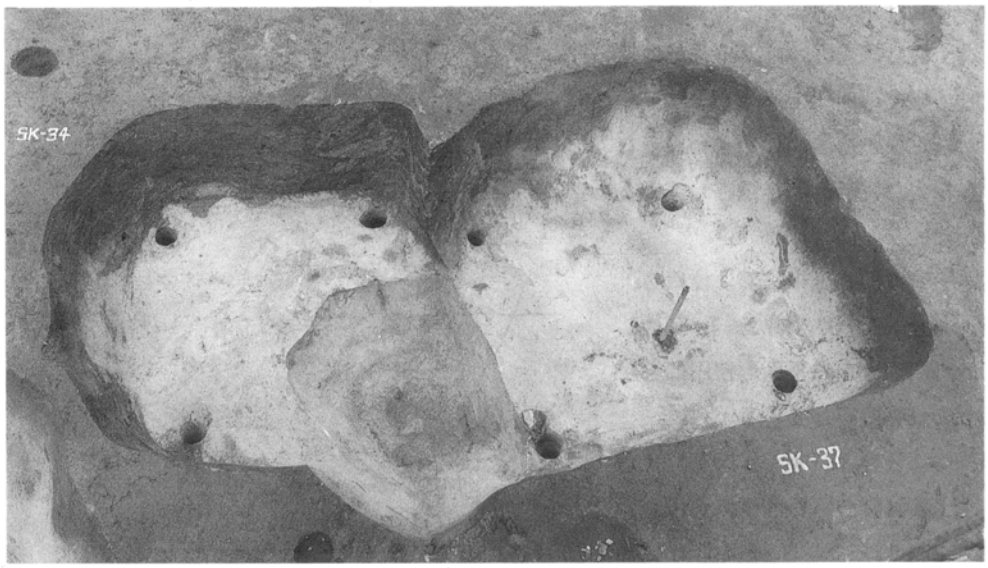


Fig.40　第34・37号土壙完掘状況

SK－37（Fig.42）

本土壙は調査区のほぼ中央に位置し、SK－38を切り、SK－34に切られている。平面形は一辺2.75mの隅丸方形を呈し、１m前後遺存している。床面は平坦でたたき締められている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面の四隅に径50cm前後の柱穴があり、柱痕跡から径30cm前後の柱が用いられていることがわかった。また、ほぼ同じ位置に柱穴が重なることから建て替えは行なわれたと考えられる。

本土壙もSK－34･39とともに、屋構造をもつ倉庫と考えられ、切り合い関係からSK－39より新しく、SK－34より古いといえよう。

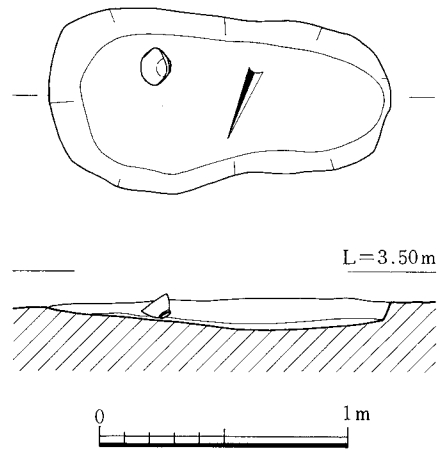


Fig.41　第35号土壙（SK—35）実測図

SK－39（Fig.43）

本土壙は調査区のほぼ中央部に位置し、SK－34・37・38・40に切られている。平面形は一辺3.2m前後の隅丸方形を呈し、1.1m前後遺存している。西北部は調査区壁に延びているため、確認できなかった。床面は平坦で、たたき締められており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面の三隅で柱穴を検出したことから、SK－34･37と同じ性格をもつものといえよう。

出土遺物から、11世紀末から12世紀初め頃のものと考えられ、もっとも新しいSK－34との時期差が短いことから、３基とも並存した可能性もある。

SE－60

本井戸は拡張区東側で検出した。SE－36を切っている。径3.5mで1.2m遺存の鉢状をなす掘り方をもち、掘り方中央に径１m前後の井筒が設けられている。本井戸もSE－36と同様、調査区境界に位置するため完掘できなかった。なお、井筒の中には拳大から人頭大の

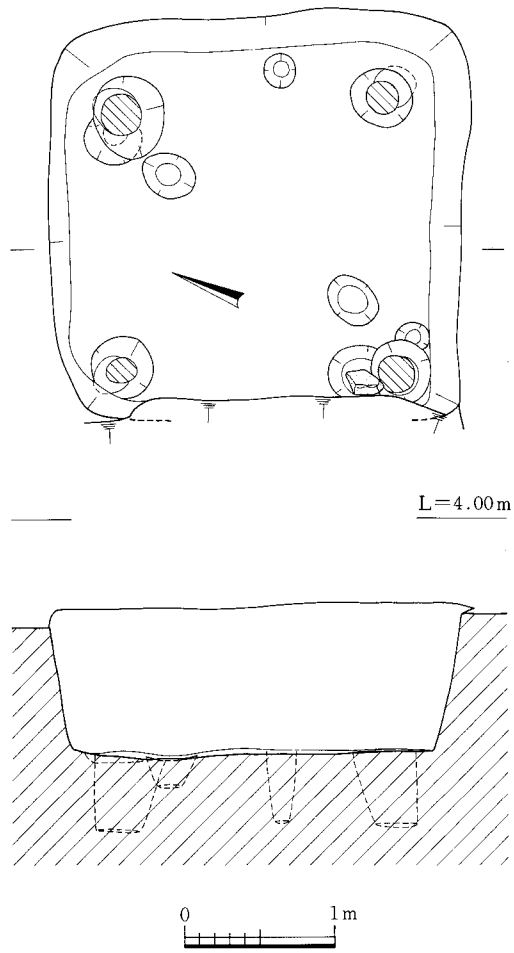


Fig.42　第37号土壙（SK—37）実測図

角礫が詰め込まれていた。

2）第4面検出遺構出土遺物

SK－30（Fig.44・45）

ヘラ切り土師器皿と白磁のみの組合せであるが、実測できるものは少ない。1は白磁碗であるが、全体に粗製のつくりで、高台は直立、肉厚、内底の鏡は径7.7cmと大きい。胎土は黒く小さい粒子は混じるが白色の磁器質であり、釉薬も白く質は悪くない。2は、内面に櫛描文を不規則に配する白磁皿で、高台上まで黄灰色で氷裂のない釉薬がかけられている。畳付は焼成後に研磨されている。この他はすべて白磁であり、遺構は11世紀後半～12世紀前半の可能性が高い。

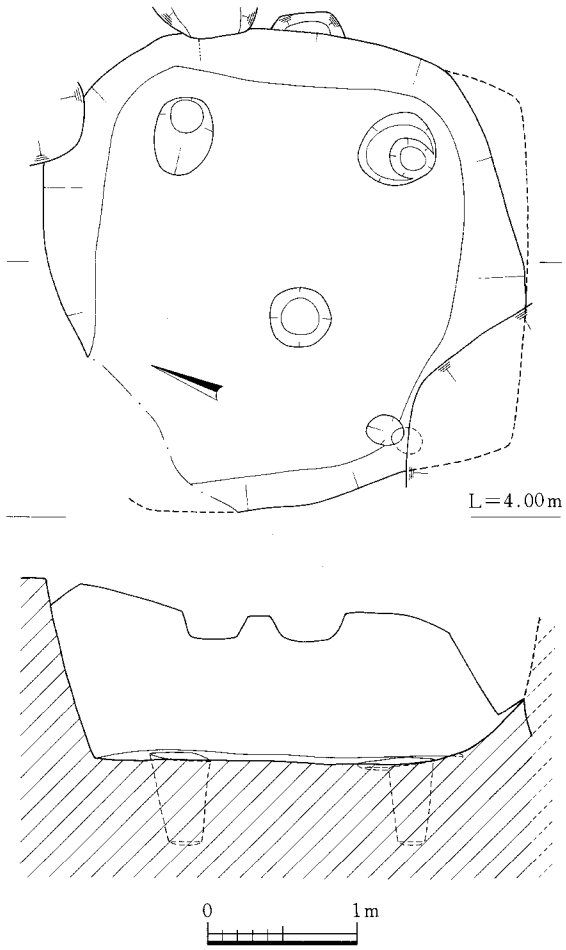


Fig.43　第39号土壙（SK—39）実測図

SK－31（Fig.44・45）

土師器、瓦器椀を少量検出している。1は体部中位に明瞭な段をもつ浅い皿で、内底を強くナデ調整し、糸切りの外底には板状の圧痕が強くついている。淡褐色の精製土である。2も糸切り土師器皿で1に比較して肉厚で浅い器形であり、ほぼ中央に穿孔がある。煤などの付着物は認められない。3は同じく糸切り底の土師器坏であり、内底を強くナデ調整し、体部立ち上がりは溝状になる。復元口径16.4cm。4は瓦器椀で、内面は黒色で、全面に不定方向の磨きがなされている。外体部は口縁下を強くヨコナデして凹ませ、その上下の凹部はヨコナデ、凸部には磨きがみられる。

SK－34（Fig.46～48）

［上層］　土師器（1～10）、瓦器椀（11～15）を相当量検出した。小皿のうち、1・6・7はヘラ切り離し、板状圧痕は認められない。その他は糸切りで、板状圧痕がある。ただし、2はヘラ切りの可能性もある。両者の間に法量の差は認めがたい。8・9は丸底坏、9では内面ヨコナデの上にコテ痕がある。10の土師器椀は、赤褐色を呈し、内面は磨き、一部はその上にナデ調整がみられる。外体部も横方向の磨きが下半までみられる。瓦器椀のうち、11は10の土

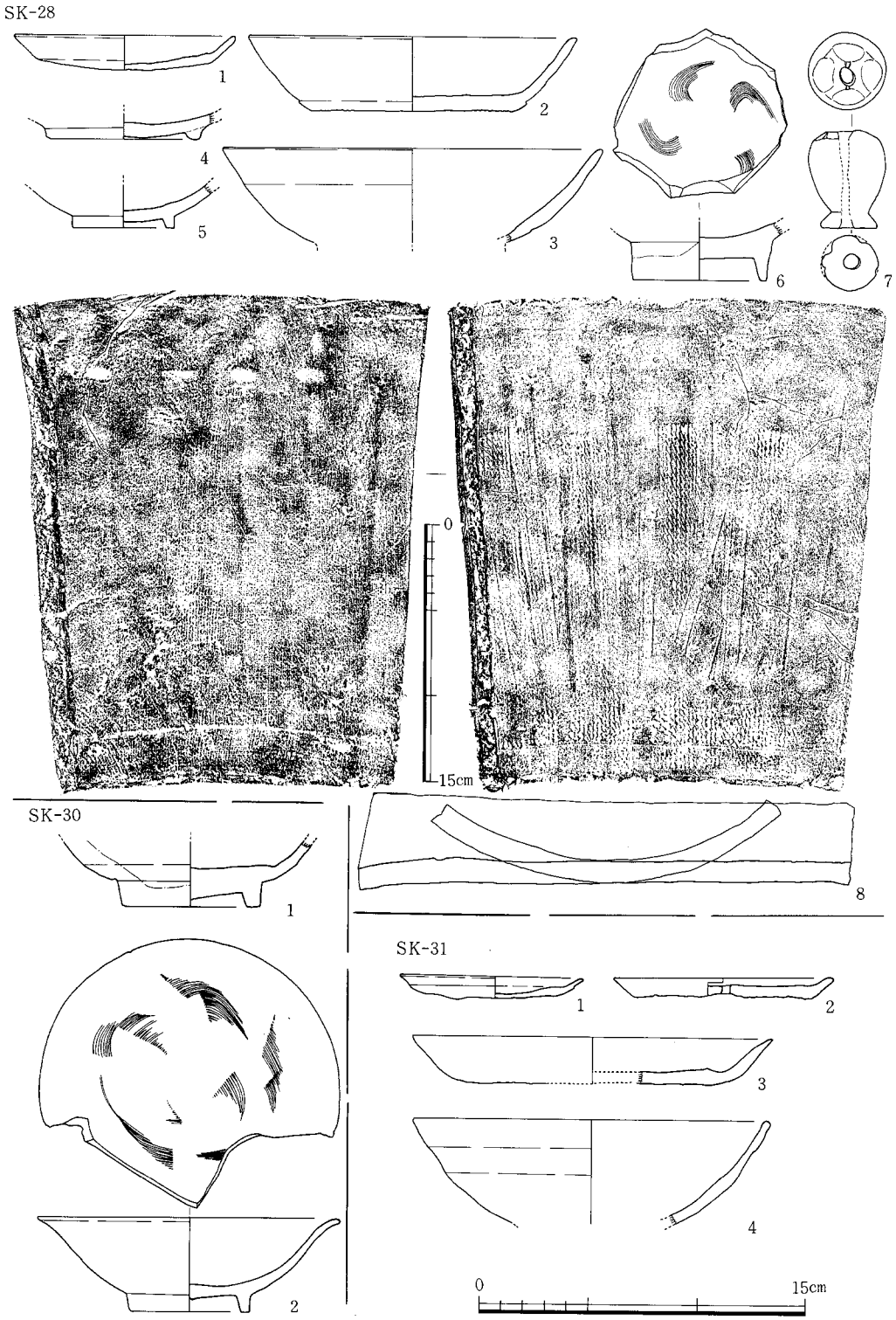


Fig.44　第28・30・31号土壙出土遺物実測図

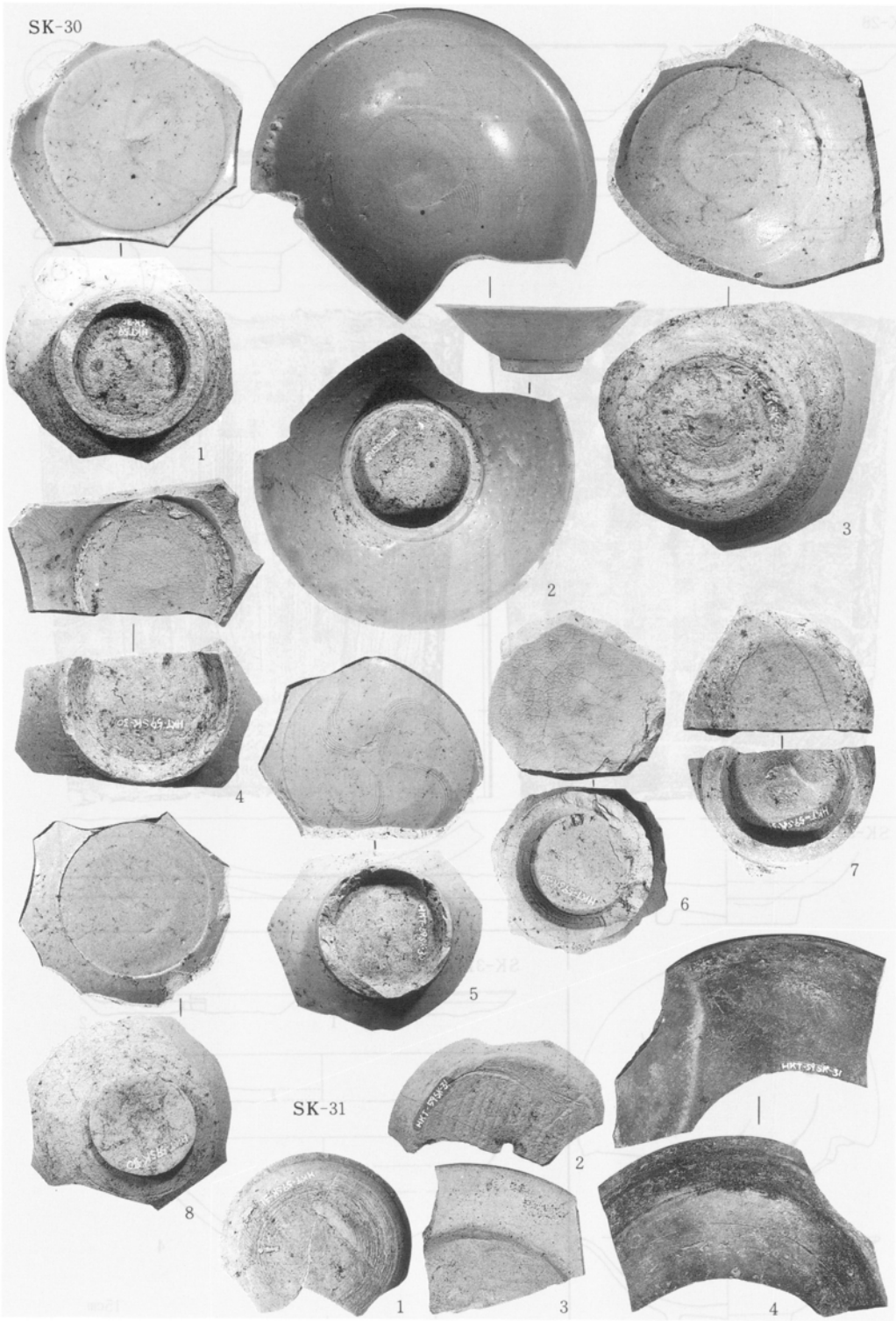


Fig.45　第30・31号土壙出土遺物

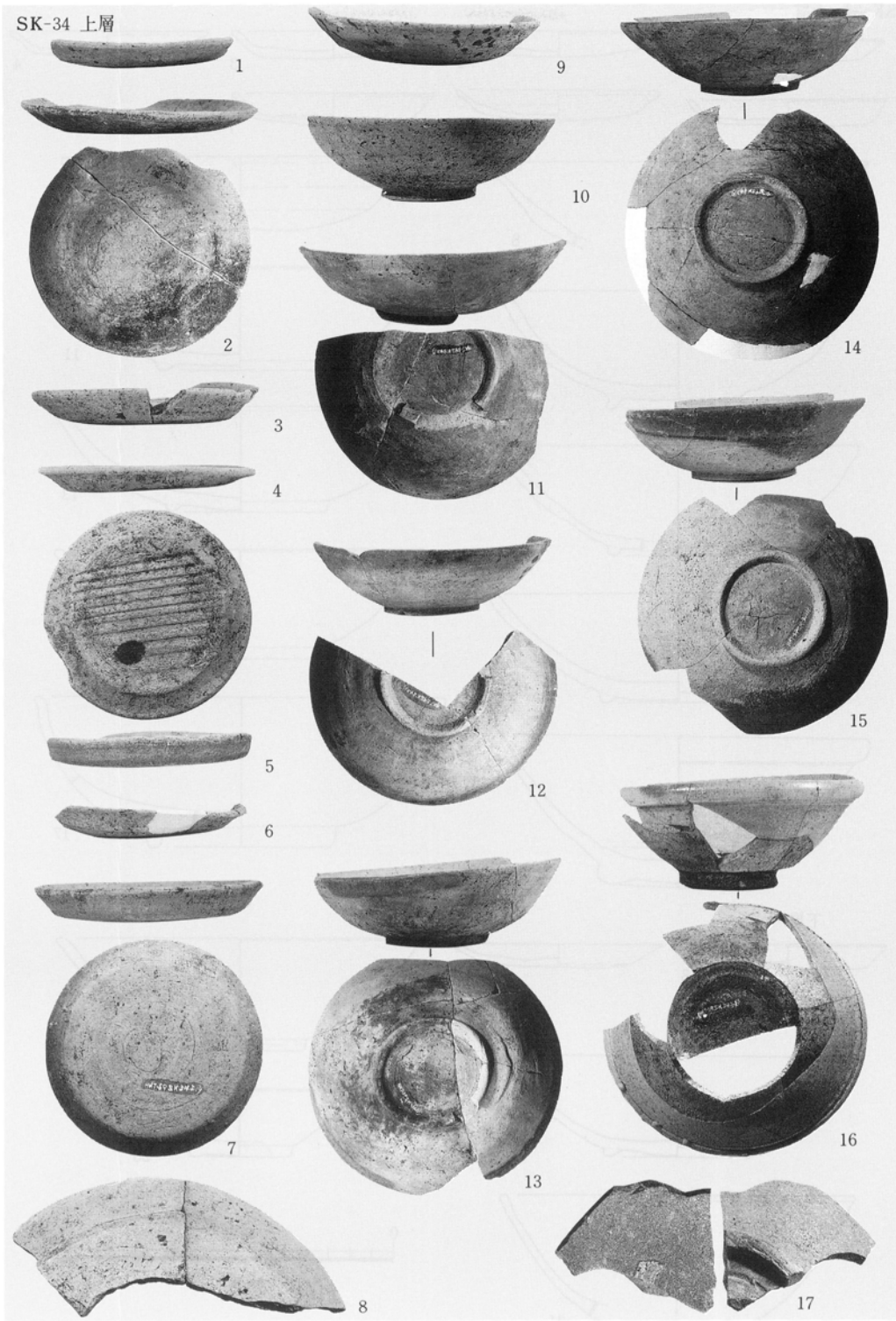


Fig.46　第34号土壙上層出土遺物

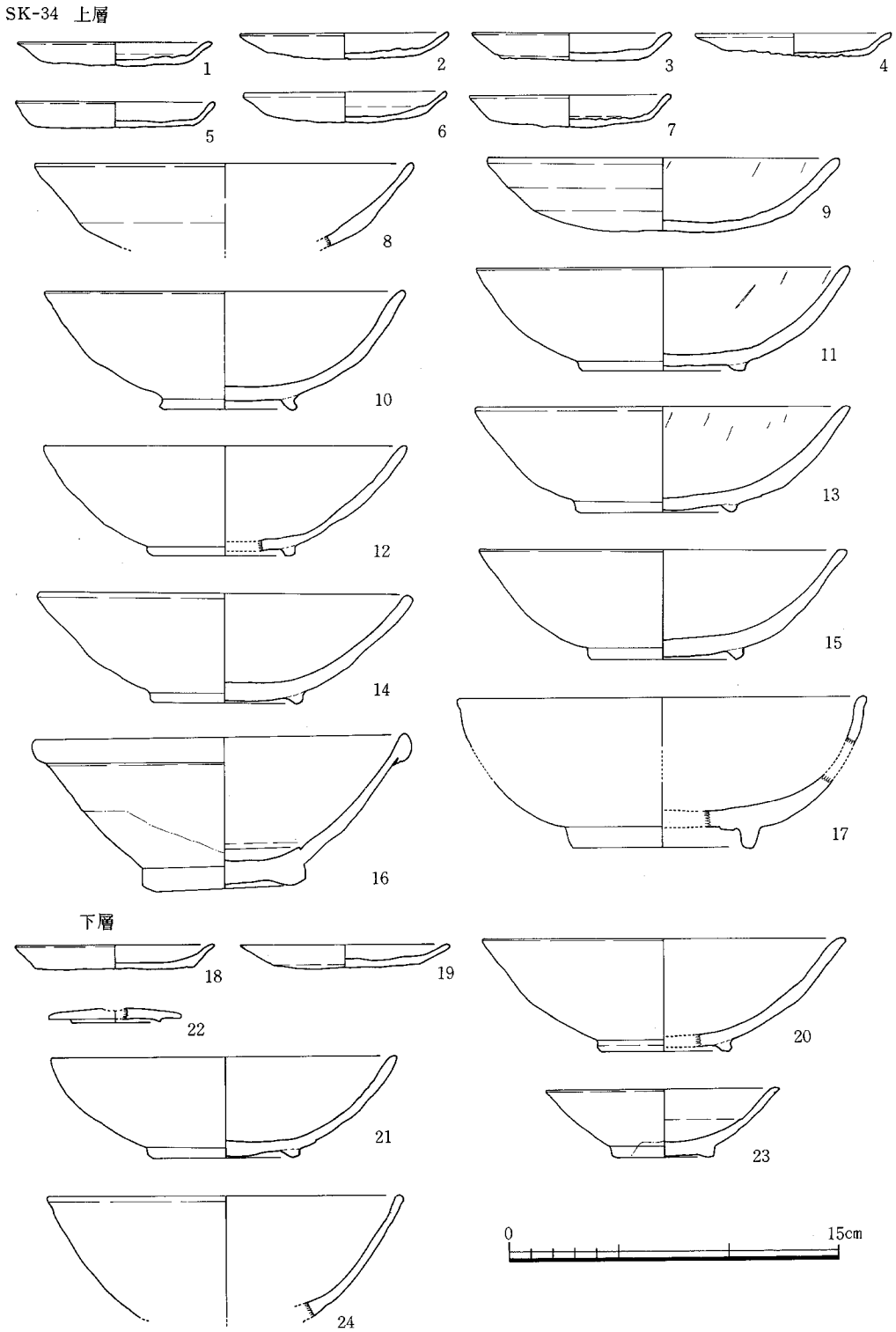


Fig.47　第34号土壙上・下層出土遺物実測図

師器と同じ調整で、黒灰色瓦器質である。12以下の外面の磨きは、凸部分を粗く磨き凹部分はヨコナデをのこしている。共伴する白磁16は玉縁口縁、内底に圏線をいれる。17は粗製の高麗青磁碗で、茶褐色粗胎に、暗緑色釉が内外にかけられ、内底に珪砂の目跡、施釉された畳付は焼成後、研磨されている。

［下層］　上層の遺物と接合するものがあるので、先後関係はないようである。土師器小皿の18は糸切り底、19はヘラ切りである。下層においても両者は混在している。20・21は瓦器椀で、ともに高台付近まで粗い磨きが施され、20は灰黒色、焼成は固い。21は口縁部が黒灰色、他は灰色で、外底に板状圧痕がある。22は青白磁小壺蓋で、純白磁胎にわずかに青みを帯びた透明釉がかかる。23は白磁皿で、浅い抉りの高台部分は露胎。24は暗緑色の釉がかけられ、部分的に黄褐色に窯変しており、竜泉窯青磁碗であろう。

12世紀前半の土師器と瓦器椀の良好なセット資料である。

SK－35（Fig.48）

図示した白磁碗１は、内底を輪状に釉剝ぎするタイプである。体部は直線的にのばし、露胎の腰部のヘラ削り、直立する高台の削り出し、外底の兜巾状の抉りなど無造作で、早い轆轤回転の仕事である。畳付にはわずかに釉薬が残るが、焼成後の研磨がされている。輪状の釉剝ぎ箇所は褐色を呈し、釉薬と黒茶色の砂の付着が認められる。

SE－36（Fig.48・49）

１～６は井戸掘方、７は井筒から検出した遺物である。１の土師器皿は、薄手に作られ、内底縁を凹ませ、口唇は肥厚させる。２の土師器皿は赤褐色、軟質で、１と同じく糸切り底で、板状圧痕がみられる。３は、小片ではあるが、高麗青磁碗とみられ、内外に暗緑色の釉薬がかけられ、内面には線刻花文と圏線が施文されている。胎土は灰色。４は白磁壺蓋で、甲部には２～３本単位の界線が低い鈕から放射状にのび、透明で、淡黄緑色の氷裂の多い釉薬がかかる。蓋受けから内面は露胎で、焼成時についたとみられる黒色斑点が無数にある。胎土は白灰色の磁器質である。５は白磁碗で、内底に輪状釉剝ぎがあるタイプで、円圏部分は赤褐色を呈し、黄白色砂が付着する。これに対応する高台には、黄灰色砂が高台端部を包むように付着しており、畳付の研磨はされていない。６は、石鍋を再加工した方形板状品で、凹面の中央に径2.5cmほどの不整円文が浅く彫られている。井筒中より検出した土師器坏７は、糸切り底で、内外面と口縁部に煤がついている。

12世紀後半の時期と考える。このほかに７世紀代の須恵器、玉璧高台緑釉皿なども出土している。

SK－37（Fig.48・49）

少数ながらまとまった遺物を検出している。１は土師器皿で、口径９cm、底部に強く板状圧痕がつき、粘土紐の痕跡がみられ、ヘラ切りである。２は口径15.6cmの土師器丸底の坏で、体

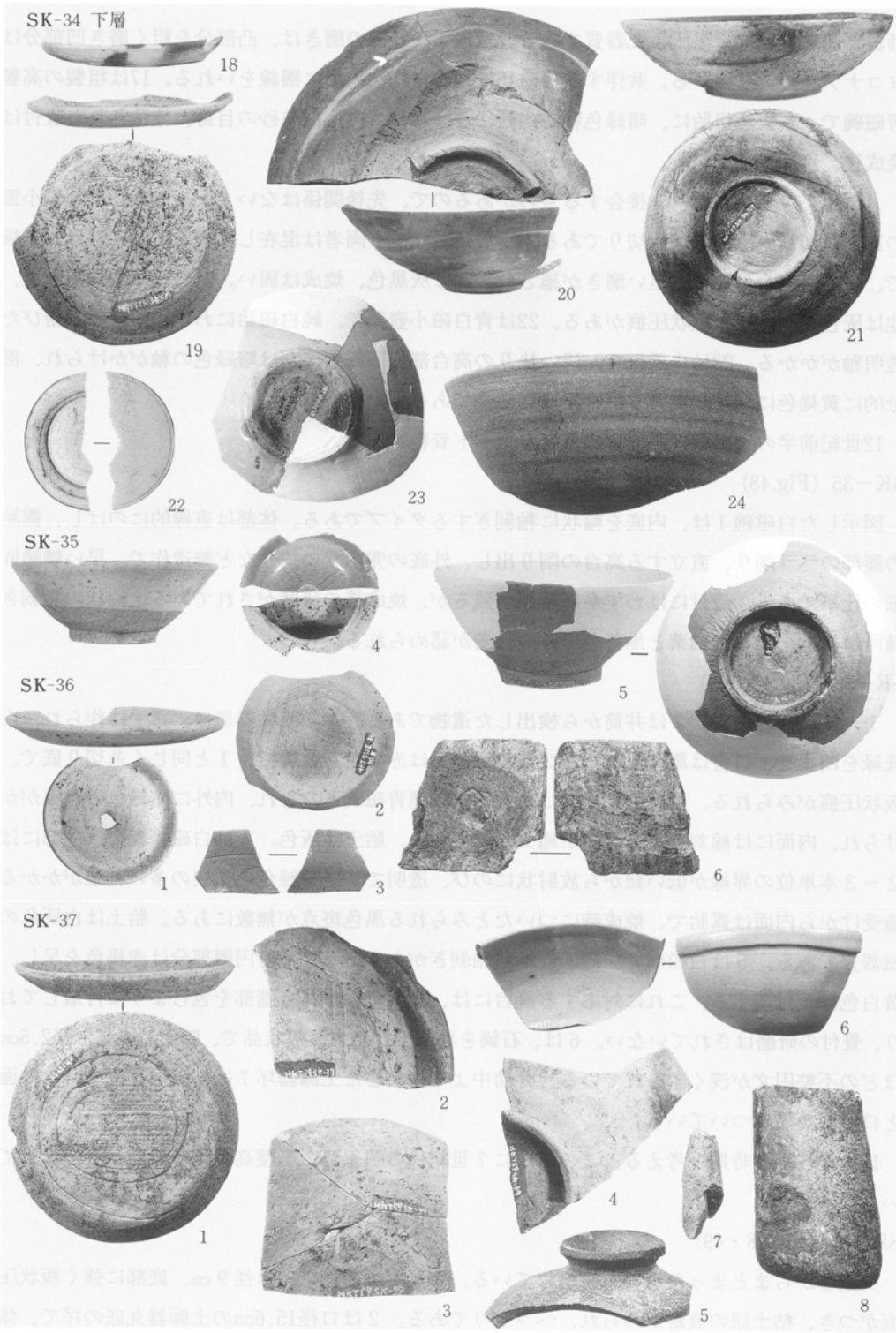


Fig.48　第34号土壙下層・第35～37層土壙出土遺物

部中位で稜をもって外反し、底部に細かい板目がついている。３は、石英を多く含み、淡褐色を呈する土師器高台付きの坏であるが、高台部分は剥離し痕跡のみである。現存器高は2.6cmと浅い丸底坏と同じであり、内面ミガキ、外面は中位にわずかに稜をもち、その上はヨコナデ、下には指頭痕がみられる。小片ではあるが、復元口径15.2cm。４は土師器椀で、口唇部にも磨きがおよび、面取り状をなしている。小型の高台を貼り付け内面と外面上部は磨きがかけられ、器面の凹部にはヨコナデ調整が残っている。口縁はわずかに残るのみで、口径は正確には計測不可能であるが、16cmと推定できる。５は須恵器瓶の口頸部であるが、器肉が薄く暗灰色を呈し、肩に横方向のハケ目調整がされている。通常の須恵器とはやや異質な感じをうける。

これら土師器に共伴して、６は白磁碗である。口縁下に幅３mmほどの溝状圏線を入れることによって、口縁を玉縁様に肥厚させたかのようにつくる。口縁部の厚みは体部とかわっていない。釉薬は灰白色、氷裂がなく内外に滑らかにかけられ、釉溜まりではわずかに緑色をおびる。

このほかに白磁皿の小片がある。７は土錘で、最大径1.7cmである。８は砥石で、１面を除いて平滑な研ぎ面をなしているが、全体に２次的な火熱を強く受け、写真左右側面には煤がかなり厚く付着し、下面では、赤変し表面が剥離している。

次のSK－39とほぼ同時期の11世紀末～12世紀初めと考える。

SK－39（Fig.50・51）

この土壙からは、ヘラ切りの土師器とごく少数の白磁を検出し、糸切り土師器および青磁は認められない。土壙埋土の上層（遺物注記には上層はないが、「下層」と注記されているもの以外を上層とする）と下層出土品との相違は見出しがたいが、分けて述べる。

［上層］　実測できる個体数は下層に比べて少ない。１～４は土師器皿で、口径0.9～9.7cm、体部内外面はヨコナデ、内底はナデで、外底には段差のつくほどの板状圧痕がみられる。１と４では口縁上端面を平坦につくっている。５～８の丸底坏の法量は、口径14.9～15.4cmの間で、内面はヨコナデ後に磨きが施されているが、口縁下の凹部にはヨコナデ痕が残っている。外面の調整は口縁付近がヨコナデ、その下には指頭痕がつき、底部は板状圧痕がかなり強くついている。内面のいわゆるコテ痕は明瞭に残り、1.5～２cm間隔で、７では内底部まで認められる。８は、器高も低く、底部も平底に近い形態であるが、調整方法はほかの丸底坏と変わらない。６は他の器形に比較して口縁の開きが小さく、器高も3.7cmと高い。23の白磁碗は上層の出土で、いわゆる邢州窯様式の小型玉縁口縁であり、折り返して密着させている。この他に、白磁皿の小片がある。

［下層］　この層から検出した土師器もすべてヘラ切りである。９～13の皿は上層検出品と相違は認められず、調整も同じである。９や12の内底には強いナデがみられ、凹凸ができている。11を除いて、外底に板目がみられ、10の底部の器肉は非常に薄い。口径は９cmの後半が中心であり、上層とともに10cm以上のものや、逆に９cm前後の大きさのものは少ない。14～21の

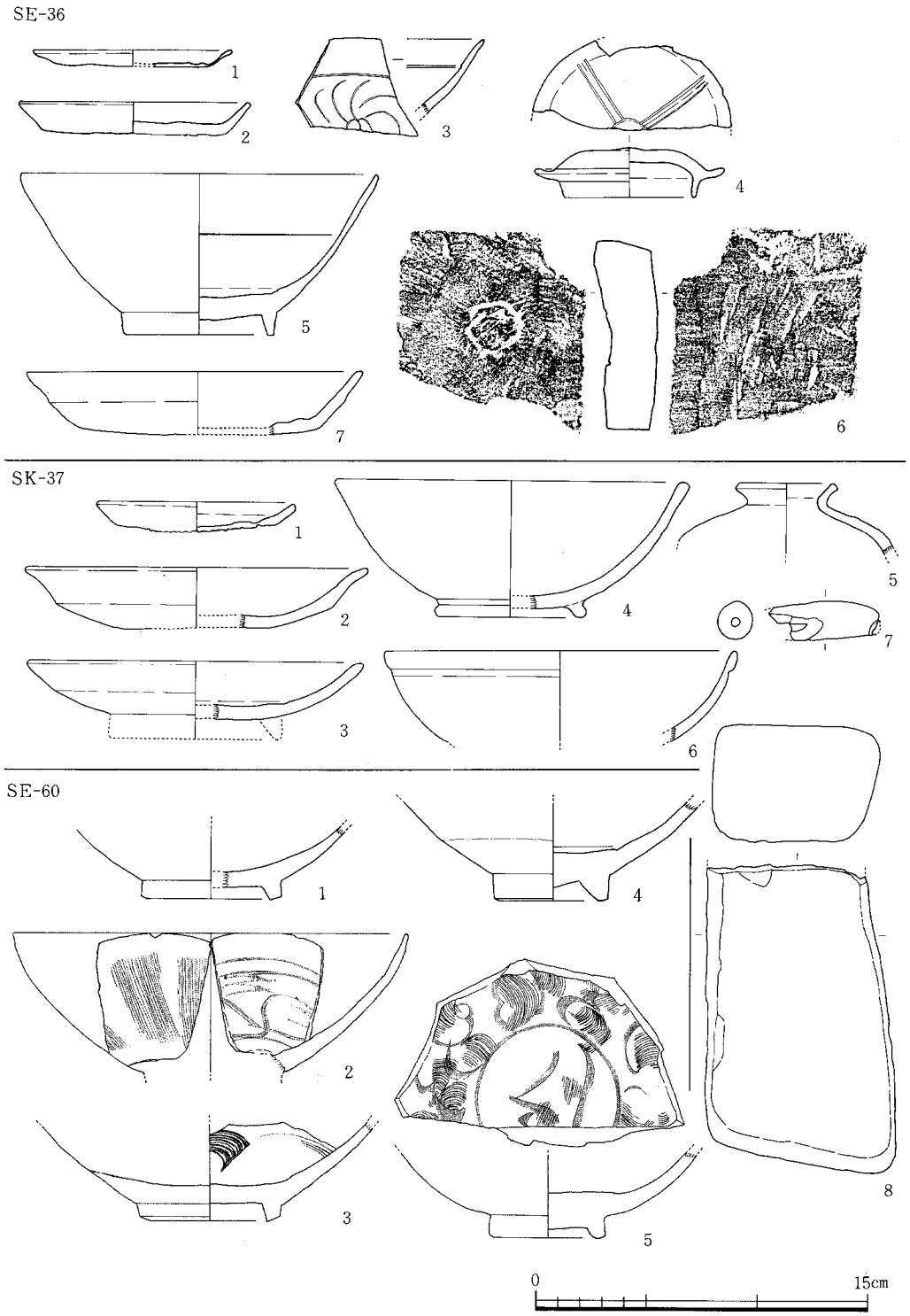


Fig.49　第36・60号井戸および第37号土壙出土遺物実測図

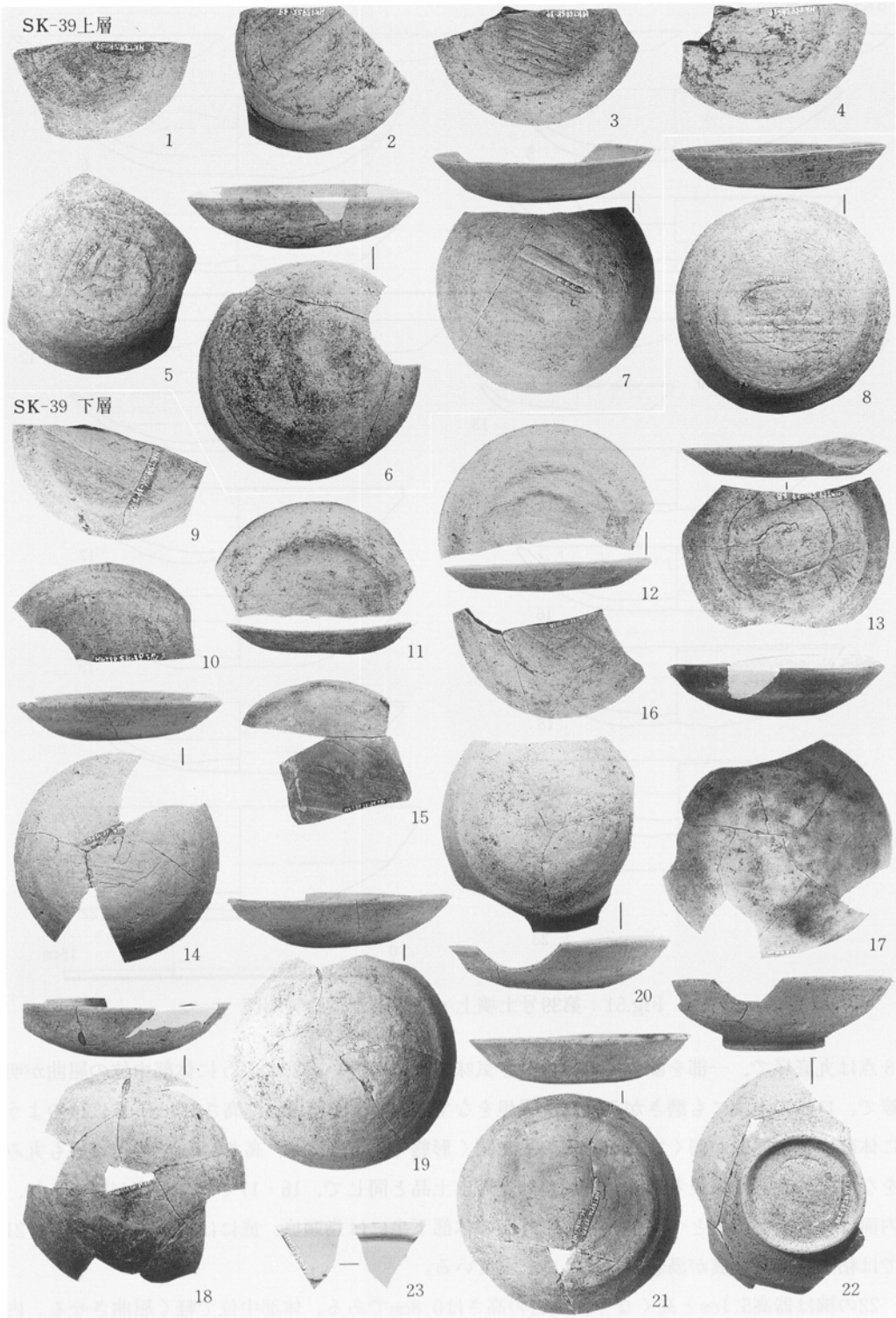


Fig.50　第39号土壙上・下層出土遺物

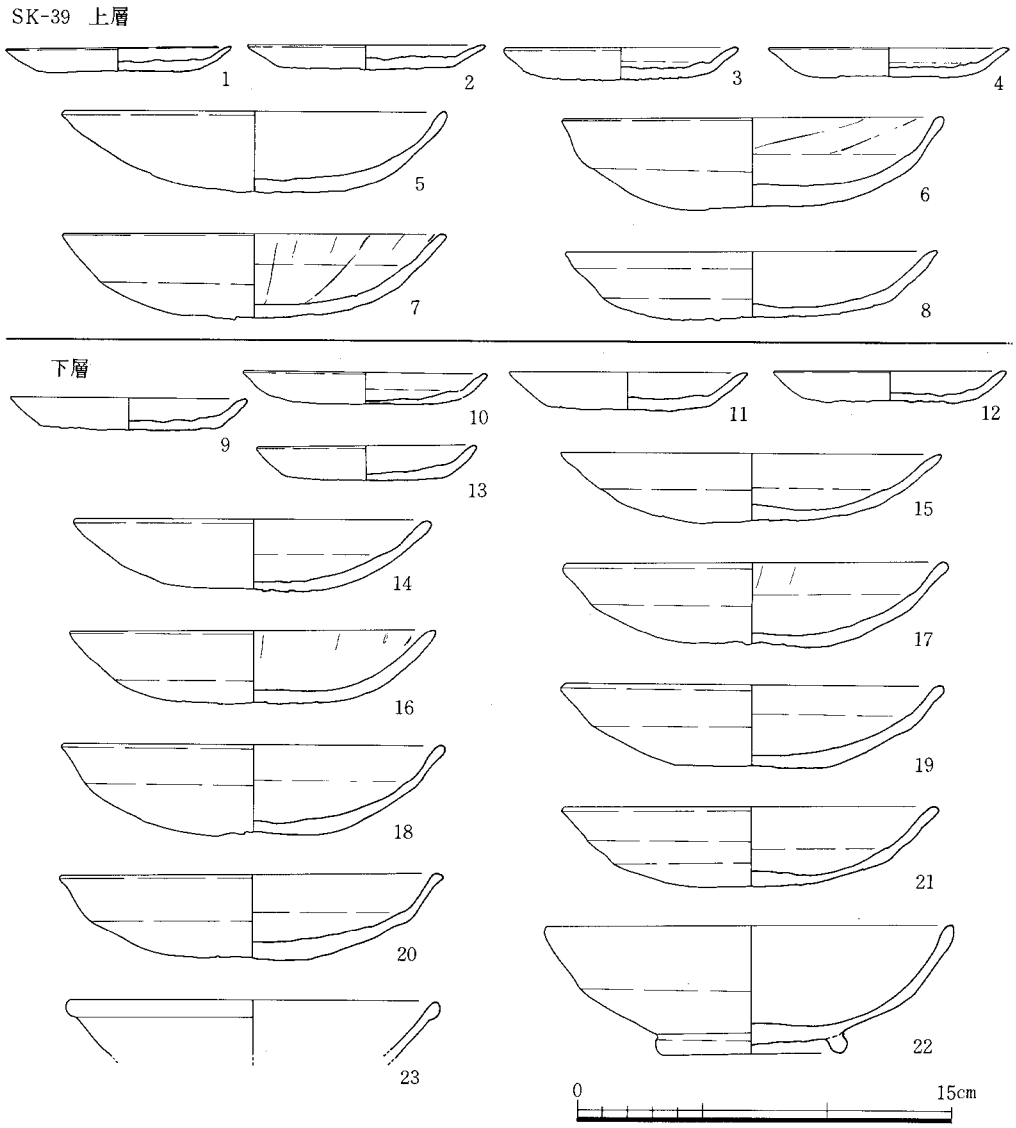


Fig.51　第39号土壙上・下層出土遺物実測図

8点は丸底坏で、一部を除いて口縁の開き気味のものが多い。20のように体部中位の屈曲が明瞭で、口縁の上端にも磨きがみられ、平坦をなす器形（口径15.4cm、高さ3.4cm）と、14のように体部中位の屈曲が弱く丸底からそのまま開く形態（口径14.3cm、高さ3.0cm）で、口唇も丸みをなすものがあり、後者が多い。調整は上層出土品と同じで、16・17ではコテ痕が認められ、内面はヨコナデのあとヘラ磨きされ、外面の体部下半には指頭痕、底には板状圧痕がつき、21では粘土紐の接合痕が渦巻状によくのこっている。

22の椀は器高5.1cmと高くなく、高台の高さは0.8cmである。体部中位で軽く屈曲させる。内

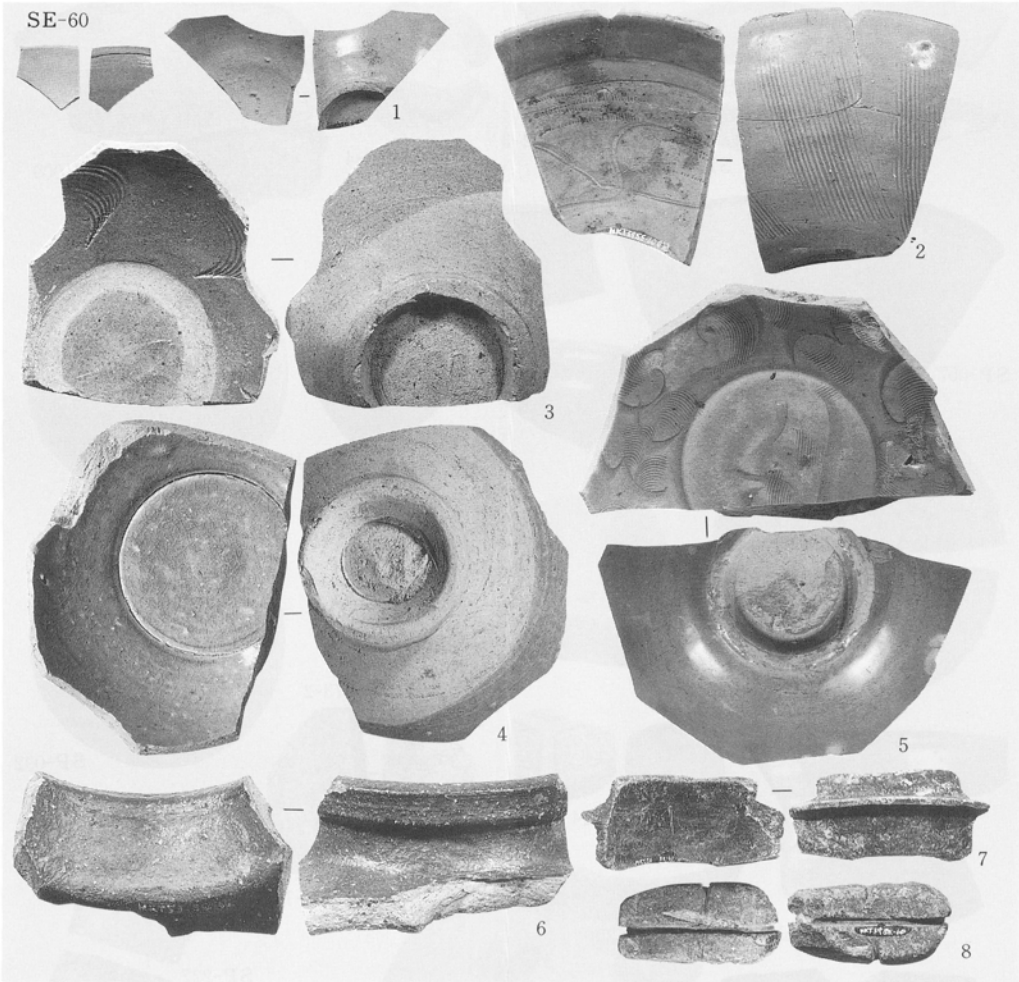


Fig.52　第60号井戸出土遺物

外面にミガキ痕があるが、胎土中に石英粒が多く、器面が荒れており判然としない。外底中央に線刻で×がみられる。

これらの出土土師器からみて、上層、下層ともに、時期差は認められず、11世紀末～12世紀初めと考えたい。

SE－60（Fig.49・52）

１は白磁碗で、黄白色の精製土に透明釉が滑らかに高台上までかかる。３の青磁碗は粗製で黄色釉が体部中位までかけられ、荒い櫛により施文される。４の釉薬はガラス質透明で黄緑色である。５は櫛文を多用する竜泉窯青磁で、黄緑色透明釉が畳付から外底まで垂れている。７は小形の石鍋、８は石錘、いずれも滑石製。

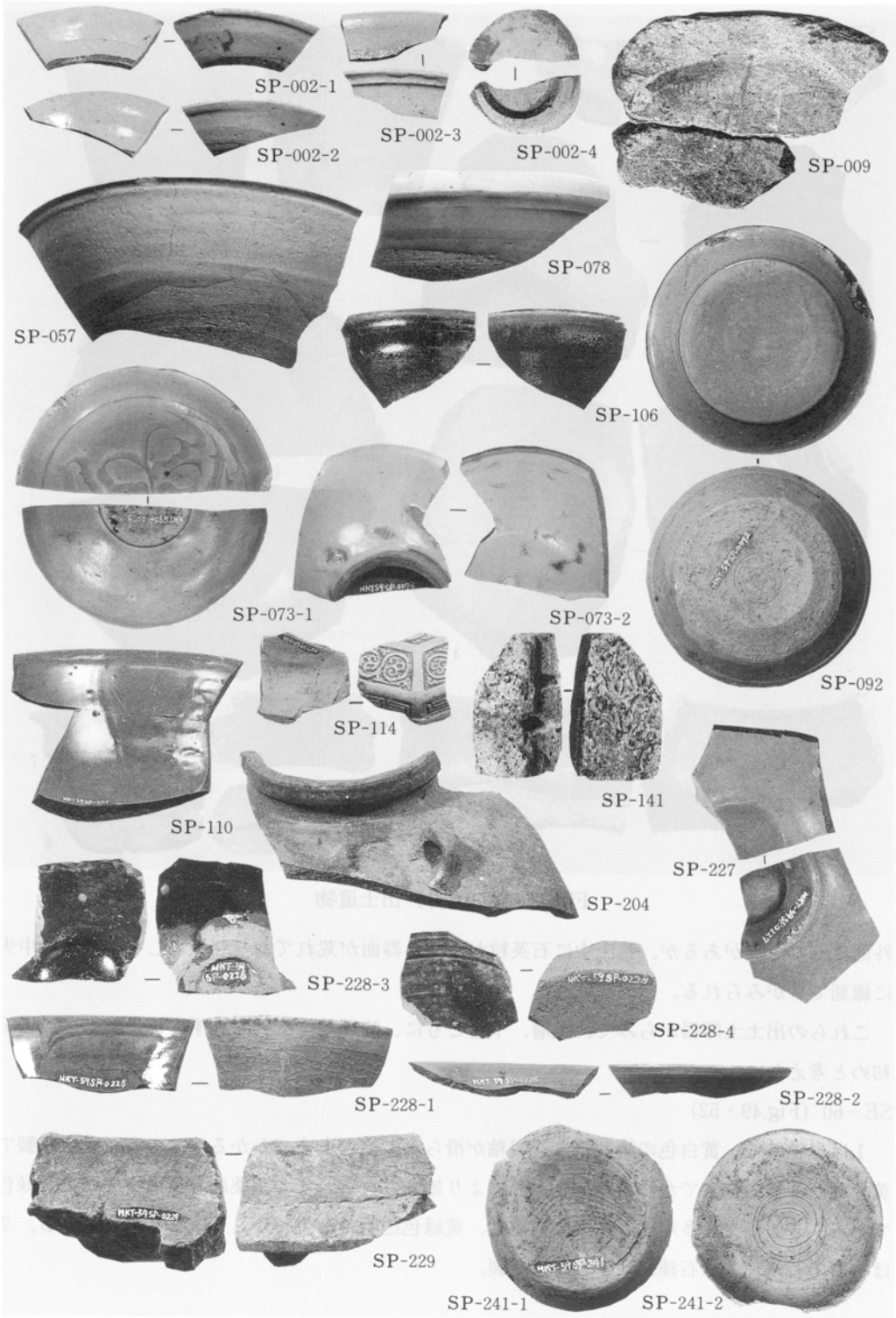


Fig.53　各柱穴出土遺物(1)

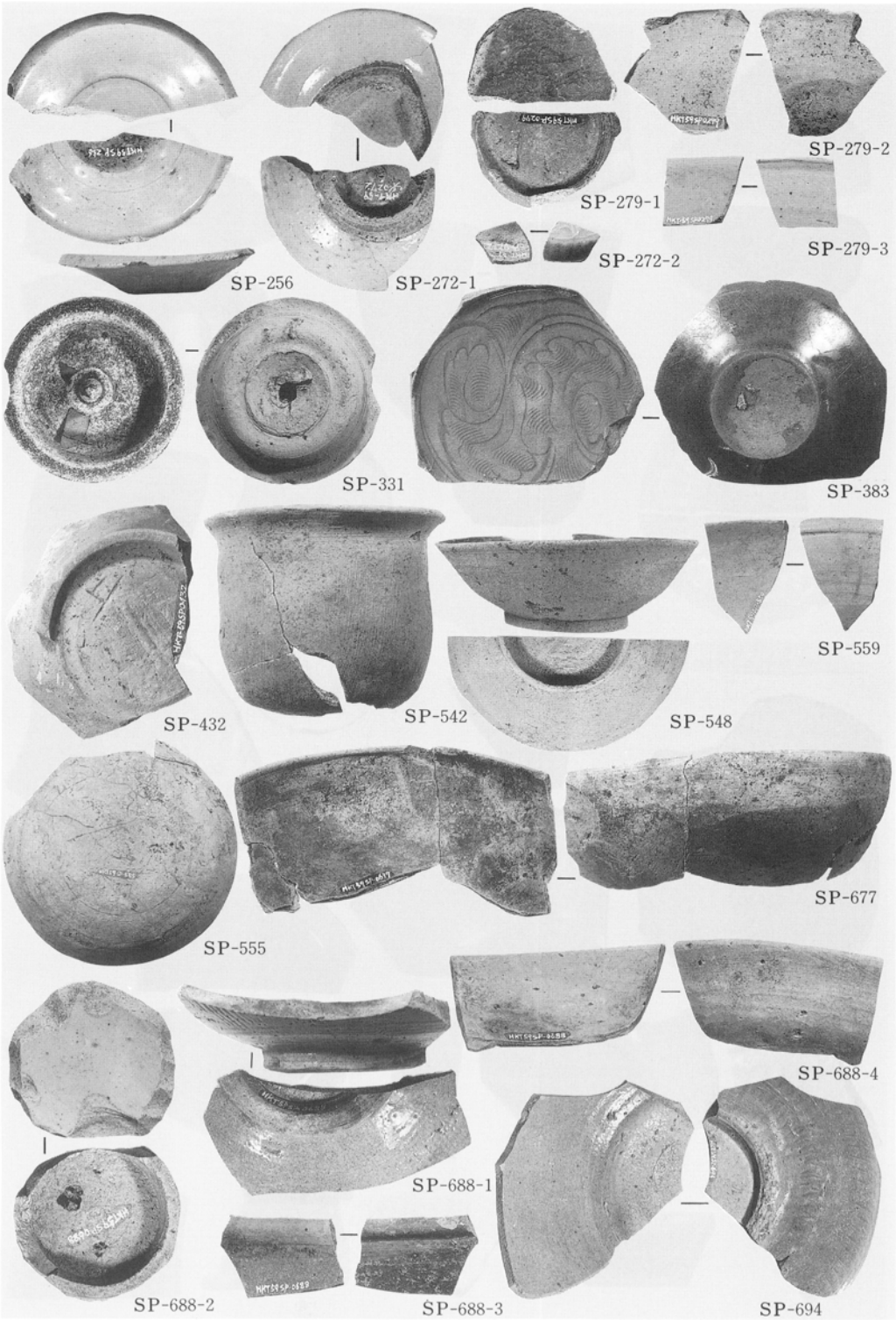


Fig.54　各柱穴出土遺物(2)

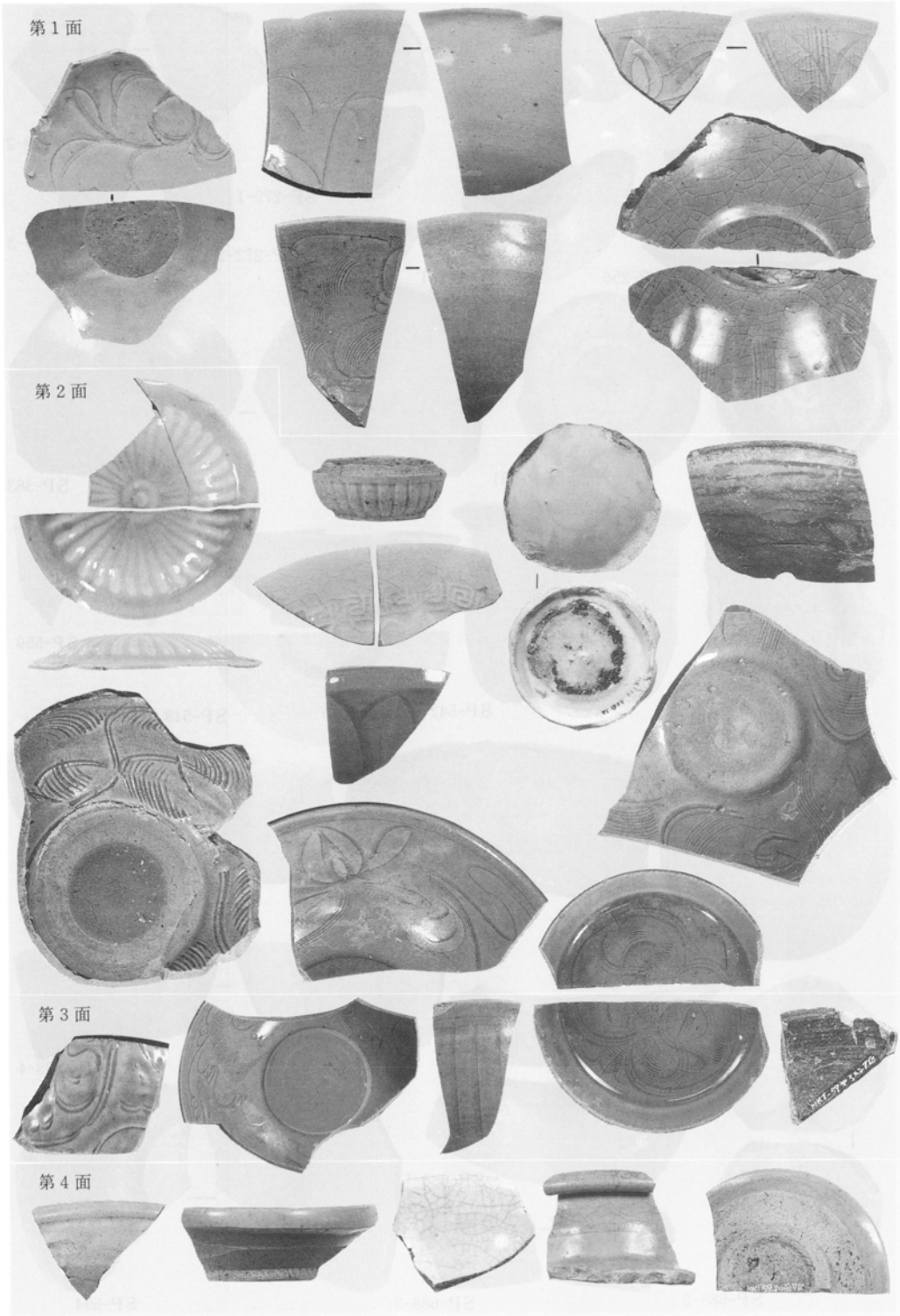


Fig.55　第１～４面出土遺物

５．第５面の調査

第５面は、第４面の層群を除去した暗茶褐色シルトから砂層の上面である。この層は調査区全域に広がり30～70cmの厚さをもち、南へわずかに傾斜している。なお、第４面層群との境は明瞭である。第５面検出面の標高は3.8～3.4mである。

この面での遺構は検出できなかった。上面から20cm前後の厚さに、７～８世紀の遺物が包含されている。なお、隣接する第65次調査では掘立柱建物が検出されており、本調査区は広場的空間として使用されていた可能性もある。

１）出土土器（Fig.57～60）

第５面では、須恵器の坏蓋・坏身・高坏・甕などと、土師器の坏蓋・坏身・高坏・甕・甑・移動式竈・製塩土器・焼塩土器と漢式土器？が出土した。

１～13は蓋形土器で、９が土師器、他は須恵器である。１～８は坏蓋、10～12は壺、９・13は埦の蓋か。１～５は有返し、６～８は無返しの坏蓋で、１・３～７は天井につまみをもっている。２・５の天井部にはヘラ記号があり、７の天井部には「上□□」の墨書がみられる。１・３・５は、受け部径15cm、10.4cm、14cm、器高4.2cm、3.2cm、4.4cm。６～８は口径14.4cm、16cm、12.8cm、器高2.6cm、2.6cm、2.5cmである。10～12は短頸壺の蓋と考えられ、11の天井部には「ナ」の浅いヘラ記号がある。10・11の口径は９cm、12は12cm。器高2.8cm、3.4cm、3.9cmである。９・13は口径が18cm、21cmと大きく、大形埦の蓋か。９の口縁は無返しで端部は丸く仕上げている。13は1/10の破片で、盤の可能性もある。

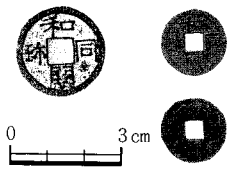


Fig.56　出土和同開珎

14～19は受け部をもつ須恵器の坏身で、14がもっとも高い受け部の立ち上がりをもっている。16・17の外底にはヘラ記号がみられ、17の内面から受け部にかけ墨痕がみられる。なお、18は赤焼きの須恵器である。受け部径は、14が15.2cm、15が12cm、16が11.6cm、17・18が11cm、19が11cm。器高は14が（4.6cm）、15が3.7cm、16が11.6cm、17が3.8cm、18が3.1cm、19が2.5cm。

20～26は高台付の須恵器坏で、26がもっとも高い高台を貼り付けている。26の外底にヘラ記号、21の見込みに当て具がみられる。口径は、20が12.8cm、21が14cm、22が13.8cm、23が9.6cm、24が11.2cm、25が9.2cm。器高は、20が4.35cm、21が3.75cm、22が４cm、23が4.15cm、24が4.45cm、25が3.7cm。

27～37は高坏で、36が土師器、他は須恵器である。37は坏の可能性もある。28は口径8.9cm、器高7.6cm、底径7.4cm。口径は、27が9.4cm、30が12cm、35が19cm、37が10cm。35の坏部は皿状をなし、大きく屈曲し直に短く立ち上がり口縁部となり、端部は平坦面をなしている。36は皿状をなす坏部をもち口縁部を丸く仕上げている。口径24cm。

38～41は無高台の坏で、41は内黒の黒色土器である。38～40の内外面はナデ調整、41の内外

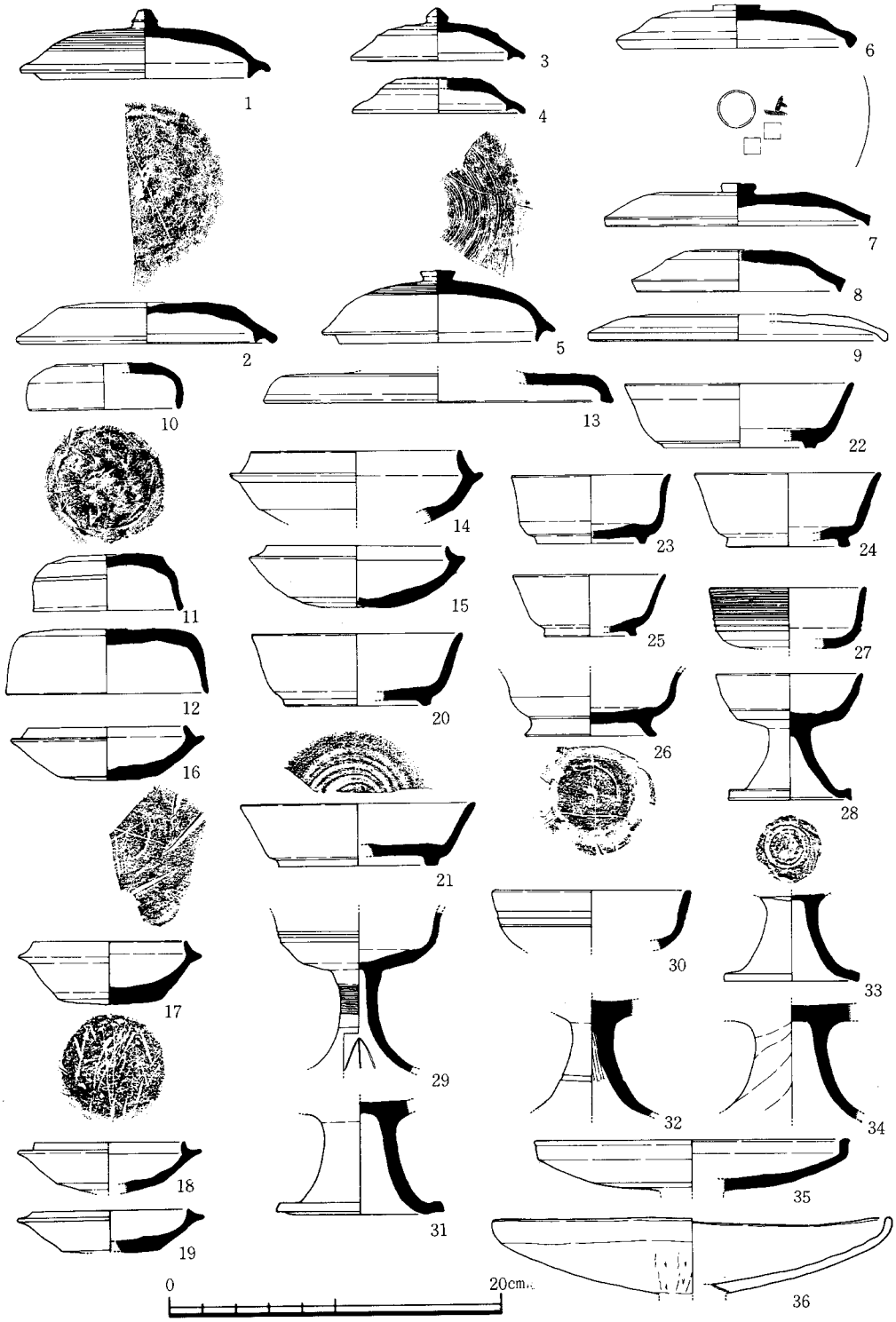


Fig.57　第５面出土土器実測図(1)

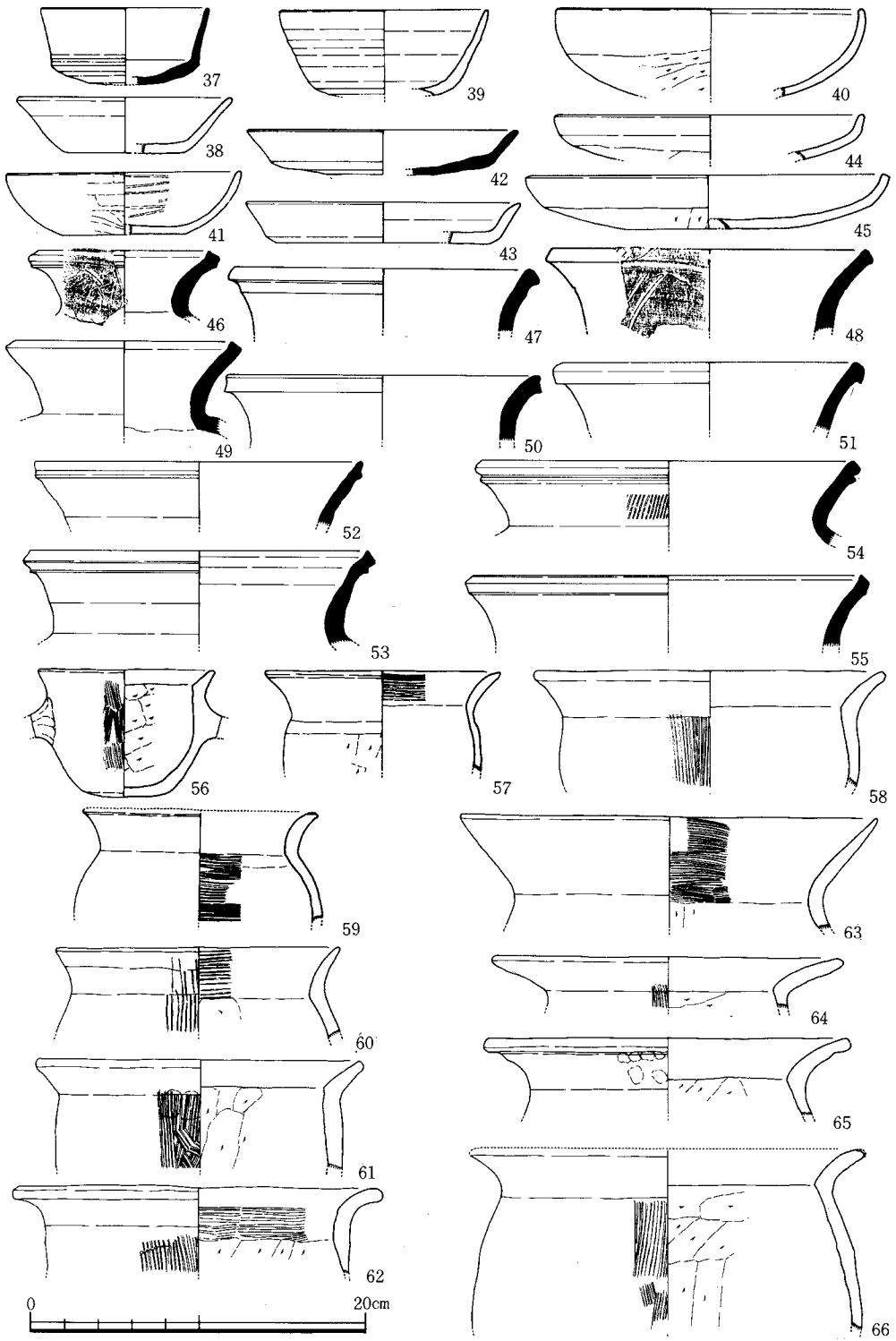


Fig.58　第5面出土土器実測図(2)

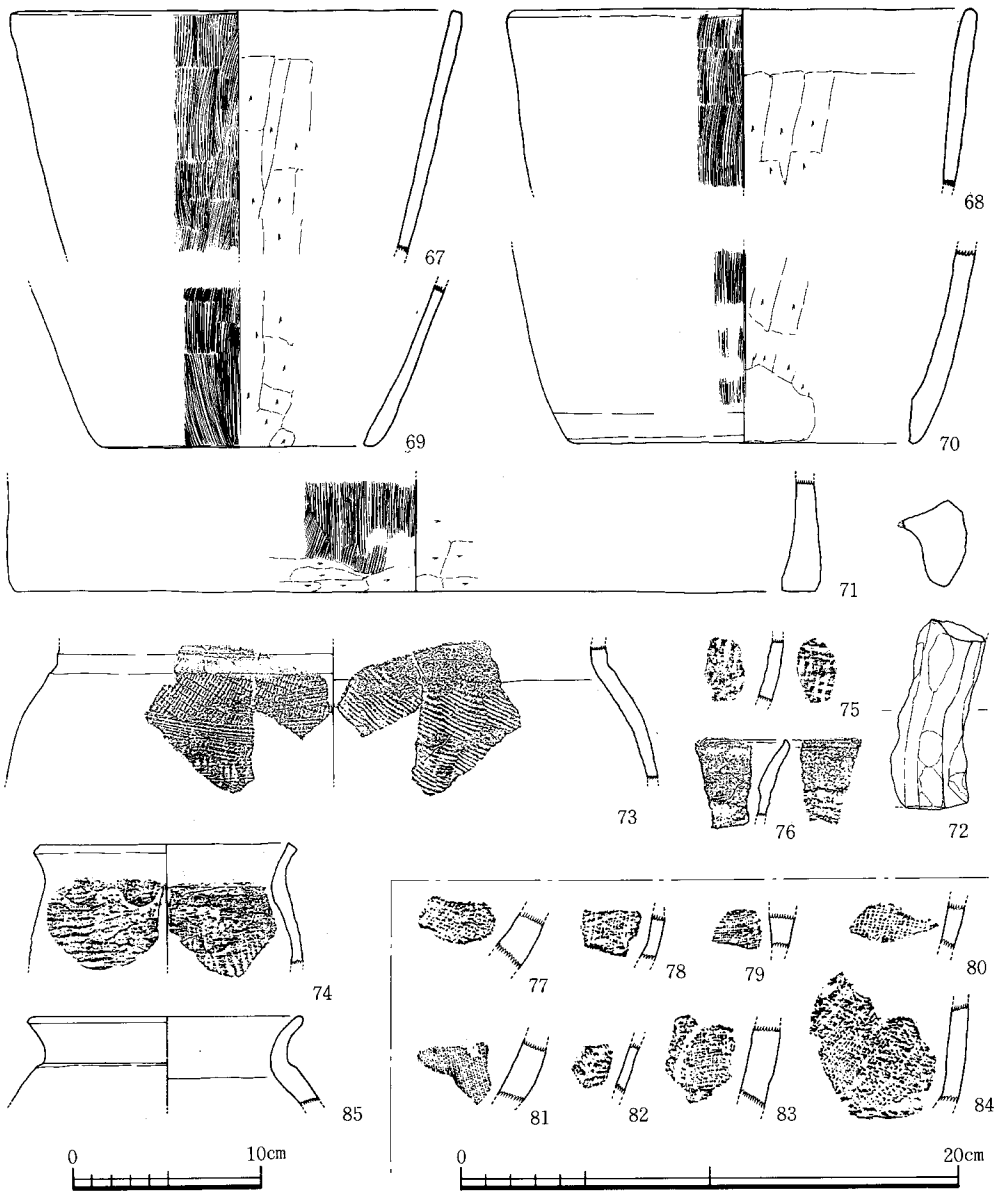


Fig.59　第５面出土土器実測図(3)

面はヘラミガキが施されている。口径は38が12.8cm、39が12.4cm、40が18.6cm、41が14cm。器高は、38が3.4cm、41が3.75cm。

42～44は皿、45は盤で、42が須恵器、他は皿である。42は口径16.2cm、43は口径16.4cm、器高2.45cm。44・45の外底はヘラケズリ、口縁部は横ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。44は口径19.4cm、45は口径21.8cm、器高3.2cm。

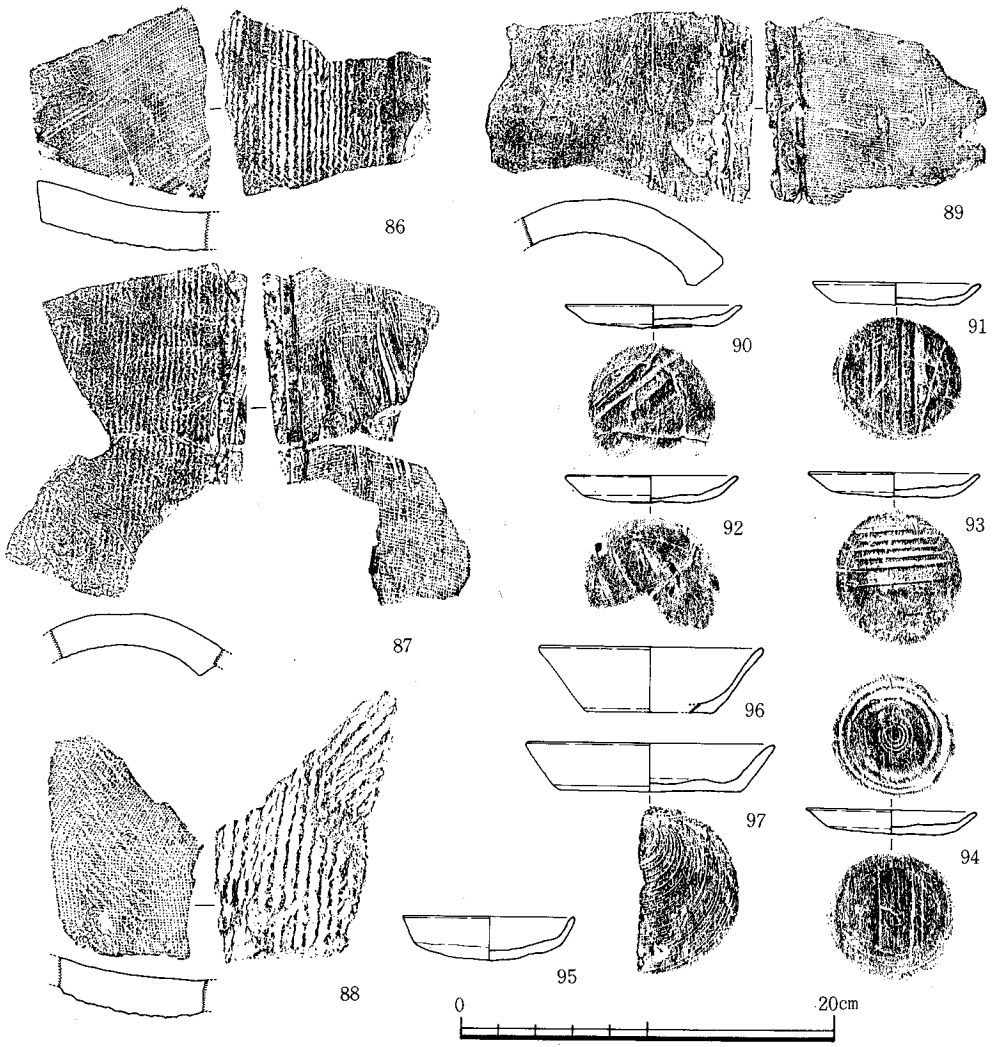


Fig.60　第5面出土遺物実測図

46は横瓶か提瓶で口径11.4cm。頭部にヘラ記号がある。47～66は甕で、47・48が土師質須恵器(赤焼き)、49～55が須恵器、他は土師器である。48の頸部にはヘラ記号がある。口径は49が14cm、47が16.6cm、他の須恵器は19.1±0.5cm。56は把手付で口径10.5cm、器高7.7cm。口径は57・59が14cmと小さく、58・61・62・64・65が21cm前後、63・66が24.5cm前後である。

67～70は土師器の甑で、口径は67が24cm、68が25cm、底径は69が14cm、70が18cm。71・72は土師器の移動式竈である。

73～76は製塩土器、77～84は焼塩土器。74の口径は14cm。77～84の内面には布圧痕（絹）があり、0.4～1.2cmの器壁がある。

85は口径14.6cmの甕で、器内外面とも橙色を呈し、胎土には雲母微粒を多量に含み、堅緻で

焼成も良い。漢式土器か。

90～94は外底に板状圧痕、77は糸切り底の皿で、41・95・96ともに混入品と考えられる。

2）その他の出土遺物（Fig.56・60）

土器のほかに、鞴の羽口、土錘などの土製品、瓦類、砥石・磨石などの石製品、釘などの鉄製品、少量の鉄滓と「和同開珎」1点が出土した。

「和同開珎」は、開の字体が「開」となっており、径25㎜、最大厚1.6㎜である。

86・88は平瓦、87・89は丸瓦。

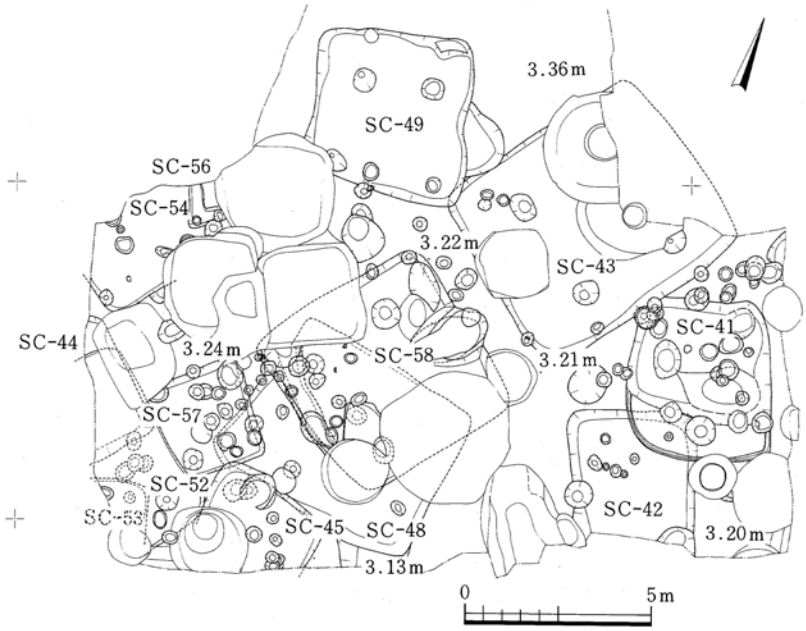


Fig.61　第6面遺構配置図

Fig.62　第6面遺構検出状況

６．第６面の調査

第６面は、暗茶褐色シルト～砂層を除去し、調査区全域に広がる暗褐色砂層中の標高3.5～3.1mが遺構検出面である。第５面相当層を除去し、暗褐色砂層になると、古墳時代後半期の須恵器などの遺物がまとまって含まれている。しかし、遺構の平面形が把握できないため、暗褐色砂層検出面から約10cm前後除去した。この面で古墳時代後半期の遺構を検出した。なお、暗褐色砂層上面も第６面遺構検出面もやや南に傾斜している。暗褐色砂層は上面から20cm前後の厚さをもち、この層を除去すると黄褐色砂層となり、黄褐色砂層に掘り込んだ形で古墳時代初期の遺構を検出した。

検出遺構としては、古墳時代後半期の竪穴式住居址（以下、住居址とする）７基、同前半期の住居址５基がある。以上のほか、土壙・溝・柱穴を検出した。

１）竪穴式住居址と出土遺物

SC－41（Fig.63・65・66）

本住居址は調査区の東側に位置し、SC－42を切り、SC－43に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、東北4.3m、南西3.8mを計る。50～60cmの遺存で、南側に0.7～1.2mのベットが痕跡的に遺存していた。床面は皿状をなし、壁は緩く立ち上がっている。主柱穴は４本である。明灰色砂・暗褐色砂・明褐色砂を覆土とし、最上層の明灰色砂中に多量の遺物が含まれていたほか、遺物は床面まで出土した。

出土土器（Fig.64・67～69）：土師器の甕・壺・高坏・坏がある。

１～22は甕で、いずれも球状の胴部から屈曲して外反する口縁部をもつもので、器壁は薄く仕上げられている。20は屈曲部

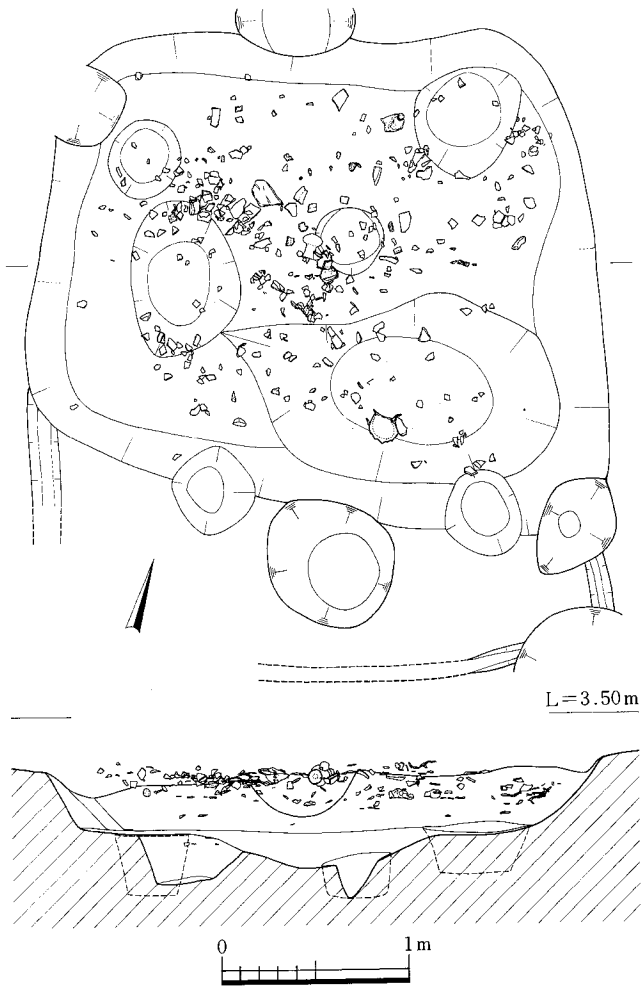


Fig.63　第41号竪穴式住居址（SC—41）実測図

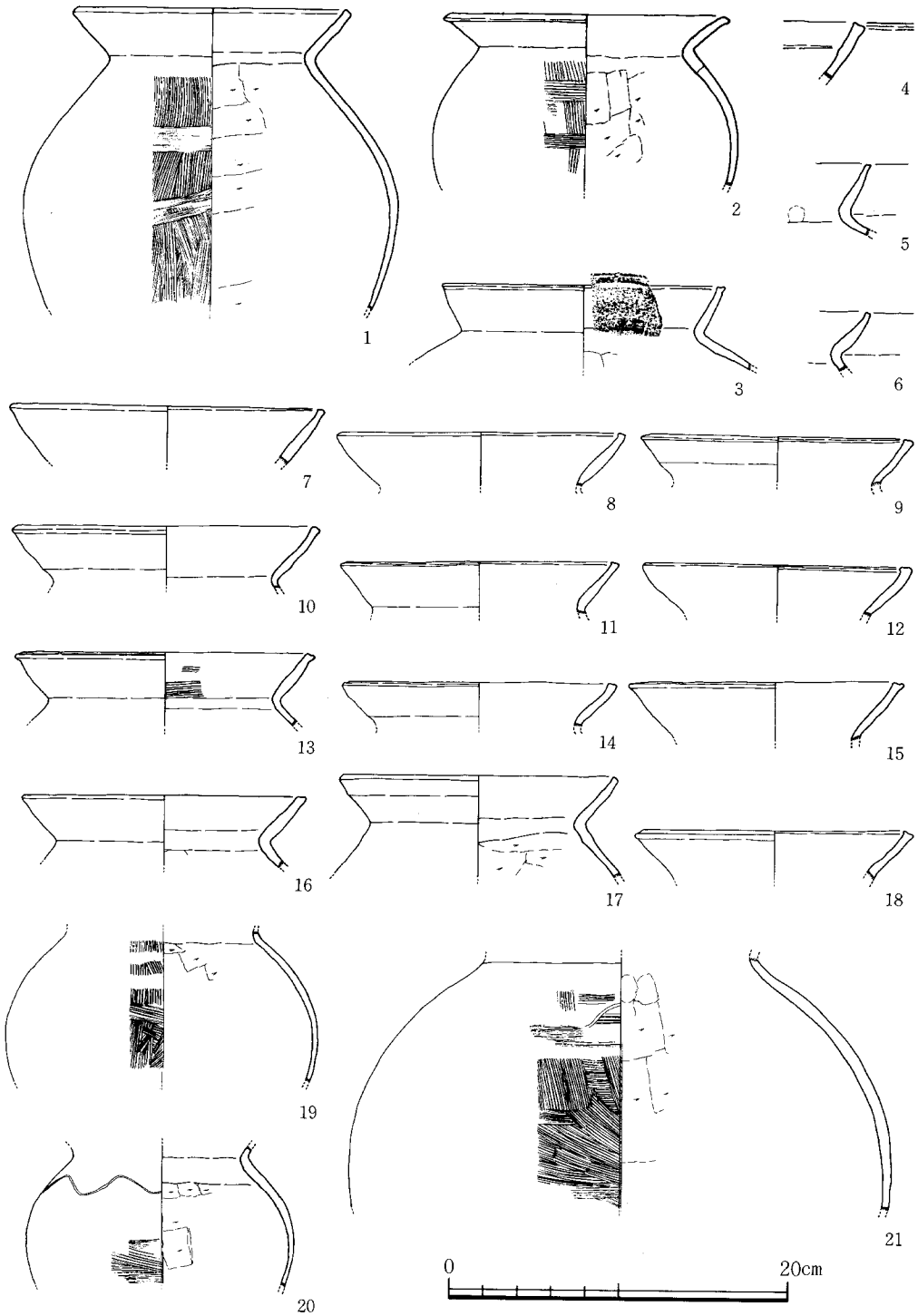


Fig.64　第41号竪穴式住居址出土土器実測図(1)

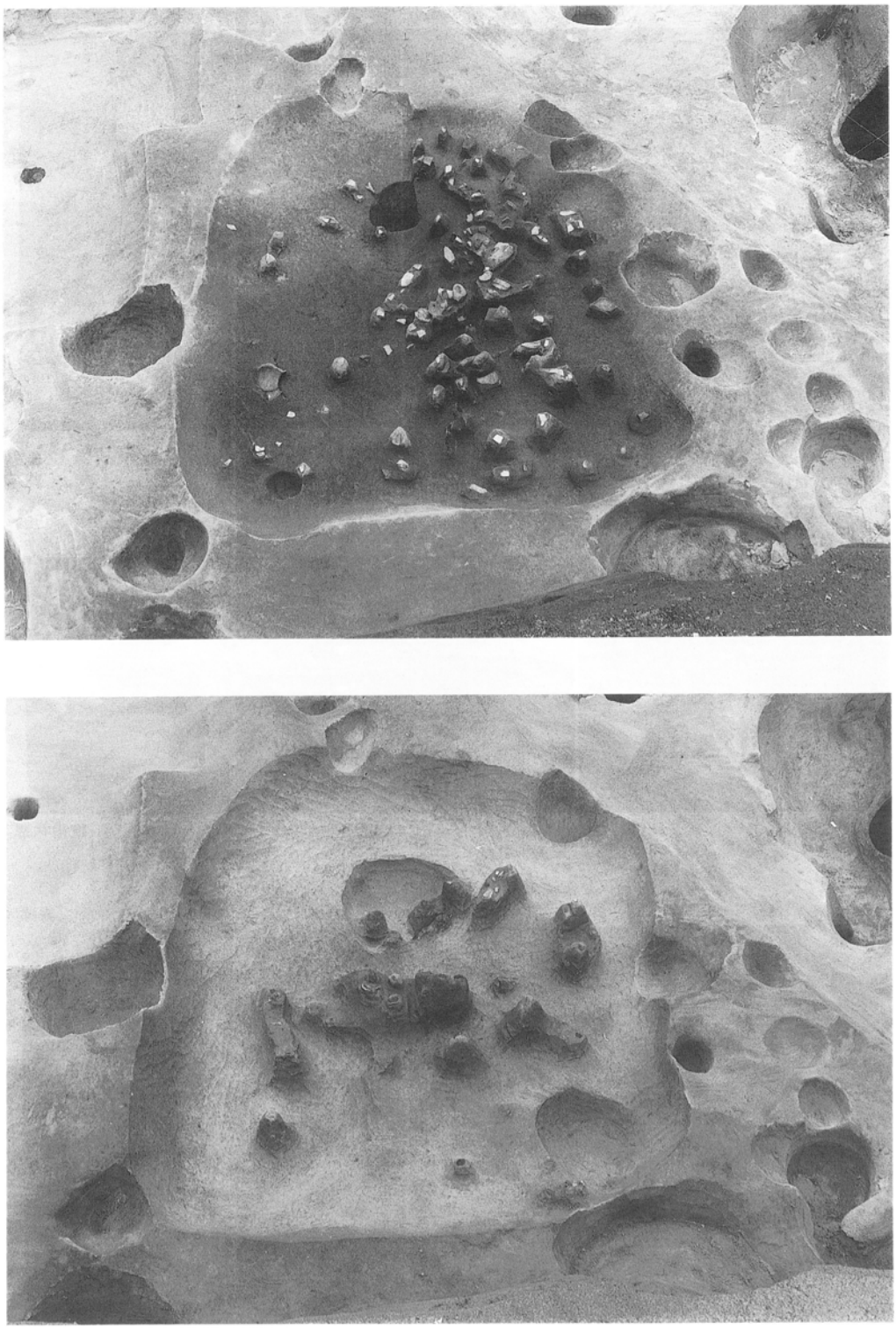


Fig.65　第41号竪穴式住居址遺物出土状態(1)

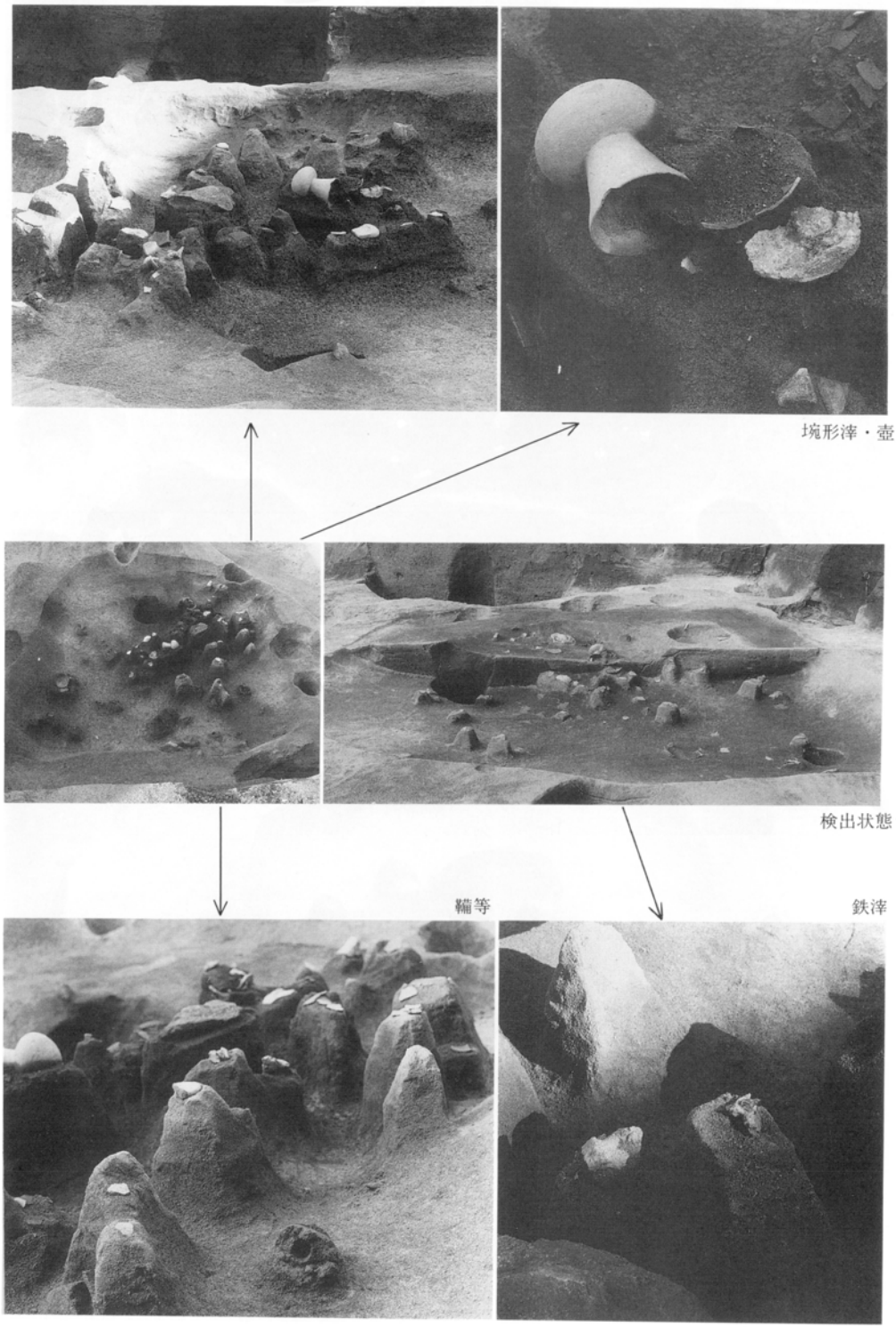


Fig.66　第41号竪穴式住居址遺物出土状態(2)

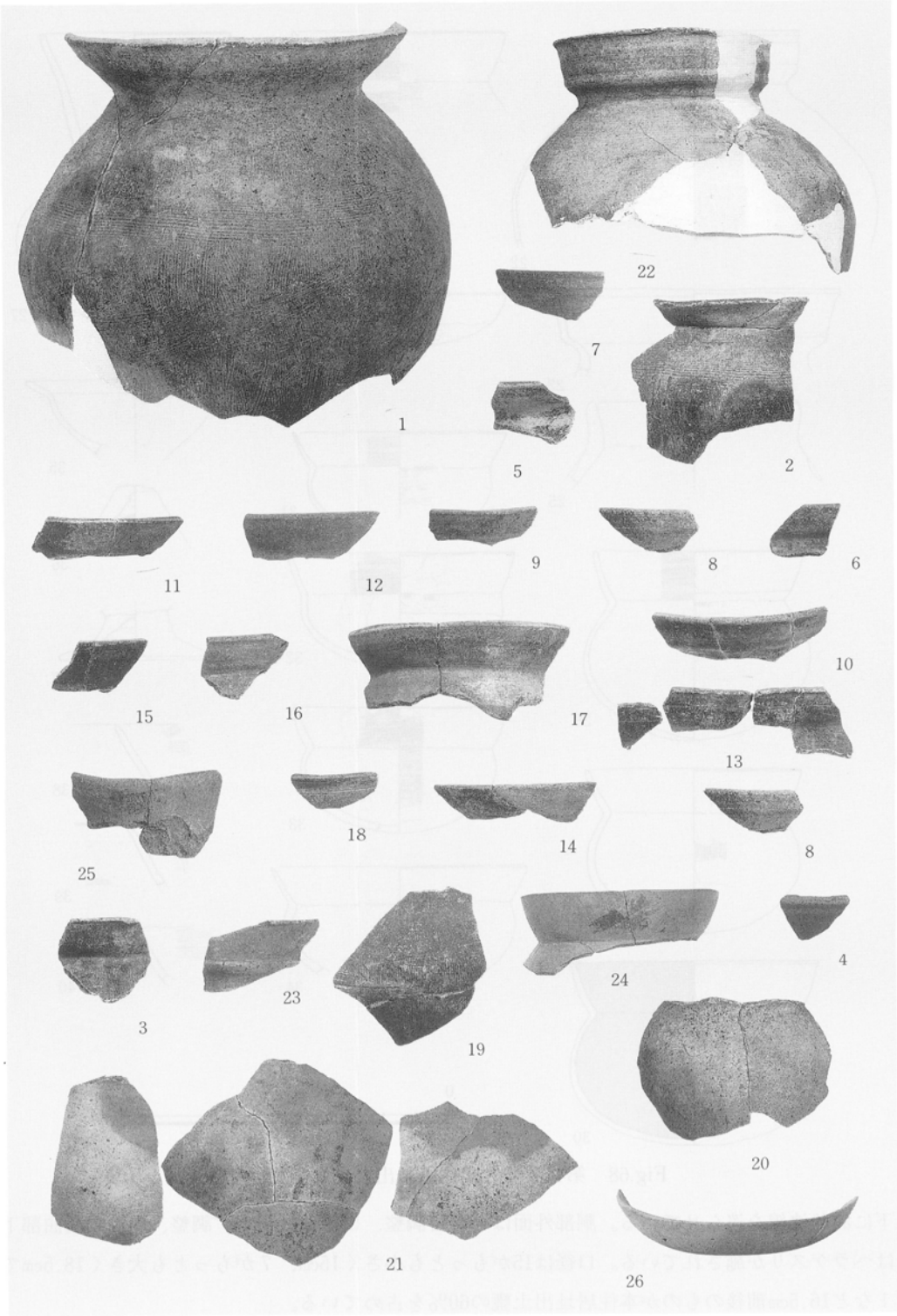


Fig.67　第41号竪穴式住居址出土甕形土器

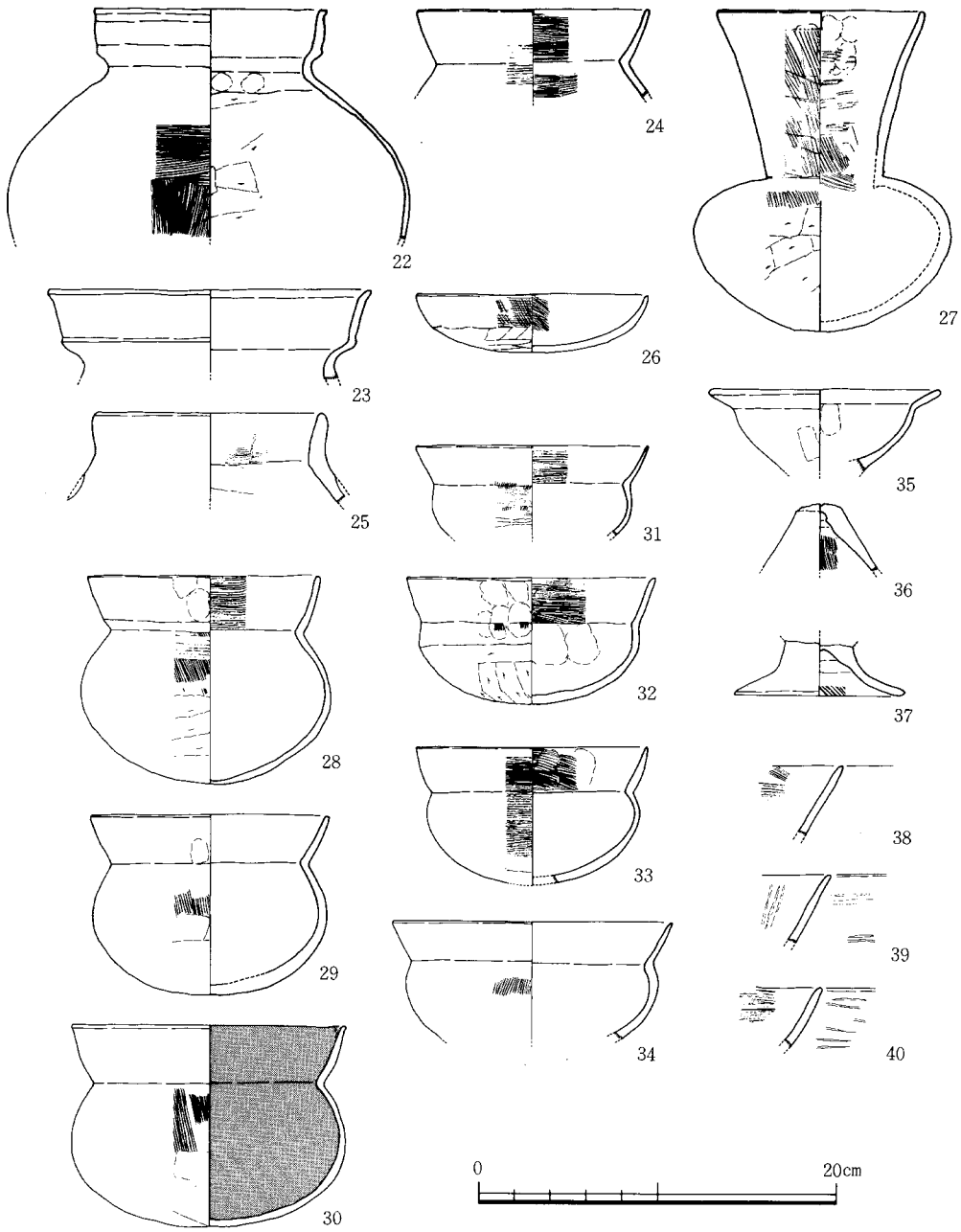


Fig.68　第41号竪穴式住居址出土土器実測図(2)

下に波状沈線を巡らせている。胴部外面はハケ目調整、口縁部は横ナデ調整、内面の屈曲部下はヘラケズリが施されている。口径は15がもっとも小さく15cm、7がもっとも大きく18.5cmで、1など16.5cm前後のものが本住居址出土甕の60%を占めている。

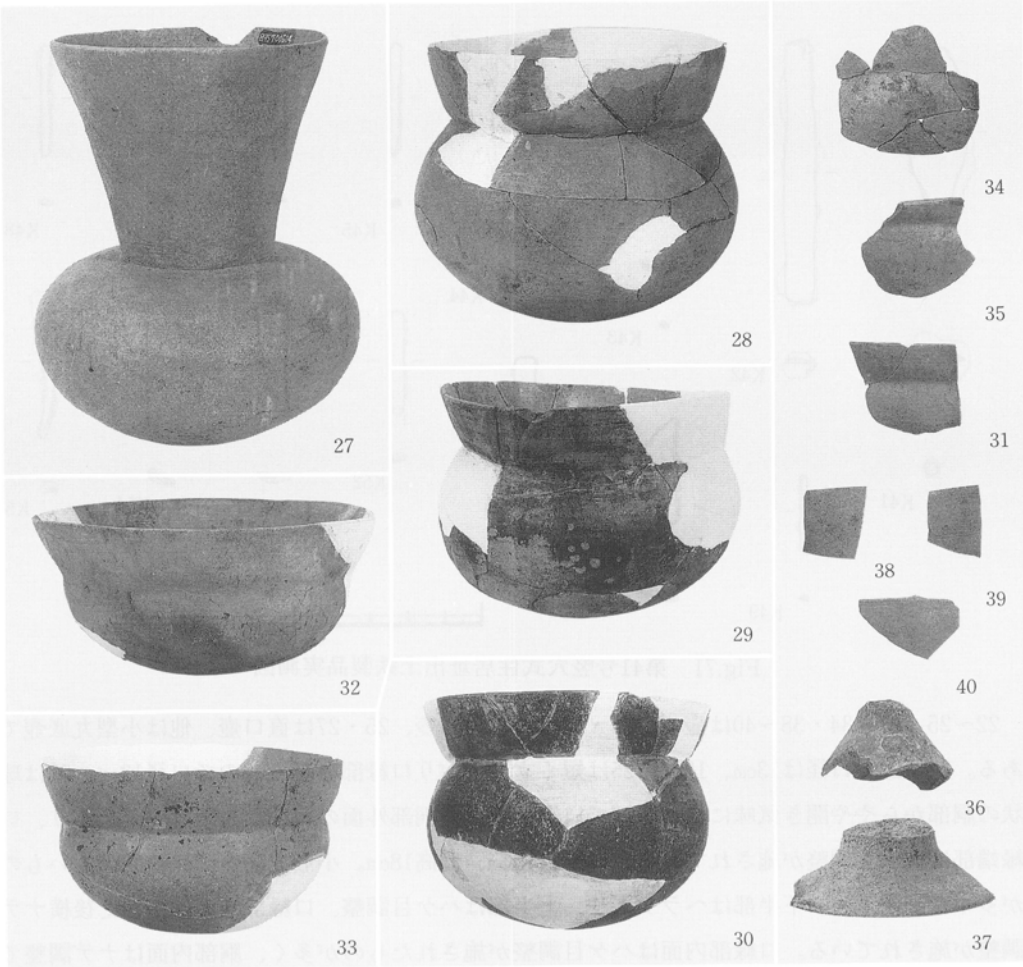


Fig.69　第41号竪穴式住居址出土土器

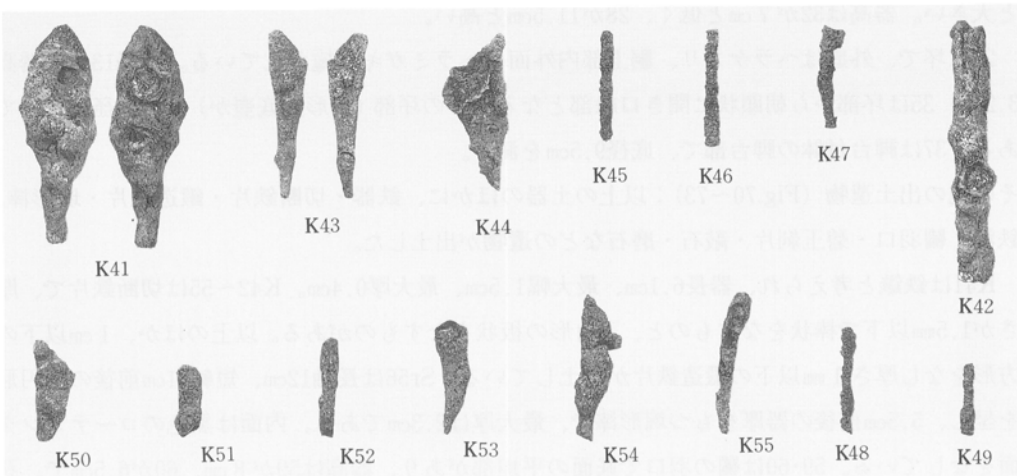


Fig.70　第41号竪穴式住居址出土鉄製品

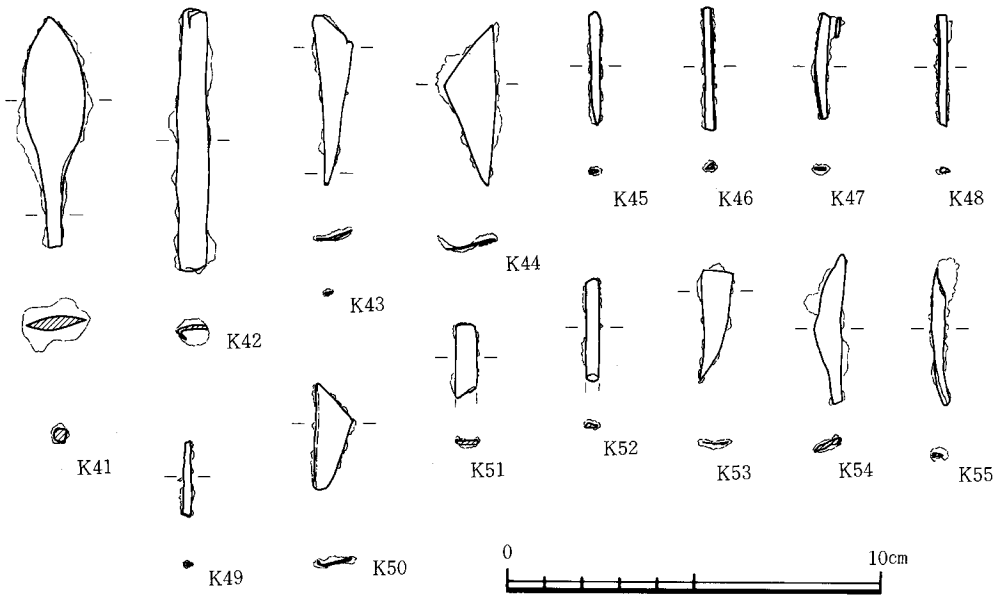


Fig.71　第41号竪穴式住居址出土鉄製品実測図

22～25・27～34・38～40は壺で、22・23は二重口縁壺、25・27は直口壺、他は小型丸底壺である。22・23の口径は13cm、18cm。25は短く立ち上がり口縁部となるもので口径13cm。27は球状の胴部からやや開き気味に長く延びて口縁となり、胴部外面の肩部から下はヘラケズリ、口縁端部は横ナデ調整が施されている。口径11.5cm、器高18cm。小形丸底壺は比較的大きいものが多く、胴部下面の下半部はヘラケズリ、上半部はハケ目調整、口縁部外面は指押え後横ナデ調整が施されている。口縁部内面はハケ目調整が施されたものが多く、胴部内面はナデ調整で仕上げている。30の内面は赤色顔料が塗布されている。口径は31が13cmと小さく、34が15.6cmと大きい。器高は32が7cmと低く、28が11.5cmと高い。

26は坏で、外底はヘラケズリ、胴上部内外面はヘラミガキが施されている。口径13cm、器高3.2cm。35は坏部から朝顔状に開き口縁部となる高坏の坏部（小形丸底壺か）で、口径13.5cmである。37は脚台付鉢の脚台部で、底径9.5cmを測る。

その他の出土遺物（Fig.70～73）：以上の土器のほかに、鉄器・切断鉄片・鍛造鉄片・椀形滓、鉄滓・鞴羽口・碧玉剝片・敲石・磨石などの遺物が出土した。

K41は鉄鏃と考えられ、器長6.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cm。K42～55は切断鉄片で、厚さが1.5mm以下で棒状をなすものと、三角形の板状をなすものがある。以上のほか、1cm以下の方形をなし厚さ1mm以下の鍛造鉄片が出土している。Sr56は長軸12cm、短軸11cm前後の楕円形を呈し、5.5cm前後の器厚をもつ椀形滓で、最大厚は2.3cmである。内面は黒色のコーティング面をなしている。59･60は鞴の羽口で底面の平坦部があり、器高は59が8cm、60が6.5cmで、孔

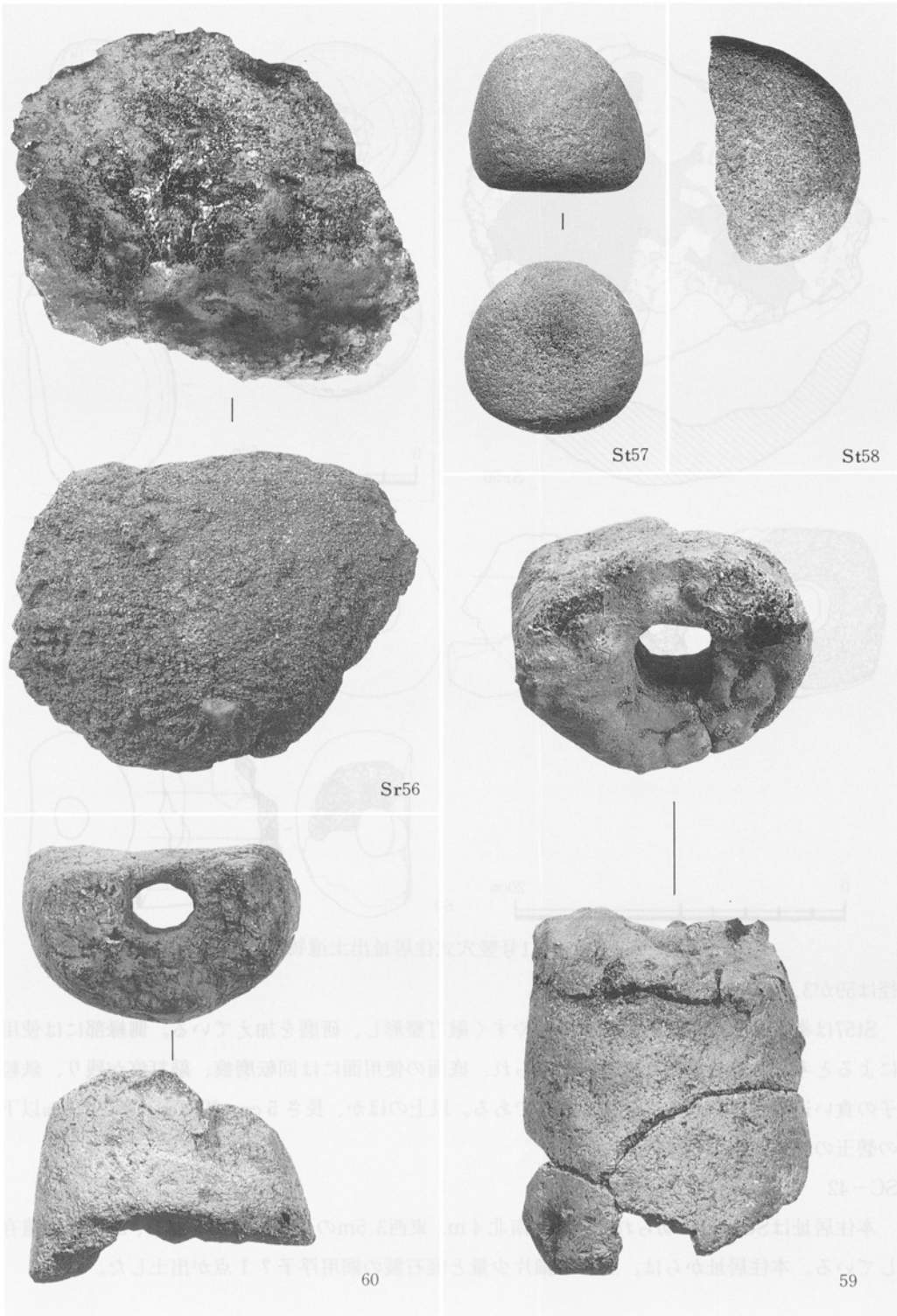


Fig.72　第41号竪穴式住居址出土遺物

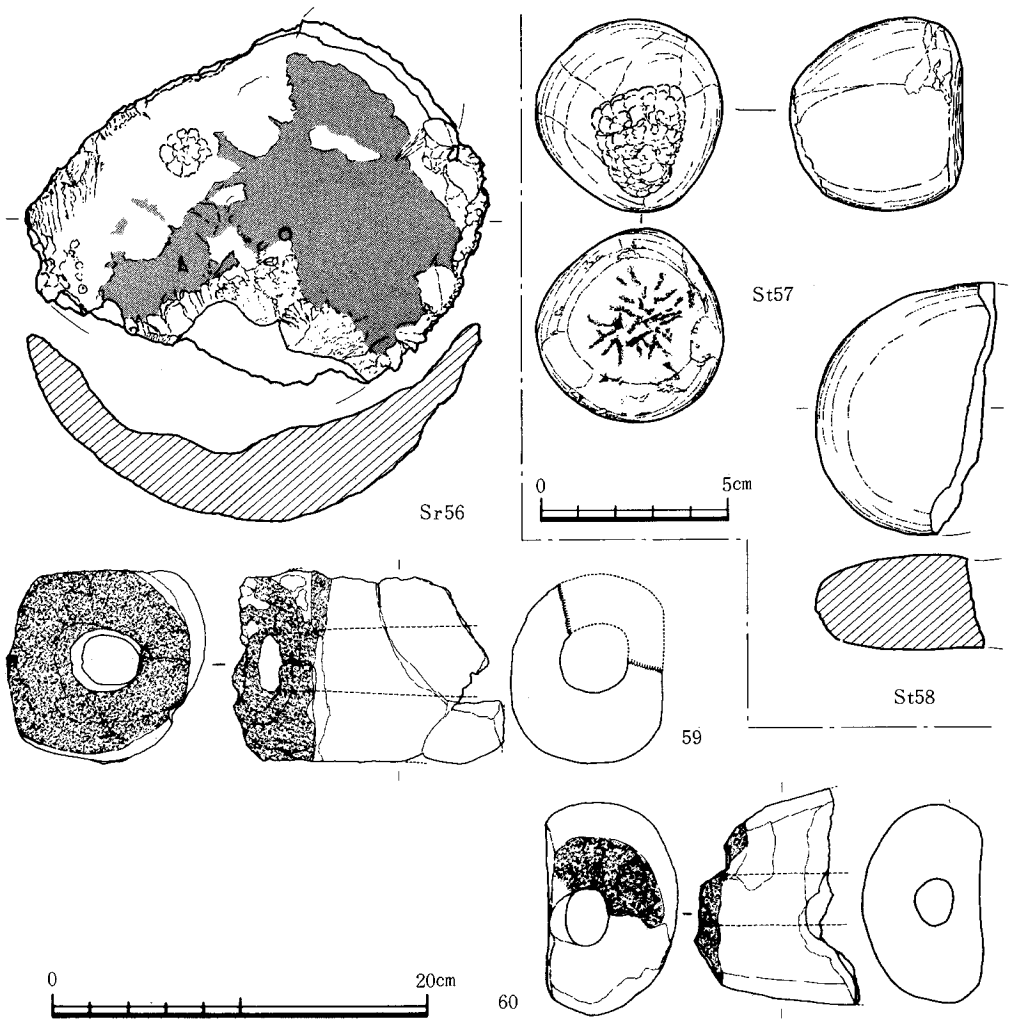


Fig.73　第41号竪穴式住居址出土遺物実測図

径は59が3.6cm、60が2.3cm前後である。

St57は拳よりやや小さめの礫を持ちやすく敲打整形し、研磨を加えている。側縁部には使用によると考えられる手擦れ摩耗痕がみられ、底面の使用面には回転磨痕、敲打痕が残り、鉄粒子の食い込みがみられる。St58は磨石である。以上のほか、長さ5cm、幅2cm、厚さ0.6cm以下の碧玉の剥片が出土している。

SC－42

本住居址はSC－41に切られている。南北4m、東西3.5mの隅丸長方形を呈し、35cm前後遺存している。本住居址からは、土器の細片少量と軽石製の網用浮子？1点が出土した。

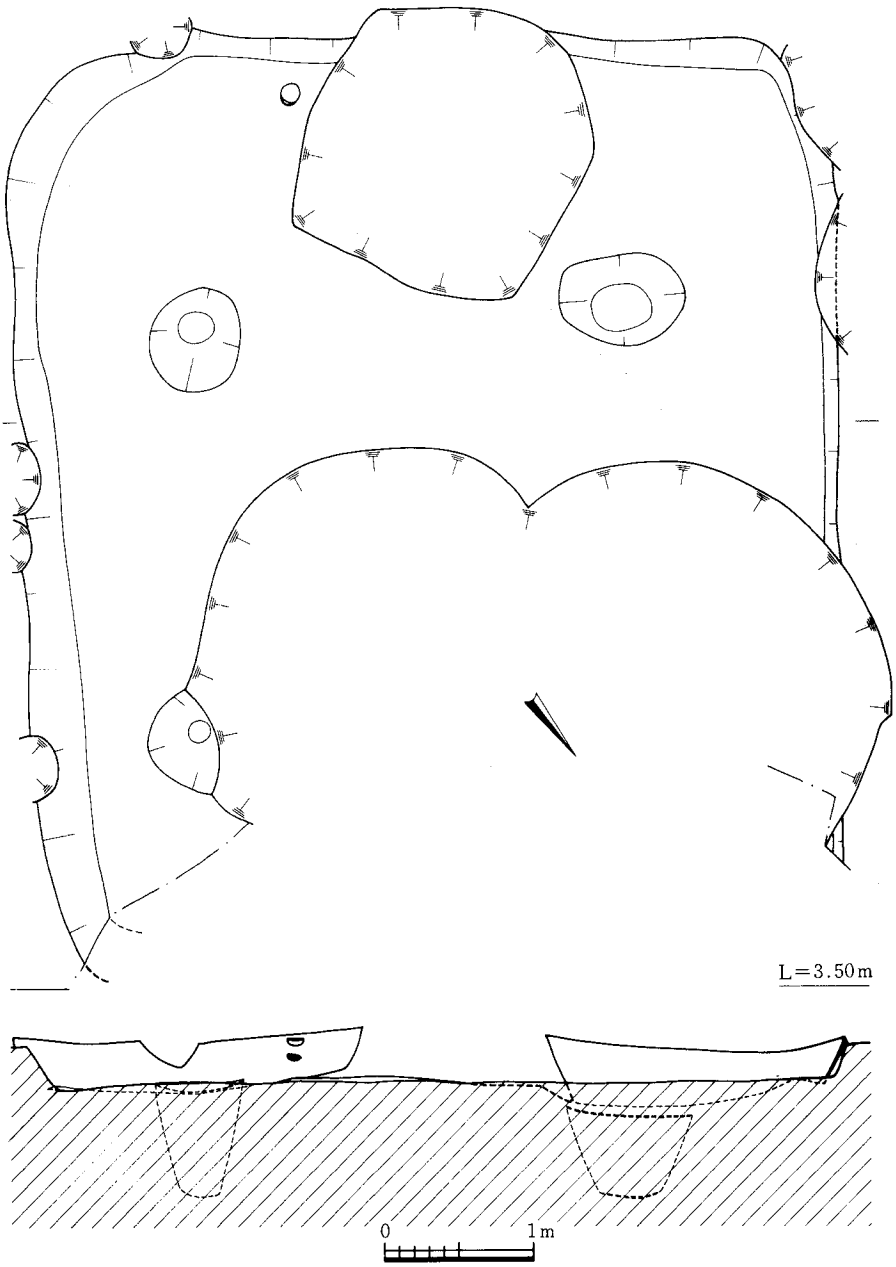


Fig.74　第43号竪穴式住居址（SC—43）実測図

SC－43（Fig.74）

本住居址はSC－41を切り、SE－36･60、SC－49に切られている。北東部が調査区外に延びているが、長軸6.4m、短軸5.5mの隅丸長方形を呈す住居址で30cm前後遺存している。床面はほぼ

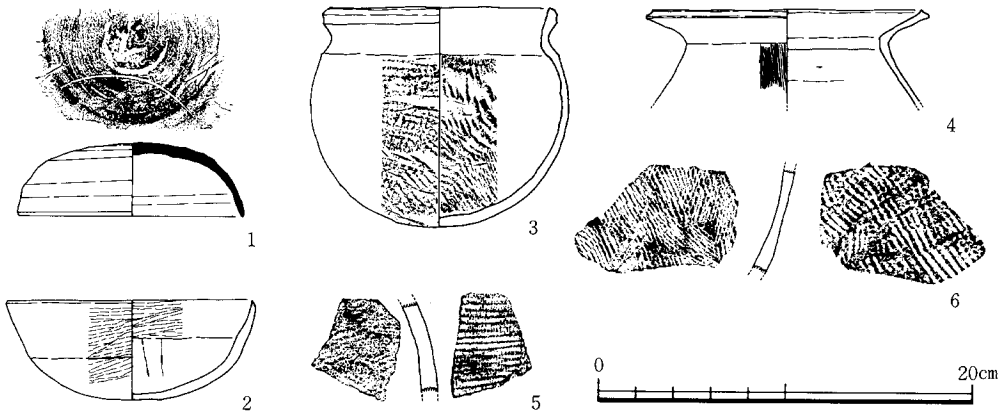


Fig.75　第43号竪穴式住居址出土土器実測図

平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がり主柱穴は４本で、北側辺に竈をもつと考えられる。

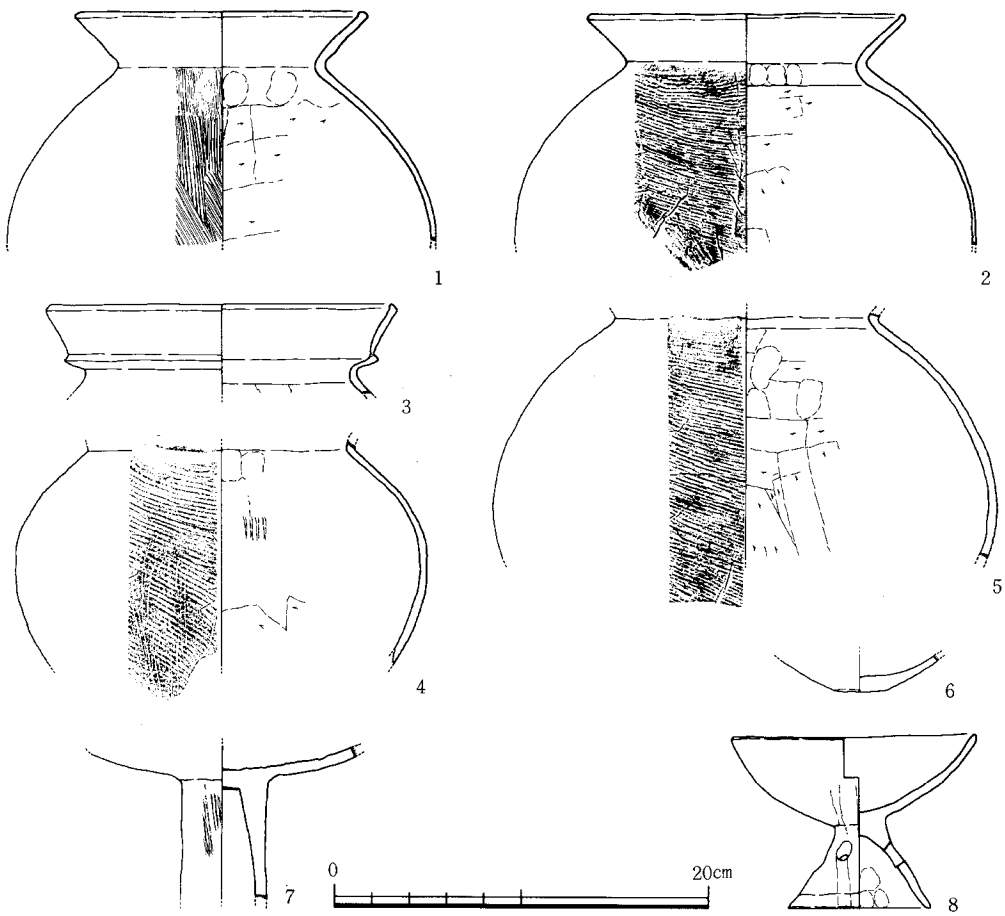


Fig.76　第44号竪穴式住居址出土土器実測図

出土遺物（Fig.75）：本住居址からは、少量の土器と石製品２点が出土した。

１は須恵器の坏蓋で、天井部にヘラ記号があり、口径13cm、器高４cmである。３・５・６は外面に叩き痕があり、内面に当て具痕が残る土師器の甕で、３は製塩土器の可能性がある。３は口径13cm、器高11.7cm。２・４は古式土師器で混入品。他に釣用軽石製浮子などがある。

SC－44（Fig.77）

本住居址は調査区の西側に位置し、SC－52・57に切られており、大半は調査区外に延びている。隅丸方形を呈する住居址で、30cm前後遺存している。床面は平坦である。

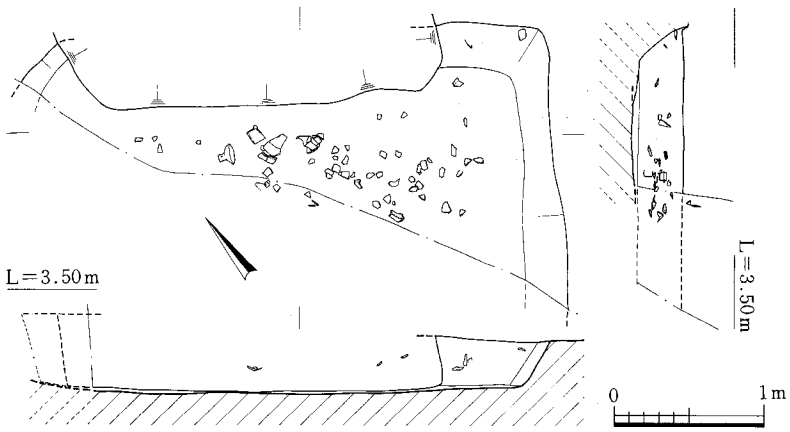


Fig.77　第44号竪穴式住居址（SC－44）実測図

出土遺物（Fig.76・78）：本住居址では、上から床面までむらなく遺物が出土した。出土遺物としては、土師器・石器・鉄滓などがある。

１～６は甕で、３が二重口縁をなすほかは球状の胴部をもち屈曲して開き口縁部となるもので、１の胴部外面はハケ目調整、２・４～６の胴部外面は叩きが

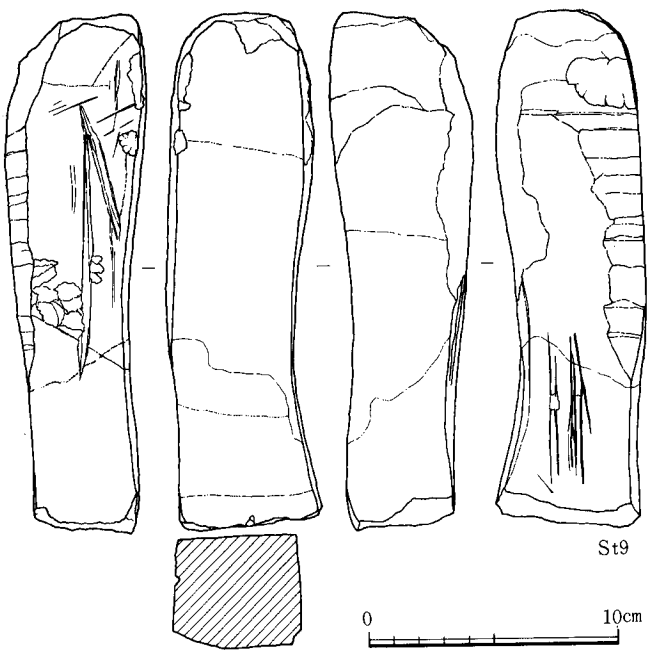


Fig.78　第44号竪穴式住居址石器実測図

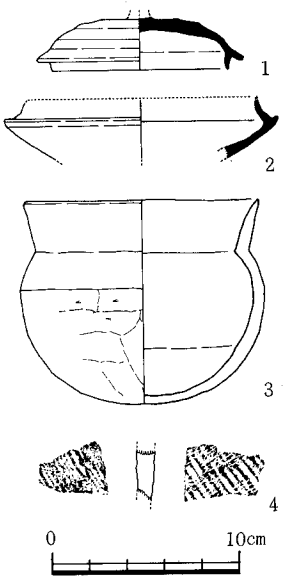


Fig.79　第45号竪穴式住居址出土土器実測図

施され、屈曲部下の内面はヘラケズリが施されている。1～3の口縁は15.6cm、17cm、18.8cmである。7・8は高坏で、8の脚部には焼成前の穿孔がある。8の口径は13cm、器高9.1cm。St 9は断面方形の仕上げ砥石で、4面を使用している。

SC－45（Fig.79）

本住居址は調査区の西南部に位置し、SC－48を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北辺に竈をもち、南側は調査区外へ延びている。35cm前後の遺存で、床面はほぼ平坦で、竈は角礫を灰色粘土でくるみ造られていると考えられるが破壊されている。

出土遺物（Fig.79）：本住居址からは、須恵器の坏、土師器の壺・甕、石製品が出土した。

1は天井部につまみをもつ有返しの坏蓋で、受け部径11cm。2は受け部をもつ坏身で、受け部径(14.6cm)。3は小形丸底壺、4は胴部外面に叩きをもち、内面に当て具痕が残る土師器の甕である。3は前時期のもの。以上のほか石錘・磨石などが出土している。

SC－48（Fig.80）

本住居址は調査区のほぼ中央部に位置し、SD－59を切り、SC－45・57・58などに切られている。長軸5.5m、短軸4.2m前後の隅丸長方形を呈し、30cm前後遺存している。主柱穴は2本で、ほぼ平坦な床面をもち、壁はやや開き気味に立ち上がっている。遺物は検出面から床面までむらなく出土した。

出土土器（Fig.81～83）：本住居址からは、甕・壺・坏・高坏・脚台付鉢などが出土した。

1～34は、球状をなす胴部から屈曲して開き口縁部となる甕である。25のみは口径11cmの小形の甕で、異なる器形である。口径は17が14cmと小さく、3・4が18cmと大きい。16cm前後のものが多い。16の口縁部には赤色顔料(朱)が塗布されていた。

35～43は壺で、35・36は二重口縁壺、37～41は小形丸底壺、42・43は直口壺である。35は、球状をなす胴部外面にはコの字突帯下に櫛描き波状文、その下に斜めハケ目調整、横ハケ目調整、縦ハケ目調整が施され、肩部に暗文がある。口縁部外面は端部下と屈曲部に浮文があり、屈曲部の浮文下には櫛描き波状文で施文している。内面は胴部下半がヘラケズリ、胴上部は指押え後ナデ調整、口縁部はナデ調整後暗文が施文されている。口径31cm、器高(41cm)。36は甕の可能性もある。37～41は小

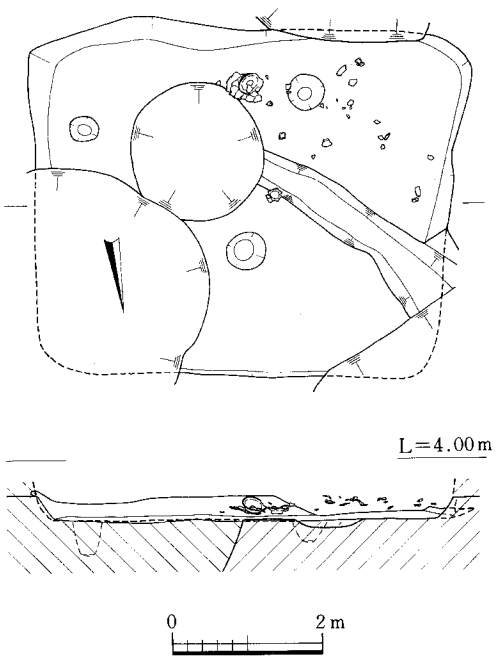


Fig.80　第48号竪穴式住居址（SC—48）実測図

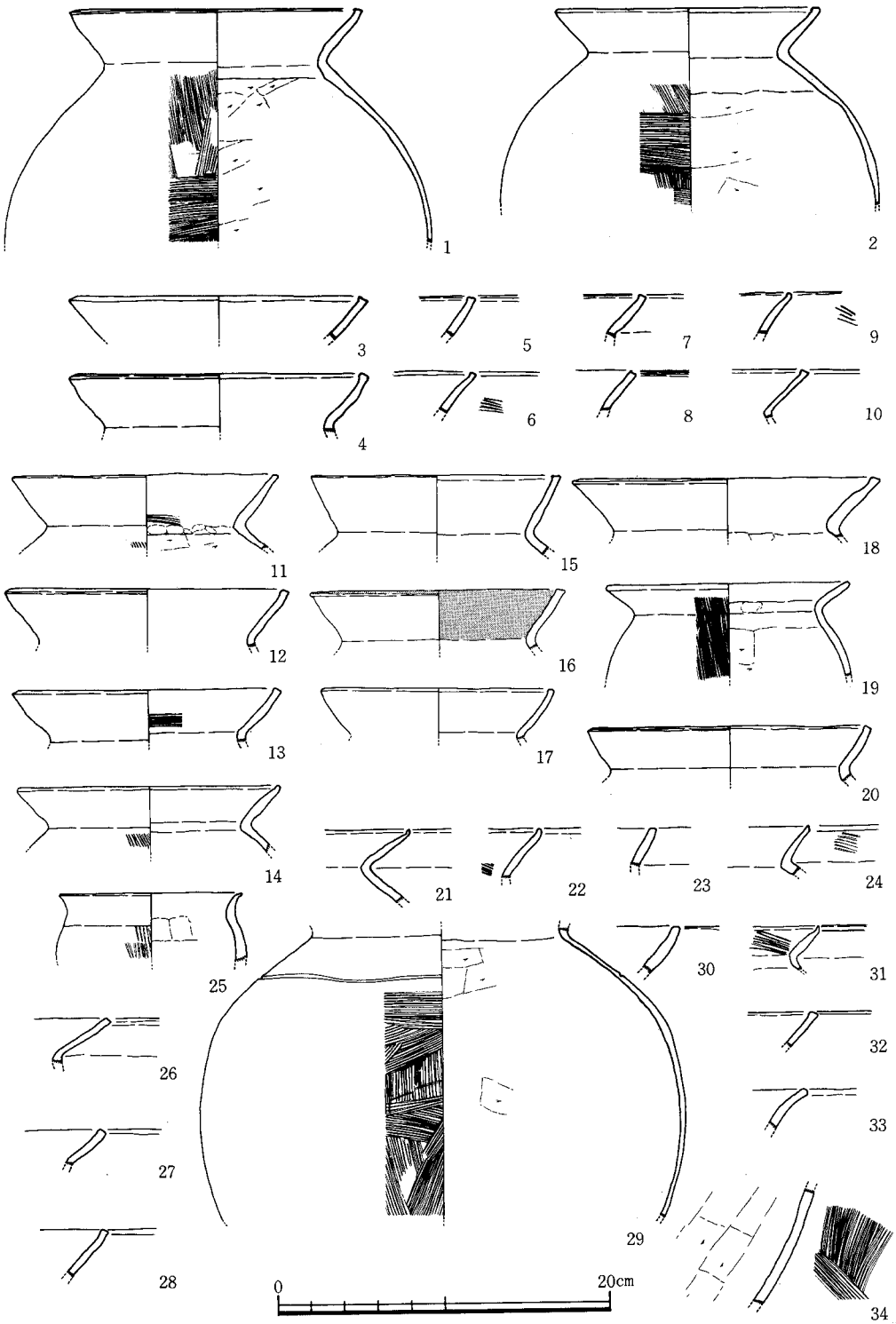


Fig.81　第48号竪穴式住居址出土土器実測図(1)

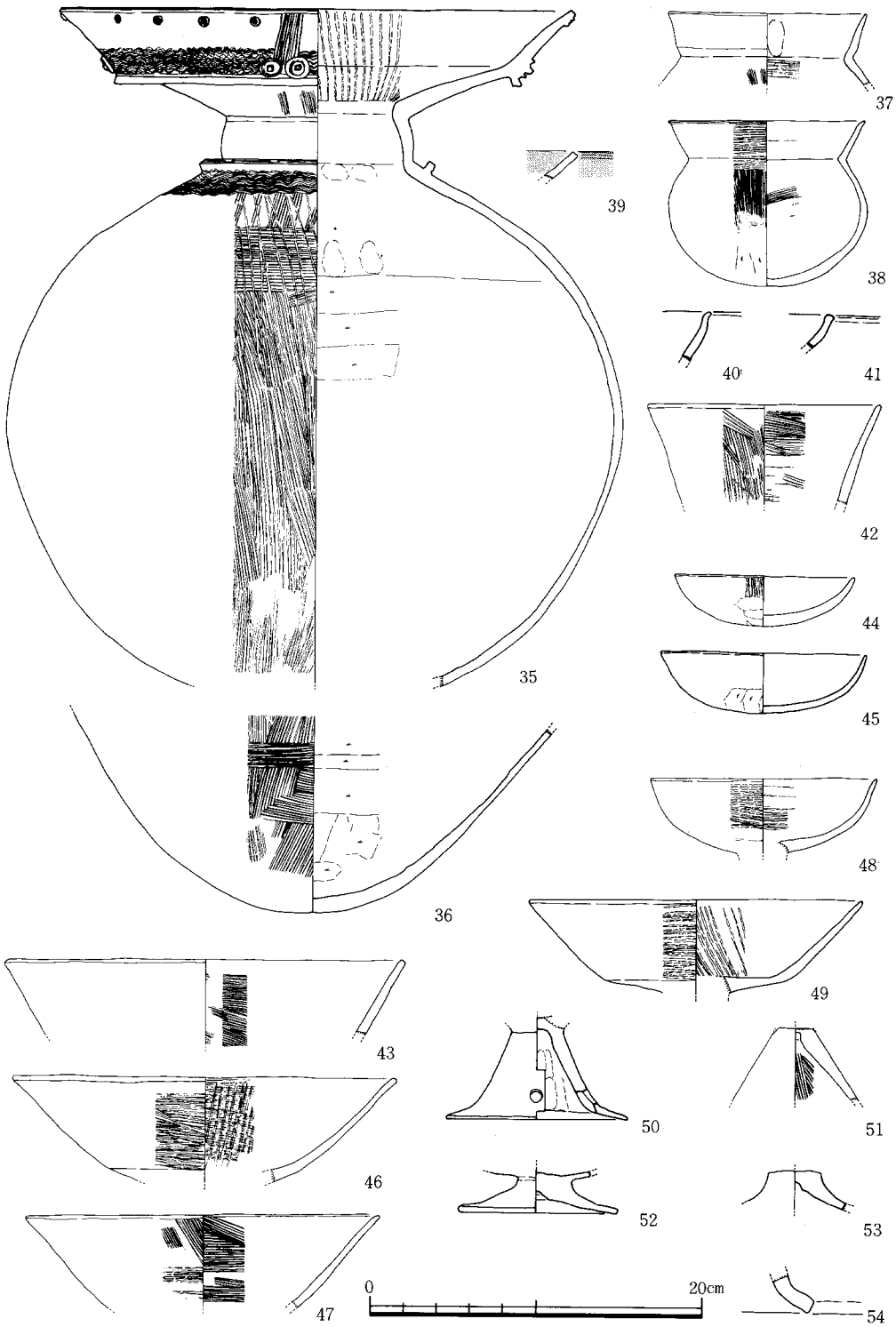


Fig.82　第48号竪穴式住居址出土土器実測図(2)

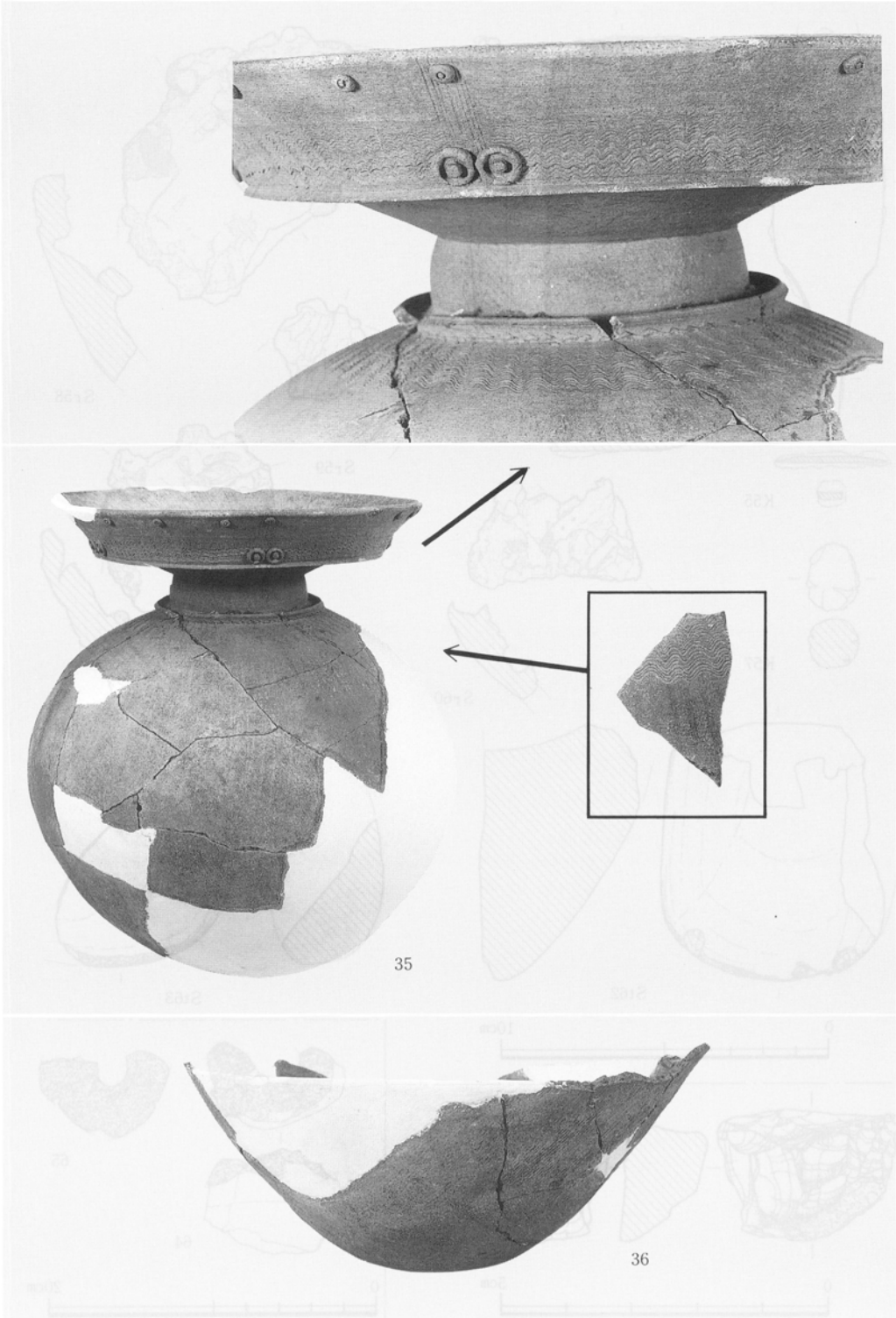


Fig.83　第48号竪穴式住居址出土二重口縁壺

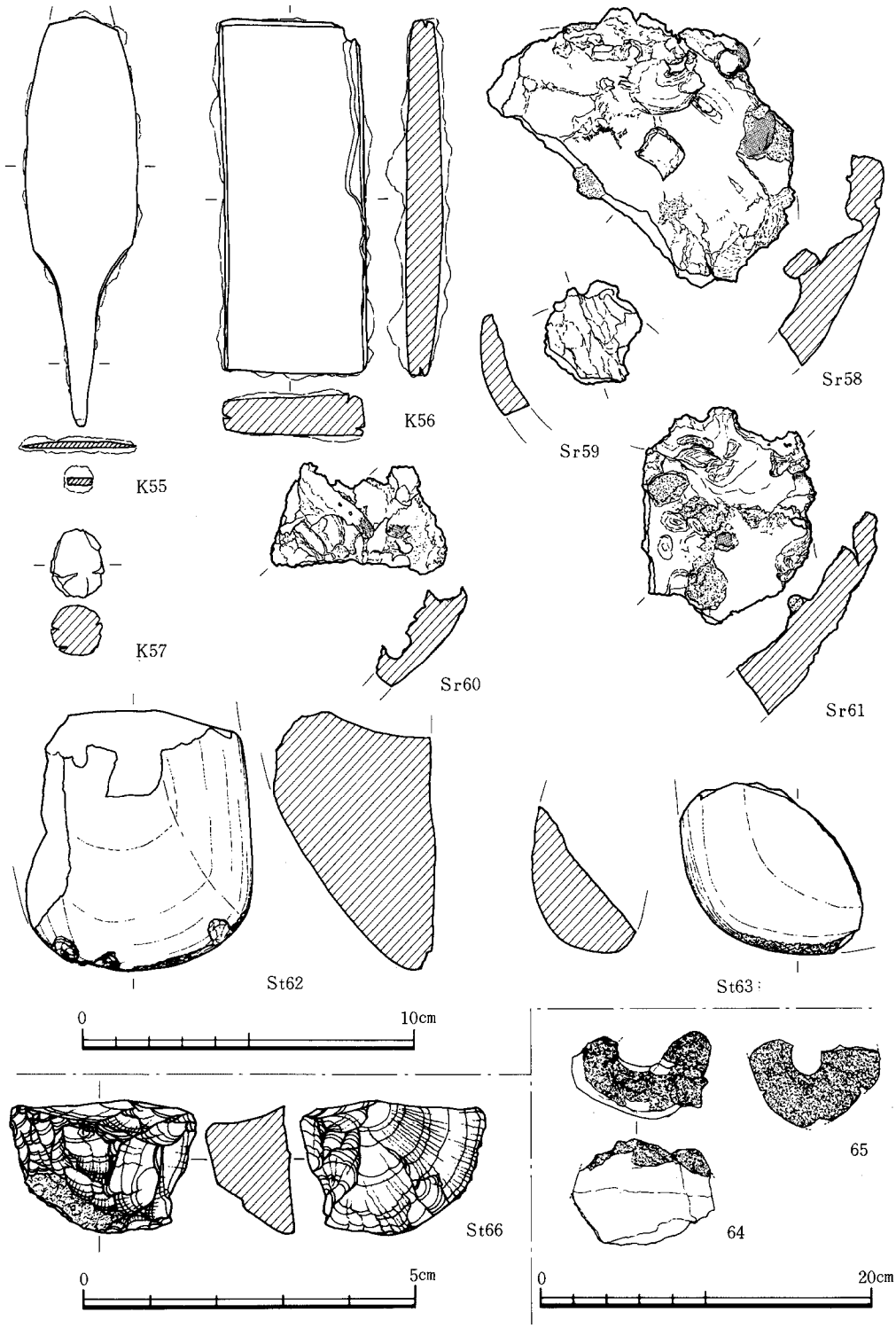


Fig.84　第48号竪穴式住居址出土遺物実測図

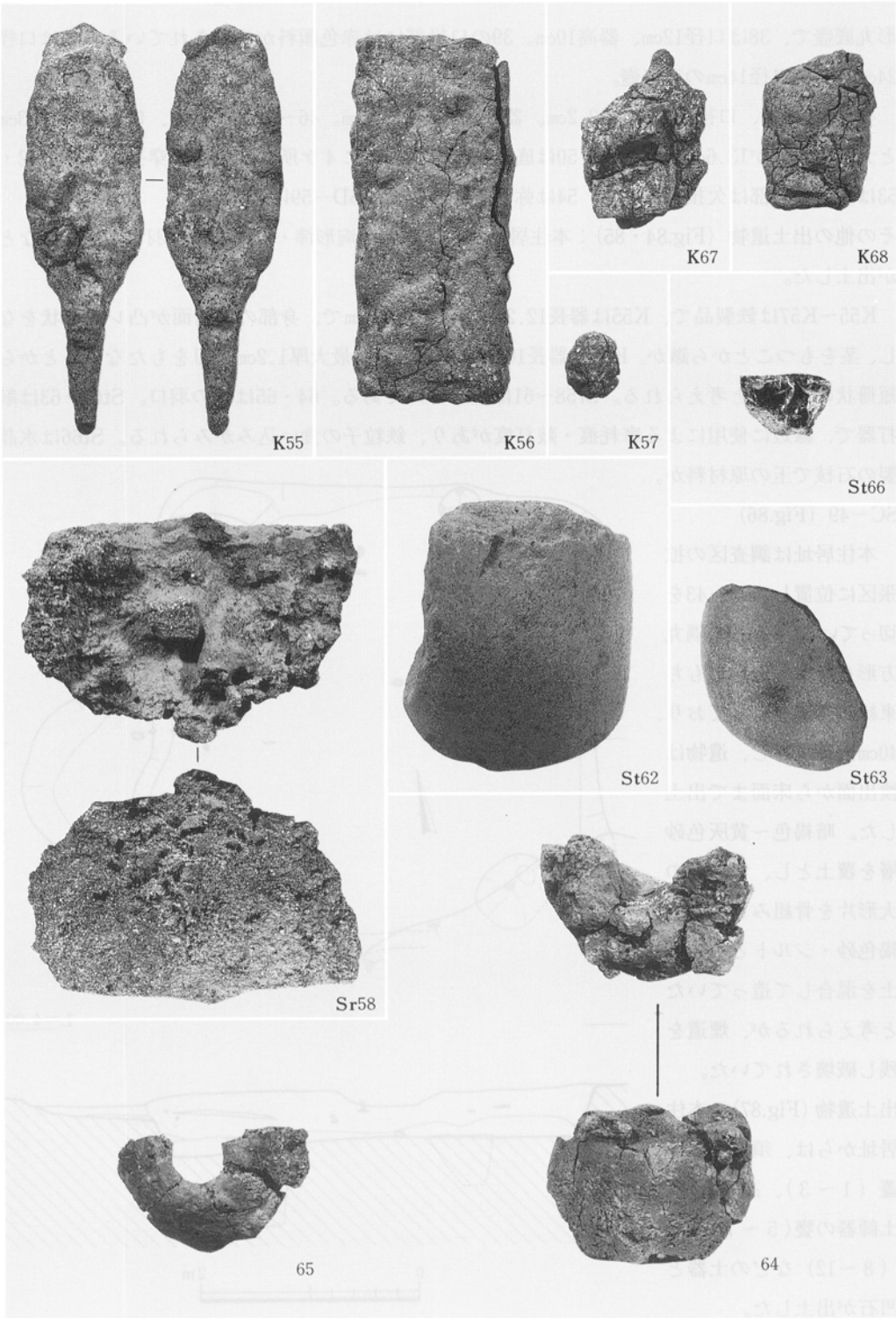


Fig.85　第48号竪穴式住居址出土遺物

形丸底壺で、38は口径12cm、器高10cm。39の口縁部には赤色顔料が塗布されている。43は口径24cm、42は口径14cmの直口壺。

44・45は坏で、口径は11cm、12.2cm。器高は3cm、3.7cm。46～51は高坏で、口径は46が23cmと大きく、48が13.6cmと小さい。50は底径11cmで、裾部に4ケ所の焼成前の穿孔がある。52・53は脚台で坏部は欠損している。54は弥生時代の器台でSD－59に伴うか。

その他の出土遺物（Fig.84・85）：本住居址からは鉄器・埦形滓・石器・鞴の羽口・玉素材などが出土した。

K55～K57は鉄製品で、K55は器長12.2cm、最大幅3.3cmで、身部の横断面が凸レンズ状をなし、茎をもつことから鏃か。K56は器長10.6cm、幅4.2cm、最大厚1.2cmで刃をもたないことから短冊状の鉄素材と考えられる。Sr58～61は埦形滓片である。64・65は鞴の羽口。St62・63は敲打器で、縁辺に使用による摩耗痕・敲打痕があり、鉄粒子の食い込みがみられる。St66は水晶製の石核で玉の原材料か。

SC－49（Fig.86）

本住居址は調査区の拡張区に位置し、SC－43を切っている。4m強の隅丸方形をなす平面形をもち東縁辺に竈をもっており、40cm前後遺存し、遺物は検出面から床面まで出土した。暗褐色～黄灰色砂層を覆土とし、竈は甑の大形片を骨組みとして、褐色砂・シルトと灰色粘土を混合して造っていたと考えられるが、煙道を残し破壊されていた。

出土遺物（Fig.87）：本住居址からは、須恵器の坏蓋（1～3）、高坏（4）、土師器の甕（5～7）、甑（8～12）などの土器と凹石が出土した。

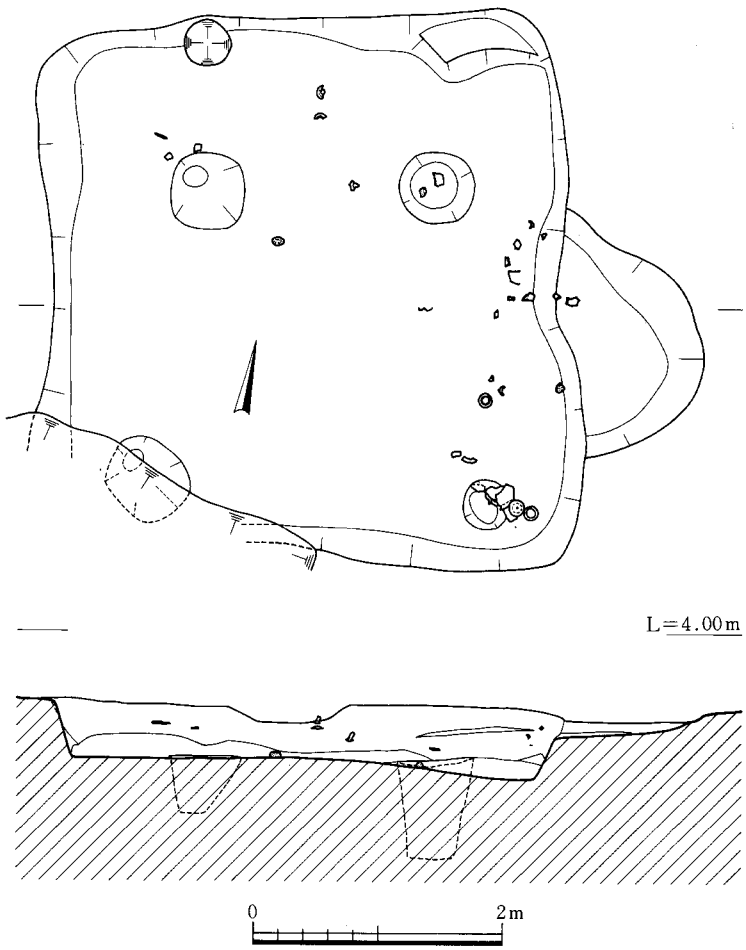


Fig.86　第49号竪穴式住居址（SC—49）実測図

Fig.87　第49号竪穴式住居址出土土器実測図

１～３は有返しで、１の天井部にはつまみがあり、２・３の天井部にはヘラ記号がある。受け部径は１・２が11cm、３が11.5～12cm。４の脚部にもヘラ記号がある。５～７は甕で、口径は５が35cm、７が16cm。７の器高は14cm。

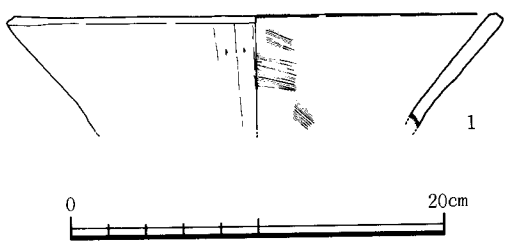


Fig.88　第57号竪穴式住居址出土土器実測図

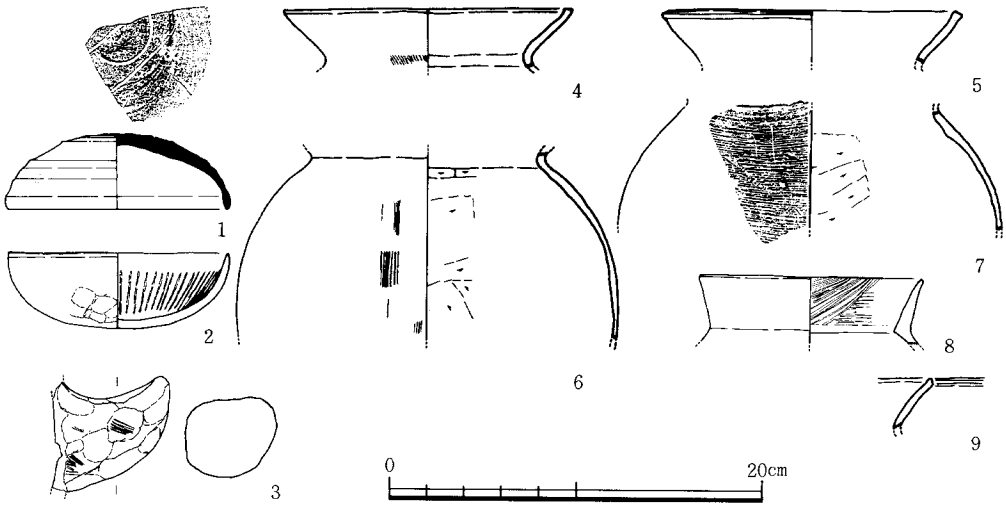


Fig.89　第54号竪穴式住居址出土土器実測図

8～12は竈の骨組みに使用されていた甑である。

SC－54（Fig.89）

本住居址は調査区の西北部に位置し、SC－56を切り、SK－34･39に切られている。平面形は隅丸方形を呈しているが、北西部は調査区外へ延び、東側は後世の遺構に切られているため規模はわからない。20cm前後遺存している。

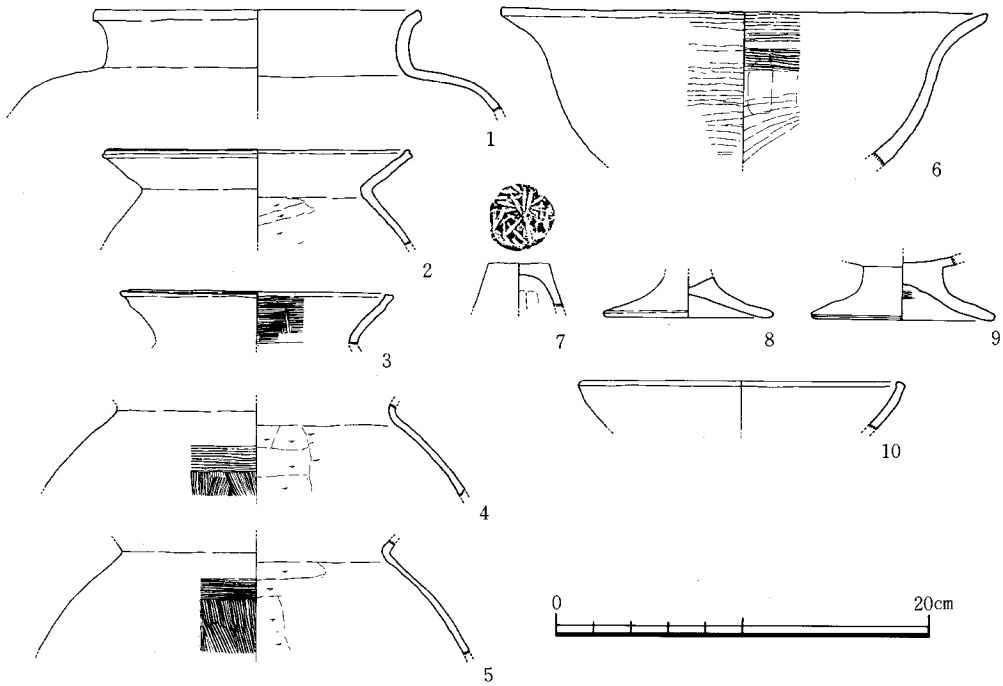


Fig.90　第58号竪穴式住居址出土土器実測図

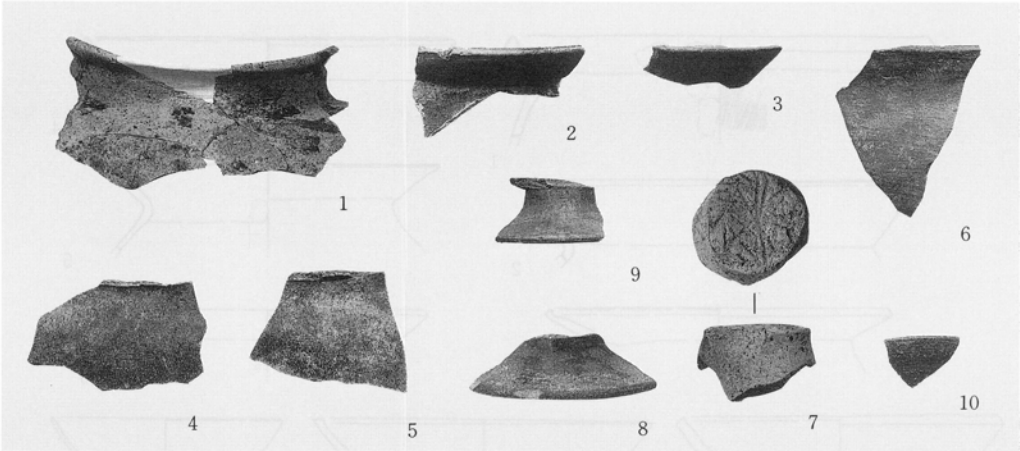


Fig.91　第58号竪穴式住居址出土土器

出土遺物：本住居址からは、須恵器の坏蓋（1）、土師器の坏（2）、甕（3～9）が出土した。

1は口径12cm、器高4cmで天井部にヘラ記号がある。2は口径10.6cm、器高4cmで、口縁部は横ナデ調整、内面はヘラミガキ、外面は指押え後ナデ調整で仕上げている。3は甕の把手。4～7・9の甕、8の小形丸底壺は前時期のもので混入品で、SC－56のものか。

SC－57（Fig.88）

本住居址は調査区の西側に位置し、SC－48を切り、SC－45・52に切られている。2.8×2.6＋αmの隅丸長方形を呈し、20cm前後遺存している。

出土遺物（Fig.88）：少量の土器と砥石1点がある。1は壺の口縁部で口径は27cmを測る。

SC－58

本住居址は調査区の中央部に位置し、SC－48、SD－59を切り、後世の遺構に切られている。一辺5m前後の隅丸方形を呈し、東辺の中央部に竈をもち、30cm前後遺存している。黄灰色～褐灰色砂・シルト・粘土を混合し、竈を造ったと考えられるが、破壊されている。主柱穴は4本で、床面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がっている。

出土遺物（Fig.90・91）：本住居址からは、比較的まとまった土器が出土した。しかし、本住居址は竈をもち4本柱であること、SC－48を切っていることから、出土遺物はSC－48のものが大半を占めている。

1～5・10は甕で、1は韓式土器と考えられるが器面は荒れている。口径17.6cm。他の口径は3が14.6cm、2が18.4cm。6は口径26cmの鉢で、器面にはヘラミガキが施されている。7は高坏、8・9は脚台である。

2）第6面検出時出土遺物（Fig.92～94）

第6面遺構検出時に、土師器の甕・壺・坏・高坏・甑・移動式竈、須恵器の蓋類・坏・高坏・甕、鞴羽口、鉄滓、土錘、砥石、磨石、敲石などが出土した。第3～5面で出土したものであ

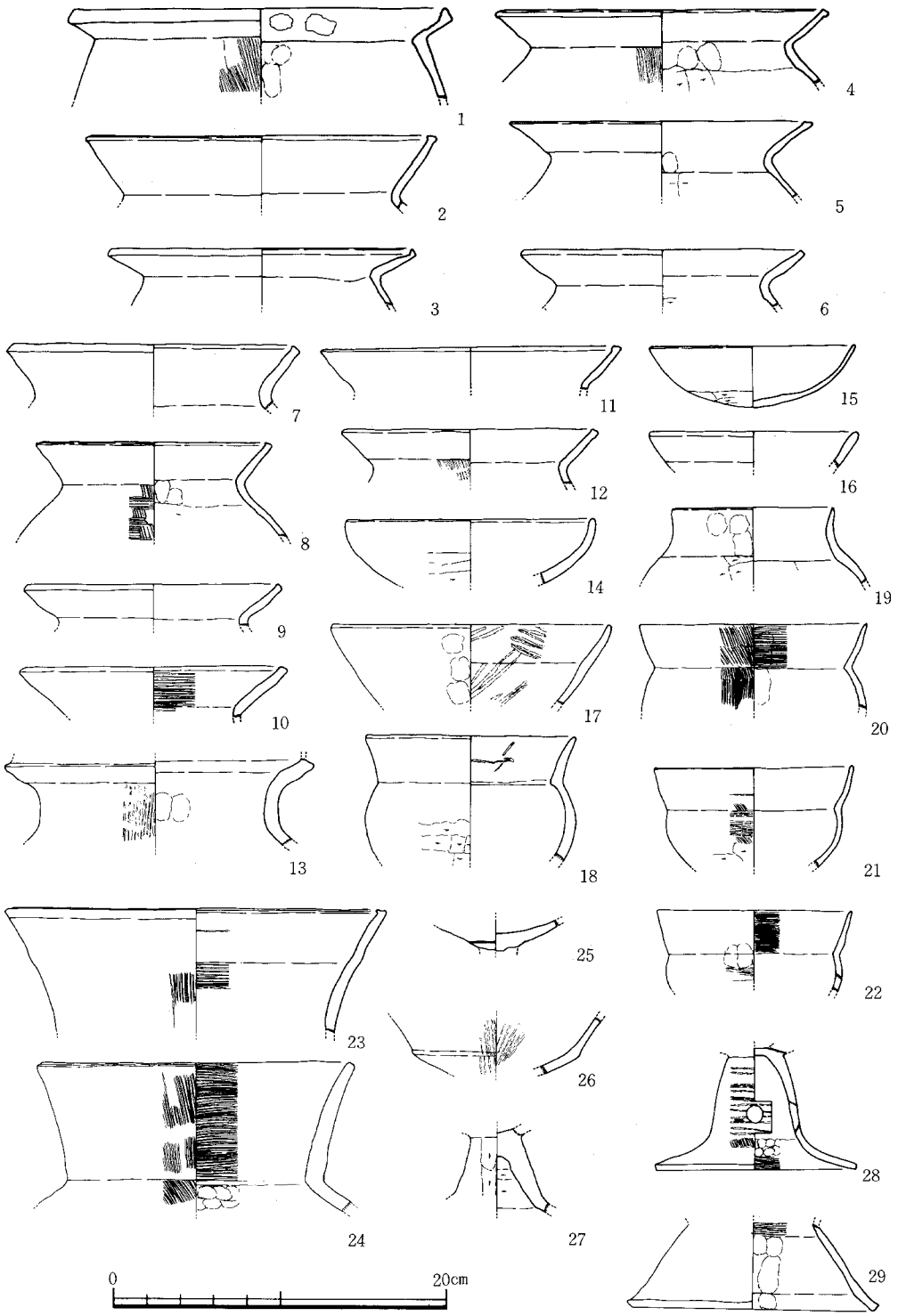


Fig.92　第 6 面出土土器実測図(1)

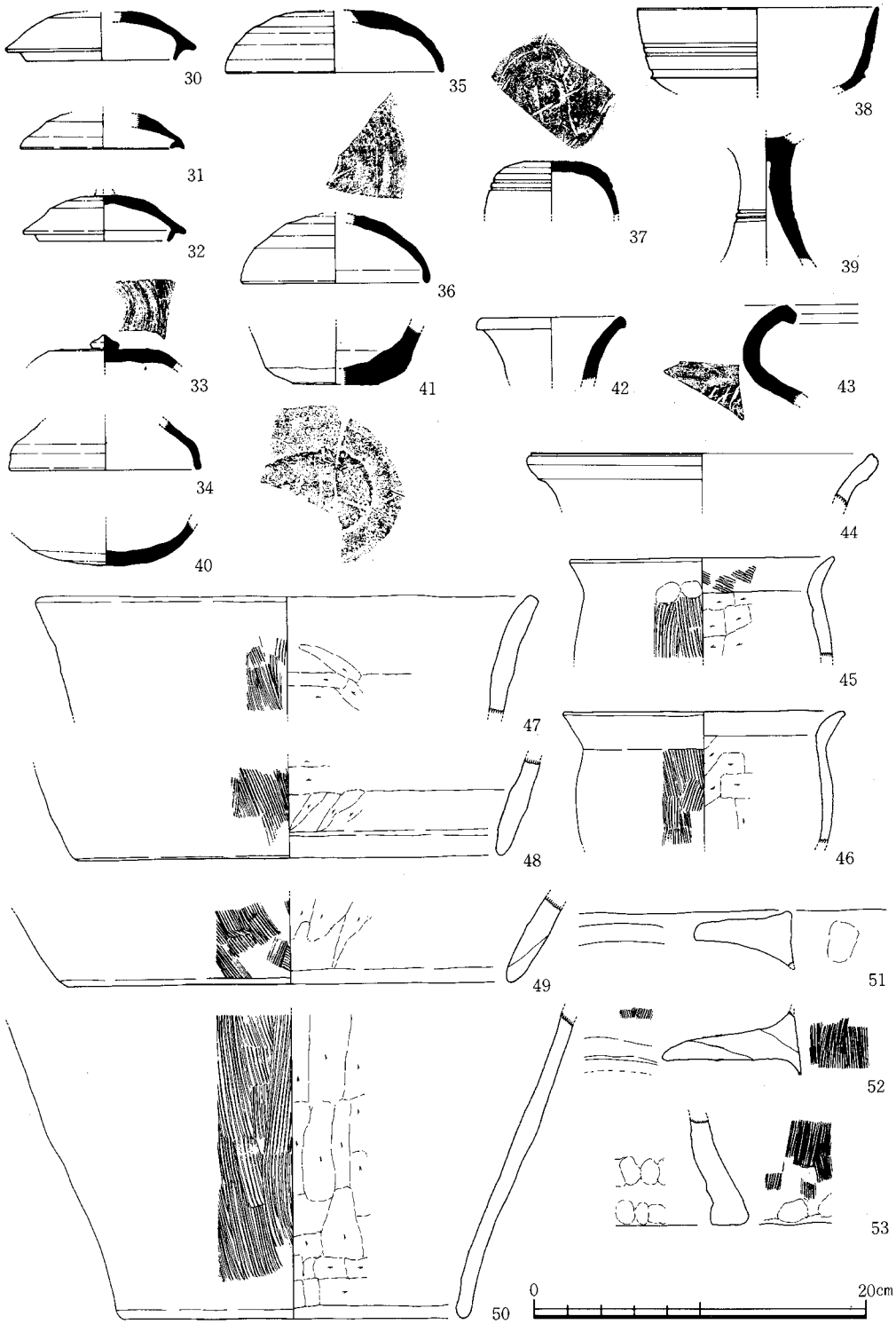


Fig.93　第6面出土土器実測図(2)

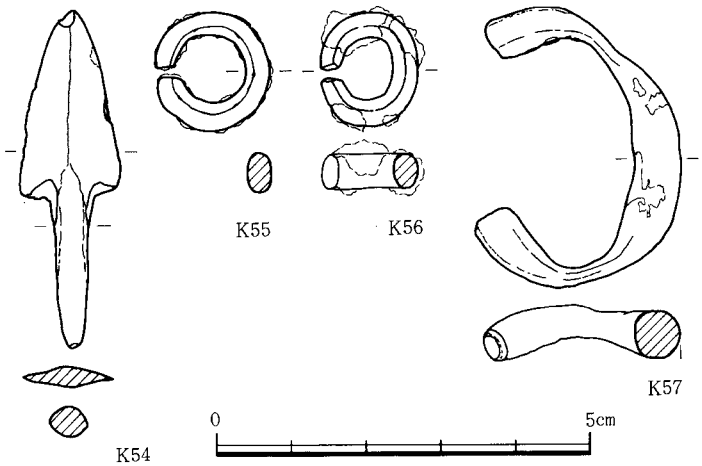


Fig.94　出土金属器実測図

るが、古墳時代のものと考えられる銅鏃、耳環、ガラス玉などがある。

1～13までは甕で、13が二重口縁をなし、他はSC－41・48出土の甕と同形態をもっている。1の口縁部内面に鼠の齧り痕がみられる。口径は1が23cmともっとも大きく、8が14cmと小さい。14～16は坏で、15は口径12.4cm、器高3.6cm。17～24は壺で、19・23・24は直口壺で、19は口径9.5cm、23は口径23cm。17・18・20～22は小形丸底壺で、17・21・22は屈曲部括れが小さい。口径は17が17cm、22が11.6cm。25～28は高坏で、28の脚部には2ケ所の焼成後の穿孔がある。29は脚台か。以上の1～29は古式土師器で、28を除くと布留式土器の古段階のものといえよう。

30～37は須恵器の蓋類で、30～33は有返しの坏蓋、34～36は坏蓋、37は壺蓋。33・36・37の天井部にはヘラ記号がある。38・39は高坏、42は横瓶か提瓶、43～46は甕で、43が須恵器、他は土師器。47～50は土師器の甑、51～53は移動式竈片である。30～53の須恵器、土師器は6世紀末から7世紀のものである。

K54は器長4.5cmの銅鏃、K55～57は耳環で、K55・56は金滅金が施されている。

3）第6面出土他時代遺物（Fig.95）

58・59はSC－48出土で60とともに甕である。61は壺である。St62・63は蛤刃石斧の刃部である。St62・63は弥生時代初頭以前のもので58・60・61は弥生土器である。59はSC－58のものか。

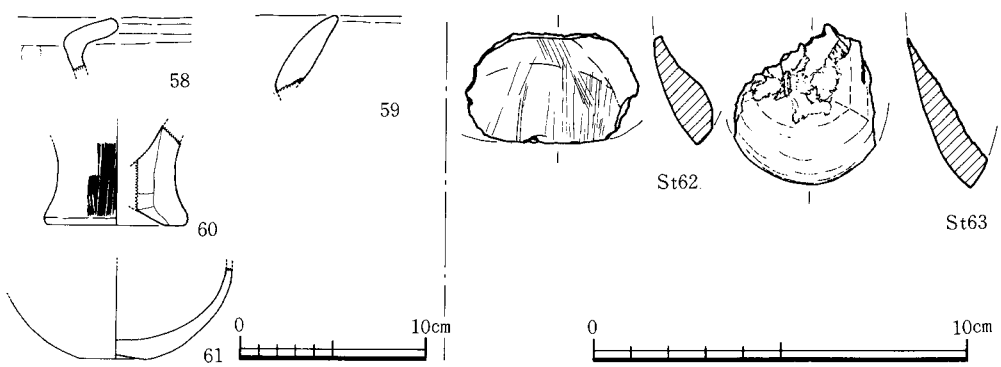


Fig.95　第6面出土他時代遺物実測図

第４章　自然科学的分析

博多第59次調査ピット0018出土の無釉壺内に付着した緑色ガラスの化学分析

名古屋大学名誉教授　山崎　一雄
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原調査部　肥塚　隆保

１．形状　福岡市教育委員会より分析依頼を受けた無釉の壺は実測図のような形状をもち、破片が接合されている。外面は灰黒色で胴部から底部へかけて一部が黄白色の一見釉のような物質で被われ、その下から緑色の物質がうかがわれる箇所もある。

壺の内面も外面と同様に灰黒色で、胴から底へかけて緑色のガラス状のもので被われ、あたかも壺が横倒しになった時に液体が溜ったかのような状況を呈している。緑色ガラス層の厚さは胴の上部で約１㎜、底に近い厚いところでは５㎜に達する。ガラスの表面は壺の外面と同様に黄白色を呈している。

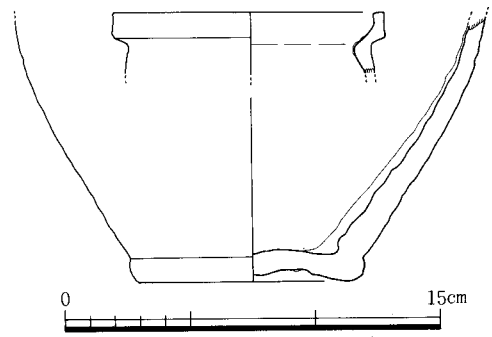


Fig.96　0018柱穴出土遺物実測図

２．蛍光X線分析とX線回折　壺から遊離した緑色ガラスの小塊について、表面の黄白色の層を除去し、新鮮な表面を露出させた上で、蛍光X線分析を行ったところ、多量の鉛と珪素、銅などが検出された。すなわちこのガラスは銅で着色された鉛ガラスである。

次にガラス表面の黄白色の物質についてX線回折法により物質の同定を行った結果、塩化{トリス（燐酸）}五鉛、$Pb_5C\ell(PO_4)_3$と判明した。蛍光X線分析およびX線回折法の実験条件などはここでは省略する。またこの黄白色の物質については蛍光X線分析法によっても燐が検出されている。壺外面の黄白色と緑色は内面と同じものである。

この壺自身の灰黒色の胎土について、X線回折を行ったところ、石英とムライト（$2SiO_2 \cdot 3A\ell_2O_3$）の存在が認められた。さらに胎土中にやや多量に含有されている白色粒子は同じくX線回折法により石英の結晶であると判定されたが、この石英はクリストバライトには変化していない。

３．ガラスの化学分析　２で説明したように緑色ガラスは鉛を多量に含有するが、蛍光X線分析法は半定量的であるため、このガラスの微量をとり、定量化学分析を行った。結果は次の通りである。

注(1)　"Phase diagrams for ceramists"　g.Am. Ceram. Soc., Nov. 1947, Part II, p.30、図43。

二酸化珪素（SiO_2）	30.5 %
酸化アルミニウム（$A\ell_2O_3$）	0.39
一酸化鉛（PbO）	59.9
酸化銅（CuO）	0.38
酸化ナトリウム（Na_2O）	0.14
酸化カリウム（K_2O）	8.37
合　計	99.77%

これらの成分のほかに蛍光X線分析により、微量のチタン、鉄、カルシウム、マグネシウム、錫などの存在が認められたが、それらの定量は行わなかった。

4．考察　　このガラスの組成は3の分析結果から計算すると　PbO：SiO_2＝1：2　の分子比に近い。　PbO－SiO_2　の二成分系のガラスは詳しく研究されており[1]、その状態図と対照すれば　PbO・2 SiO_2の組成のガラスの融解点は約750℃である。実際の緑色ガラスは前記分析値が示すようにカリウム、アルミニウム、銅などを含んでいるから、その融解温度はこれより低いと考えられる。しかし、その程度は不明であるから一応750℃と仮定する。

他方、壺自体は胎土中にムライトが生成しているから、その生成しはじめる温度約1000℃よりも高く加熱されている。しかし、胎土中の石英粒子がクリストバライトに変化していないから、後者の生成温度1200℃までは加熱されていない。すなわちこの壺は二つの温度の中間、1000～1200℃で焼成されたものと推定される。

この壺の中に、別に製造された緑色の鉛ガラス（融解温度約750℃）を入れ、加熱、再融解し、流し出した時、壺が破砕したのであろう[2]。壺の破片の断面にガラスが付着していることは、破砕がガラスを流し出す途中で起ったことを示している。

破砕されたのち、この壺の破片は地中に埋設している間に、侵触を受け、表面が塩化｛トリス（燐酸）｝五鉛に変化したと考えられる。従来の研究によれば[3]、鉛ガラスの表面が地中で燐の化合物に変化するのは動物、人間の遺体、排泄物などと接触していた場合であるから、この壺が埋設していた環境もそのような状況であったと考えられる。

博多第4次調査の図版編が「博多II－図版編」福岡市埋蔵文化財調査報告第84集として1982年3月末に刊行されたが、その中にFig.77として無釉盤口水注の図が掲載されている。この調査報告書の本文編は未刊のままであるが、この水注を調査した森本朝子氏によれば[4]、〝暗褐色の胎土には白い砂が多く混じり、露胎は鉄銹色で、坩堝に用いたか内面に銀化した空色のガラスが付着し、器体は焼けて紫灰色となりガサガサしている〟とのことである。この記載も、実測図も今回の無釉壺に類似している。これ以外にも類似品の発掘例があるとのことであり、それらの器のみならずガラスの調査を将来行うことができれば、両者の産地についての知見が得られるものと期待される。

注(2)　この壺の中でガラスの材料を融解し、るつぼとして使用したとは考え難い、そのためにはさらに高い耐火度の容器が必要であろう。
注(3)　山崎一雄、斉藤喜彦、「X線回折による腐触された古代ガラスの研究」、Proc. Japan Acad., 36、503（1960）（英文）
注(4)　森本朝子氏の御教示に対して謝意を表する。

土器表面に見られる砂礫

奥田　尚

１）はじめに

博多遺跡から出土した古墳時代初頭の甕、壺等の土器に含まれる砂礫の観察をした。観察資料は完形品もあるが、殆どは口縁部の破片のみである。最初に裸眼で土器片全体に見られる砂礫を観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分を観察した。

観察は石種・鉱物種・生物片の形、大きさ、量について行った。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩・泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、変輝緑岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石、磁鉄鉱、生物片として海綿の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物等があげられる、また、火山岩起源と深成岩起源とを区別するために、鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に、石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については、角、亜角、亜円、円の４段階に区分した。粒径についてはmm単位で目測した。量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの６段階とした。

岩石片の同定については、鉱物構成で名称が変わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英・長石、石英・長石・黒雲母、長石・黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃緑岩、輝石や橄欖石が噛み合っていれば斑糲岩とした。また、自形の石英がみられれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石が見られれば安山岩とした。片理があれば、片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

２）砂礫の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、安山岩、泥岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。それぞれの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、灰色、粒形が角、亜角、粒径が最大５mmである。石英と長石が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大１mmである。長石と角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は白色、灰白色、灰色、暗灰色、茶色、赤色とさまざまで、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大２mmである。石英や黒雲母の斑晶がみられるものもあり、石基はガラス質である。

安山岩：色は灰色、粒形が角、粒径が最大0.5mmである。ガラス質で輝石の斑晶がみられる。

泥岩：色は灰色、粒形が亜円、粒径が最大0.2mmである。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7㎜である。貝殻状、フジツボ状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大５㎜である。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。

長石：無色透明、灰色透明、灰白色で、粒形が角、粒径が最大４㎜である。短柱状で自形をなすものもある。

黒雲母：黒色、金色の金属光沢があり、粒径が最大１㎜である。板状、粒状をなす。

角閃石：黒色、粒形が角、粒径が最大１㎜である。粒状、柱状をなす。柱状で自形をなすもの、あるいは一部に結晶面がみられるものがある。

輝石：青銅色透明、褐色透明、黒色透明で、粒形が角、粒径が最大0.2㎜である。柱状で自形をなすものが多い。

３）砂礫種構成

観察した砂礫種構成は、花崗岩と他形の石英・長石からなる花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループと流紋岩質岩と自形の石英からなる流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループがある。これらの砂礫種構成と他の砂礫種を組み合わせて、類型区分をした。砂礫が少量の場合、細粒の場合、表面に付着物が多く観察が不良の場合は類型区分不能とした。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる ……Ⅰa類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅰb類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅰbd類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅰd類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅰde類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅰe類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花閃岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅳae類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅳb類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される

表．１　土器表面に見られる砂礫種（１）

（※印は、胎土分析資料番号）

資料番号			岩石																鉱物										焼土域	類型	挿図
遺構名	No.	器種	花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石				
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
SC-41	1	甕 布留傾向	L-稀 角																M-稀	L-非 E僅	L-稀	L-微							無	Id	Fig.64
	2	甕 布留傾向					L-僅 角	L-微 亜角											M-僅	L-非 E多		M-僅		M-稀 板		S稀 E非			無	Ⅳe	
	3	甕 布留傾向	L-稀 角	L-稀 角															M-僅	M-多 E僅		M-僅				S稀 E非			無	Ⅰbd	
	4	甕 布留傾向					M-微 亜角	L-僅 角											M-僅	L-多 E中		L-僅 E僅						L-微 E非	無	Ⅳe	
	5	甕 布留傾向					M-稀 角	L-微 角											M-微	L-非 E多		L-僅		M稀 板		S稀 E非			無	Ⅳe	
	6	甕 布留傾向						L-微 角											L-微	L-多 E中		L-中 E多						S稀 E非	無	Ⅳe	
	7	甕 布留傾向		M稀 角															M-稀	M-多 E微		M-僅		S稀 板		S稀			無	Ⅰb	
	8	甕 布留傾向						L僅 亜角											M-僅	M-多 E中	M-僅	M-中 E多				S微 粒		M-微 E非	無	Ⅳe	
	9	甕 布留傾向						L-微 角		L-稀 角										L-多 E僅		L-中				S稀		M微 E非	無	Ⅳe	
	10	甕 布留傾向					M-微 角	M-僅 角											L-僅 E多	M-非 E多	M-微	M-僅		S稀 板				S稀 E非	無	Ⅳe	
	11	甕 布留傾向					L-稀 亜角	L-僅 角											M-中	L-多 E多		M-中		M稀 板		S稀 E非			無	Ⅳe	
	12	甕 布留傾向		L-稀 角																L-中	M-稀	L-僅		S稀 板		S微			無	Ⅰb	
	13	甕 布留傾向						L-僅 亜角											M-僅	L-多 E多		L-中 E僅		S稀 板		M-稀 E非			無	Ⅳe	
	14	甕 布留傾向						M-中 角		M稀 角										L-中 E僅		M微				S稀 E稀			無	Ⅳe	
	15	甕 布留傾向		L-微 角																L-多 E僅		M-僅		S稀 板		S稀			無	Ⅰbd	
	16	甕 布留傾向		L-微 角															L-僅	L-多 E微		M-中				M-微			無	Ⅰbd	
	17	甕 布留傾向						L-僅 角											M-僅	L-多 E中	M-微	M-中	M-稀 板	S稀 板				S稀 E非	無	Ⅳe	
	18	甕 布留傾向						L-僅 角												L-多 E中		M中 E僅				L-稀 E稀			無	Ⅳe	
	22	甕 山陰系	L-僅 角	L-微 角															M-中	L-多 E微	M-僅	M-僅		M-微 板		S稀			無	Ⅰb	Fig.68
	23	甕 山陰系	L-僅 角	L-僅 角															M-僅	L-中 E稀		M-微		S微 板		S稀			無	Ⅰbd	
	24	壺 小形丸底																	L稀	S稀		S稀							有 稀	砂礫少量 区分不能	
	25	壺？		L-微 角															L-中	L-多 E稀	M-僅	L-僅				S稀			無	Ⅰbd	
	27	壺 直口		L-微 角															L-微	L-中	L-微	L-僅							無	Ⅰa	
	28	壺 小形丸底																		S微		S微							無	砂礫少量 区分不能	
	29	壺 小形丸底																		S微		S稀		S稀 板					無	砂礫少量 区分不能	
	32	壺 小形丸底																		S稀		S稀							無	砂礫少量 区分不能	
	33	壺 小形丸底	L稀 角																M-稀	S僅		S微							無	砂礫少量 区分不能	
	※9	壺 小形丸底																		L-僅									無	砂礫少量 区分不能	
	※31	甕 布留傾向					L稀 亜角	L-微 亜角											L-僅	M-多 E中	M-微	M-中 E中		M稀 板				S稀 E非	無	Ⅳe	

表．1　土器表面に見られる砂礫種（2）

（※印は、胎土分析番号）

資料番号		器種	岩石																鉱物										焼土塊	類型	挿図
遺構名	No.		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石				
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
S C I 48	1	甕 布留傾向		L-微角															L-微	L-多	L-微	L-中		S稀板		S稀			無	Ib	Fig.81
	2	甕 布留傾向		L-微角															M-僅	L-多	M-微	L-微				S稀			無	Ib	
	3	甕 布留傾向			L稀角		M僅亜角													M-多 E中		M-僅						S稀 E非	無	Ⅳbe	
	4	甕 布留傾向		L中角															L-僅	L-中 E稀	M-僅	L-僅				M-稀 E?僅			無	Ide	
	5	甕 布留傾向					L-微角													M-僅		M微				M-微			無	Ibd	
	6	甕					L-僅亜角													M-多 E中		M-僅		M僅板	M-僅	S稀			無	Ⅳb	
	7	甕 布留傾向		L-稀角			M稀亜角													L-多 E微		L-微						M稀 E非	無	Ide	
	8	甕 布留傾向					M僅角												M-稀	M-多 E中		M-僅							無	Ⅳd	
	9	甕 布留傾向		L-僅角																M-多 E僅		M-僅	M-稀板	M-稀板		M-稀			無	Ibd	
	10	甕 布留傾向					L-微角													L-多 E多		M-中 E多		L-稀板				S微 E非	無	Ⅳe	
	11	甕 布留傾向					L-僅角												M-僅	M-多 E多	M-稀	M-中		M-稀板					無	Ⅳd	
	12	甕 布留傾向		L-稀角			L稀亜円												L-僅	L-多 E微		M-僅		S稀粒		S稀			無	Ibd	
	13	甕 布留傾向					L-僅亜角													L-多 E中		L-中 E多						S稀 E非	無	Ⅳe	
	14	甕					L-稀角													M-多		M-僅						S稀 E非	無	観察不良 区分不能	
	15	甕		L稀角		L稀角													L-僅	L-非 E微		M-稀	S稀板			M-稀			無	Ibd	
	16	甕 布留傾向					M-僅角													L-多 E多		M-僅				S稀 E非			無	Ⅳe	
	17	甕 布留傾向					L-僅角												M-僅	M-多 E中	M-微	M中	M-微板	M稀板				S稀 E非	無	Ⅳe	
	18	甕 布留傾向					L-僅亜角												L-僅	L-多 E多	M-微	L-中 E多						M僅 E非	無	Ⅳe	
	19	甕	M-稀角																M-微	L-多 E多		L-中 E多				M-微		M稀 E非	無	Ⅳae	
	20	甕 布留傾向					L-僅角												M-微	M-多 E中		M-僅		S稀粒		S稀 E非			無	Ⅳe	
	21	甕 庄内？	M-稀亜角	L-僅角																M-中		M微							無	Ia	
	23	甕 布留傾向					M稀角													M多 E僅		M-僅				S稀			無	Ibd	
	24	甕					L-僅角				S稀亜円								L-微	L-僅 E中		M-微						S微	無	砂礫少量 区分不能	
	25	壺？					L-僅亜角													M-僅 E多	M稀							M-僅 E非	無	Ⅳe	
	26	甕 布留																		M-多 E中		M僅		M稀板		M稀 E非			無	観察不良 区分不能	
	27	甕 布留傾向					L-微角												L稀	L-多 E中		M僅			M稀 E非			L-僅 E非	無	Ⅳe	
	28	甕 布留傾向		L-稀角			M稀亜角												L-微	M-多 E微		M-僅		S稀板		S稀			無	Ibd	
	29	甕		L-微角			L-稀亜角												L-微	L-多 E僅		L-微				S稀			無	Ibd	
	30	甕 布留				M-中角	L-僅角												M-微	L-多 E中		M僅							無	Ⅳd	

表．１　土器表面に見られる砂礫種（３）

（※印は、胎土分析番号）

資料番号		器種	岩石																鉱物										焼土塊	類型	挿図
遺構名	No.		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石				
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			
S C I 48	31	甕 布留傾向		L-僅 角				M稀 亜角											M-微	L-多 E微		M-中		S稀 板		S稀			無	Ⅰbd	
	32	甕 布留傾向		L-微 角																L-多 E僅		L-中		S稀 板		L-微 EF稀			無	Ⅰde	
	33	甕 布留傾向						L-稀 亜角											M-微	L-多 E微		L-僅		M中 板		M-稀			無	Ⅰbd	
	34	甕						M微 亜角										M-僅 貝フ	L-僅	L-非 E多	S微	M-僅	S微 板	M稀 板		S稀 E非		S稀 E非	無	Ⅳe	
	35	壺 二重口縁	L稀 角	L-微 角														S稀 フ	L-微	L-多 E僅	M-稀	M僅		S微 板		S稀			無	Ⅰbd	
	36			L稀 角				M稀 角												L-中 E微		L-微				S僅			無	Ⅰbd	
	37	壺 小形丸底		M稀 角																S微		S微		S稀 板		S稀			無	Ⅰb	
	38	壺 小形丸底																		S僅		S僅				S微			無	砂礫少量 区分不能	
	39	甕 布留傾向						M稀 亜角												M-僅 E多		M-微						M僅 E非	無	Ⅳe	
	40	甕						L-僅 亜角											M稀	M-多 E多		L-中 E非						S稀 E非	無	Ⅳe	
	41	甕？						L-微 亜円										S稀 フ	M-僅	M-多 E多		M-微						S稀 E非	無	Ⅳe	
	42	壺		M-微 角																M-中		M-中		M-僅 板		M-微 E稀			無	Ⅰe	Fig.82
	43	壺 直口		L-微 角														M稀 フ		L-多 E微		M-中		M-稀 粒板		S稀			無	Ⅰbd	
	44	坏																		S僅		S僅				S微		M-稀 E非	無	砂礫少量 区分不能	
	45	坏																		S僅		S僅				S微			無	砂礫少量 区分不能	
	46	高坏	L稀 角	L稀 角															M-微	S中	M稀	S中		S僅 板		S微 E僅			無	Ⅰe	
	47	高坏？		S稀 角																S中 E微		S僅		S稀 板		S稀			無	Ⅰbd	
	48	高坏	L-稀 角	L-微 角															M-稀	L-中		S多				S稀			有 稀	Ⅰb	
	49	高坏																	M-微	M僅 E僅		M微				S稀			無	砂礫少量 区分不能	
	50	高坏	L-微 角	M微 角															M-微	L-中 E微	M-僅	L-僅		S微 板		S稀			無	Ⅰbd	
	51	高坏																		S微		S微		S微 板		S稀			無	砂礫少量 区分不能	
	52	器台？		S稀 角																S僅		S微							無	砂礫少量 区分不能	
	53	器台？		M-微 角																M-中 E微		M-僅		S稀 板		M-稀			無	Ⅰbd	
	54	？		M僅 角				L-稀 角											M-微	M-多 E微	M-稀	M-中		S微 板		S稀			無	Ⅰbd	
	※41	？		L僅 角															M-僅	L-多	L-僅	M僅	S稀 板	L稀 板					無	Ⅰa	
	※42	？		L-稀 角				M稀 角											M-微	L-多	L-微	L-中		M稀 板					無	Ⅰd	
S C I 58	1	甕 韓式系？	L-僅 角	L-僅 角															L-多	L-多	L中	L-僅		M-微 板					無	Ⅰa	Fig.90
	2	甕 布留傾向					L-微 角	L-僅 角											M-僅	L-多 E中	L稀	M-中	M微 板						無	Ⅳd	
	3	甕 布留					L稀 亜角	L-僅 亜角											M-微	M-多 E多	M-微	M-中				S稀 E非			無	Ⅳe	

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径２㎜以上　M＝粒径２㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径１㎜以上　M＝１㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5未満　量は裸眼に同じ　－＝以下の粒径がある　E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ＝フジツボ状　図＝報告書等の図版

砂礫が僅かに含まれる ……Ⅳbe類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫のみからなる ……Ⅳd類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる ……Ⅳe類型

以上のように類型区分をすれば、表2・3に示すようにⅠbd類型とⅣe類型に集中が見られる。

4）砂礫の採取地

博多を中心として東を粕屋郡、西を糸島郡とした範囲の河川の砂礫種を調査した。現在の河川であるために、護岸工事等により、人為的に移動した砂礫種もごく僅かにあると考えられるが、自然に流出した砂礫が主を占めていると考えられる。河川砂礫の傾向をみれば、前原町の河川では比較的角閃石が多く含まれ、閃緑岩質の岩石片が見られる。早良平野や博多付近では

表．2　器種と類型（博多遺跡第59次SC－41、SC－58：カッコ内）

類型		甕			壺			韓式系	合計
		布留傾行	布留	複合口縁	小形丸底	直口	壺？		
Ⅰ	a					1		(1)	2 (1)
	b	2		1					3
	bd	3		1			1		5
	d	(1)							(1)
Ⅳ	d	1							1
	e	13	(1)						14 (1)
不能					6				6
合計		20 (1)	(1)	2	6	1	1	(1)	32 (3)

表．3　器種と類型（博多遺跡第59次　SC－48）

類型		甕			壺			坏		器台	合計
		布留傾行	布留	甕	小形丸底	直口	壺	高坏	坏		
Ⅰ	a			2							2
	b	2			1			1			4
	bd	9		3		1		2		1	16
	d			1							1
	de	3									3
	e					1		1			2
Ⅳ	ae			1							1
	b	1									1
	be	1									1
	d	2	1								3
	e	9		1			1				11
不能		1		2	1			2	2	1	9
合計		28	1	10	2	2	1	6	2	2	54

角閃石が比較的少なくなり、片岩がごく僅かに含まれる場合や花崗岩質岩起源の砂礫のみとなる場合がある。福岡市東方の粕屋郡付近になれば、泥岩・砂岩や片岩が多くなる。

河川砂礫の傾向から、博多遺跡から出土した土器に含まれるＩa類型（SC－58のNo.１を除く）、Ｉb類型、Ｉbd類型、Ｉd類型の砂礫は博多遺跡近くで採取できる砂礫である。また、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅣ類型の砂礫は博多付近では採取出来ない砂礫である。Ⅳd類型、Ⅳe類型の砂礫は、流紋岩質岩や安山岩質岩が分布する加賀南部の砂礫構成に酷似する。Ⅳae類型、Ⅳb類型、Ⅳbe類型の砂礫は山陰、北陸、播磨のいずれかの砂礫であると推定される。Ｉde類型、Ｉe類型の砂礫は花崗岩の分布地域の砂礫であるが、場所は限定できない。

また、博多59次SC－58の１の資料は、器形的に韓式系土器である。含まれる砂礫種は花崗岩質岩起源と推定される砂礫種のみである。石英や花崗岩、長石片においてもくすんだ色を呈し、他の資料の砂礫とは感覚的に異なる。韓式系とされている多くの資料に見られる砂礫である。

表．４　博多周辺の河川の砂礫種

試料番号	岩石																鉱物										類型
	花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩･泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石		
	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
１．長野川 糸島郡前原町長野	L-中 角	L-僅 角	L-稀 角	L-微 角													M-中	M-多	L-中	L-中	M-僅 板	L-中 粒	M-微	L-僅			Ｉb
２．雷山川 糸島郡前原町三坂	L-中 角	L-僅 角												L稀 角			M-中	M-多	L-多	M-多	S中 板	M中 粒板		M-僅			Ｉbh
３．赤崎川 糸島郡前原町松井	L-微 角	L-中 角	L-僅 角	L-僅 角													L-微	L-中	L-多	L-中	L-僅 粒	L-僅 粒	M-微	L-稀			Ｉb
４．川原川 糸島郡前原町西堂	L-僅 角	L-僅 角		L-微 角													M-僅	L-中	L-中	L-中	S中 粒	M-僅 粒	S僅	M-僅			Ｉb
５．汐井川 糸島郡前原町楢	L-中 角	L-多 角											L-稀 角	L-微 亜角			L-多	L-中	L-中	M-中	M-稀 粒	L-微 粒					Ｉh
６．日向川 福岡市早良区飯盛	M-中 角	L-多 角				L稀 角							L-稀 亜角				L-多	L-多 E稀	L-多	L-中	M-微 板粒	L-微 粒板		L-稀			Ｉbd
７．室見川 福岡市早良区都地	L-多 角	L-多 角											L-稀 亜角	L-稀 亜角			L-中	L-中	L-中	L-中	M-僅 板	M-僅 粒板		M-微 EF稀			Ｉbh
８．樋井川 福岡市城南区田島	L-多 角	L-多 角			L稀 亜角	M稀 亜角							L-稀 角	L稀 亜角			L-多	L-中	L-中	L-中	M-稀 粒	S稀 粒					Ｉdh
９．那珂川 春日市警弥部	L-中 角	L-中 角															L-多	L-多	L-多	L-多	M-微 板粒	L-微 粒					Ｉa
10．御笠川 大野城市御笠川	L-中 角	L-中 角															L-多	L-中	L-多	M-多	S僅 板	S僅 粒		S微			Ｉb
11．宇美川 粕屋郡志免町片峰	M-中 角	L-僅 角							L-微 角	L-微 亜角			L-稀 亜角	L-僅 角			L-多	L-多 E稀	L-僅	L-微	M-稀 粒			L-稀			Ｉbdgh
12．須恵川 粕屋郡志免町本村	L-中 角	L-僅 角							L-微 角	M稀 亜角		M-稀 円	L-微 角	L-稀 角			L-多	L-多	L-中	L-僅		M-稀 粒		S稀			Ｉbgh
13．多々良川 粕屋郡粕屋町長戸	L-僅 角	L-僅 角				L稀 亜角				L-微 亜角			L-多 亜角	L-多 亜角			L-中	L-中 E稀	L-微	L-稀							Ⅷadg
14．久原川 粕屋郡久山町蒲田	L-稀 角	L-微 角				L-稀 亜角			L-中 亜角	L-中 亜円		L-僅 円	L-多 亜角	L-多 亜円			L-微	L-僅									Ⅷadg
16．猪野川 粕屋郡久山町牛見原						M稀 亜円							L-非 亜角	L-非 亜角		M稀 貝フ	L微	M微 E中									Ⅷd

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径２㎜以上　M＝粒径２㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径１㎜以上　M＝１㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5㎜未満　量は裸眼に同じ　-＝以下の粒径がある　E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ＝フジツボ状　図＝報告書等の図版

同じ花崗岩質岩起源と推定される砂礫であるが、博多付近の砂礫とは異なる。

5）おわりに

主として布留傾向甕・布留甕に的を絞って観察したのであるが、砂礫の採取地が土器の制作地であるとするならば、布留傾向甕は出土した博多遺跡付近でも制作していたものもあり、加賀南部付近から運ばれてきたものもある。運ばれてきた甕と同じ形の甕を遺跡で制作していることは、加賀地方から何らかの目的で、博多付近まで加賀地方の人が来て、甕が足りなくなり、博多付近の砂礫を使用して甕を制作したとも考えられる。

各地から出土する布留傾向甕の砂礫種構成をみれば、博多遺跡と同じようなことがいえる。

河内平野では八尾市中田遺跡、久宝寺遺跡等を中心に布留傾向甕が比率的に多く出土する。これらの甕に含まれる砂礫種構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を含むものと、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を含むものとに区分され、前者は大和川が流してきた砂礫種構成に酷似し、後者は加賀南部の砂礫種構成に酷似する。奈良盆地東南部の纒向遺跡を中心とした範囲に出土する布留傾向甕においても、河内平野出土の布留傾向甕と同じ様相を示す。

吉備や播磨、東海における布留傾向甕の胎土的特徴を把握していないが、少なくとも、布留傾向甕が制作された時期に、加賀南部では、何らかの目的をもった人が博多付近や河内・大和に行っていたといえる。

博多遺跡第59次調査出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　　本田光子
宮内庁正倉院事務所　　成瀬正和

第41・48号住居址跡出土の甕、丸底壺・小形丸底壺および石器に付着している赤色顔料について、その種類と状態を明らかにするために顕微鏡観察とX線分析を行った。赤色顔料の分析結果とそれにより推定される赤色顔料の種類を表に示した。X線分析の条件およびそれに基づく赤色顔料の推定の根拠については第329集に記した。

表　赤色顔料の分析結果

No.	試　　料	顕微鏡観察	蛍光X線分析	X線回折	赤色顔料の種類	挿　図
1	SC－41出土　小形丸底壺	朱？	水銀・鉄	辰砂	朱	Fig.68－30
2	SC－41出土　小形丸底壺	朱？	水銀・鉄	辰砂	朱	－
3	SC－48出土　甕	朱	水銀・鉄	＊	朱	Fig.82－16
4	５面出土　　磨石	ベンガラ	鉄	＊	ベンガラ	Fig.97
5	SC－48出土　敲打器	？	鉄	？	？	Fig.84－st63

＊は試料の状態により未測定

試料

No.１～３　土器の内面に薄く残っているのだが、赤色顔料粒子が単に付着していたり塗られているという状態ではなく、なんらかの方法で磨り込まれたように密着して見える（No.３は残りが悪く、わずかに凹部にかろうじて付着している）。土器の外面には厚くススが付着している。X線分析では土器破片をそのままで測定した。検鏡用には針先に着く程度を採取し、プレパラートを作成した。

No.４、５　No.４は石器の一部にわずかの赤色顔料が残ってるが、No.５は一部暗褐色ではあるが顕著な赤色顔料は認められない。実体顕微鏡下20倍で石材凹部に残っている赤色物を針により採取した。X線分析では石器をそのままで測定した。

赤色顔料の同定

顕微鏡による観察では、No.１、２は朱？と思われたが赤色顔料の粒子が非常に細かく、はっきりと判断できなかった。No.３には顕著なやや大きな朱粒子を認め、ベンガラは認められなかった。No.４はわずかではあるがベンガラ粒子を認めたが、No.５には顕著な赤色顔料の粒子を認めることができなかった。No.１、２は検鏡で朱？であったが、蛍光X線分析で鉄と水銀が検出され、鉛が検出されなかったこと、X線回折で辰砂（Cinnabar）が同定されたことから内面に付着している赤色顔料は朱である。No.３は蛍光X線分析で水銀と鉄が検出され、X線回折は試料の量が少なく測定できなかったが、検鏡で朱粒子が認められ、ベンガラはなかったことから、赤色顔料としては朱として判断した。No.４は、検鏡でベンガラが認められ、蛍光X線分析で鉄だけ

が検出されているので、一部に付着している赤色顔料はベンガラである。No.5は、蛍光X線分析では赤色の由来となる主成分元素として鉄が検出されたが、検鏡によりベンガラが認められないこと、X線回折で赤鉄鉱（Hematite）が同定されないことから、暗赤色に見える部分は赤色顔料によるものではないと判断した。

内面に赤色顔料が付着している土器について

今回の土器資料の3点は内面に朱が付着残存していた。赤色顔料の残存状態の悪いNo.3は別として、No.1、2は赤色顔料の付着状態が共通している。これは、博多遺跡第50次調査（第249集）、同第65次調査（第329集）で出土している同じように内面に朱が残存した土器のそれともほぼ共通した状態である。赤色顔料が単に付着しているのではない。つまり赤色顔料が土器内に貯蔵されていたために付着残存しているのではない。かといって土器の内面に装飾を目的として単に塗られた状態とも考えにくい。朱は土器器面にすり込まれ、みがかれたかのように少なからず浸透し、器面に密着している。そして土器外面は厚くススが付着している。

この種の土器は弥生時代後期後半以降に北部九州地方で多く出土している。弥生時代の出土例の多くは破片であるが、野方中原遺跡（第348集）、博多第50次出土の例は片口が付く。片口が必要であるということは、内容物が液状であることを想定させる。今回のNo.2は外面からも水銀が検出されているので、内から外に染み出していったとも考えられる。この種の土器は畿内地方でも数例出土しているが、纒向遺跡でも内面に朱が付いている土器は必ず外面にススが付着している。

以上の事実を総合すると、この種の土器はなんらかの目的のために「朱を液状にして火にかけるために使われた」としか考えられない。それも朱を水簸により精製するために水でといたのではなく、火にかければ少なからず水銀蒸気となる朱を熱しているのであるから、単なる赤色顔料の製造をしているわけではない。また、この種の土器に付着している朱の粒度は本例も含めて非常に細かいが、この時期の墳墓から出土する朱の粒度はこのように細かくないので、葬送のために使われた朱とは違うかも知れない。「仙薬」の製造にかかわる土器かとも思われるが類例に期待したい。

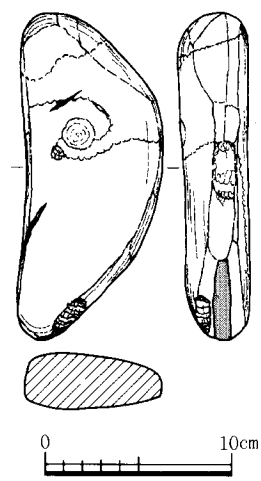


Fig.97　第5面出土磨石実測図

第5章　結　　章

博多祇園町に位置する第59次調査地点は、近世以降の攪乱があるため、276m²と狭い面積の調査を実施した。しかし、標高4.35～3.1mまで7面に分けて調査を実施し、少なくとも4枚の遺構が伴う文化層を検出し、多大な成果を得た。ここで各文化層について成果をまとめていくことにする。

1．第1文化層

第1文化層は、第1～3面として調査を実施した面となる。この文化層では、井戸7基（第4面として調査したSE－36・60を含む）と土壙16基、柱穴539個を検出した。遺構の分布状態でみていくと、井戸は調査区の中央部を南北に斜めに横切る形で分布し、北からSE－36・60、SE－04・17・25・26、SE－05と3つの切り合いグループとなっている。土壙は井戸に接した形で分布し、柱穴は柱痕跡があるもの、根締め石があるものがあるが、建物としてまとめることができなかった。

第1文化層出土の遺物としては、糸切り底の小皿・坏などの土師器、竜泉窯の青磁小皿・碗、白磁、陶器などと石鍋、硯、サイコロなどが各遺構から出土している。SE－04・05など新しい時期のものもあるが、ほとんどは12世紀前半から後半のものであり、第1～3面の遺構は同時期のものといえよう。

2．第2文化層

本文化層は第4面に相当し、土壙7基と柱穴101個の遺構がある。第4面の土壙は調査区の中央部に分布し、土壙に接した形で柱穴も分布するが、建物としてまとめることはできなかった。SK－34・37・39はいずれも4本柱を主柱とする屋構造をもち、倉庫的な用途をもっていたと考えられる。

第4面出土の遺構としては、板状圧痕をもちヘラ切りの土師器皿、瓦器、白磁碗などがある。SK－34・37・39は1m前後の遺存をもっていること、柱穴も建物としてはまとめてはいないが、3×2間のコーナーがつかめること、各遺構の遺物の時期が一定していることなどから第4面は11世紀末～12世紀前半の生活面であるといえよう。

3．第3文化層

第3文化層は第5面に対応し、第5面での遺構は検出できなかった。出土遺物としては、須恵器の坏蓋・坏・高坏・皿・甕、土師器の蓋・坏・高坏・皿・甕・甑・移動式竈と製塩土器、焼塩土器、韓式土器などの土器と「和銅開珎」1点、刀子・釘などの鉄製品、金銅製の飾金具、鞴羽口、鉄滓、瓦類、土錘、砥石、磨石、敲石などがある。

出土須恵器・土師器は90％以上が7世紀前半～8世紀前半のもので、2％前後8世紀後半～9世紀前半の遺物があるが、11世紀後半～12世紀前半の土器とともに第2文化層のものと考えら

れる。したがって本文化層は、8世紀前半のものといえよう。

4．第4文化層

本文化層は第6面に対応し、検出遺構としては13基の住居址と土壙・溝・柱穴がある。

検出住居址は竈を施設としてもつものと、もたないものがある。ここでは竈をもつ住居址群からみていくことにする。竈をもつ住居址はSC－45・49・58であるが、これらの住居址の構造からみていく。平面形は隅丸方形を呈すること。主柱穴は4本。一辺のほぼ中央に砂・シルト・粘土を混合し、角礫や甑など大形土器の大形の破片を骨組みとして竈を造っていること。古墳時代後半期の遺物があることなどが共通している。これらの条件の2つ以上を満たしている住居址として、SC－43・52・54がある。切り合い関係、出土土器からみていくと、6基の住居址群は6世紀末～7世紀初頭のものと、7世紀前半のものに分けられる。前者はSC－43・52・54・58と大形で、後者はSC－45・49と小さくなっている。

SC－41・42・44・48・53・56・57はいずれも古式土師器が出土しており、古墳時代前半期のものである。住居址の構造は平面形は隅丸方形であるが、主柱穴はSC－41が4本、SC－48は2本である。SC－41はベットをもっている。出土土器と切り合い関係でみていくと、SC－44が布留式土器の最古段階でもっとも古く、SC－41・48が続く時期で、SC－57が5世紀前半のものである。古式土師器期のなかでも時期的隔絶がある。

SC－41・44・48からは、鉄器・鉄素材・切断鉄片・椀形滓・鉄滓・鞴羽口・鍛造鉄片・敲打器など鉄器製作に関係する遺物がまとまって出土した。古墳時代初頭に本調査地を中心とした地区で鉄器製作を行なっていたといえよう。なお、SC－41・48では碧玉・水晶の剝片・石核が出土しており、玉製作も行なっている。

古式土師器は、肉眼的観察および器形胎土分析から在地的なものが少なく、他地域の影響を受けたものと移入土器が多い。中国地方から北陸までの影響を受けた土器群といえ、海に面した博多遺跡群ならではのことといえよう。

博多第59次調査地にて（右 故 牟田裕二君）

〔編集後記－牟田裕二君へ－〕

貴君が福岡市の遺跡調査に従事したのは、1985年の丸隅山古墳からだと思います。私が貴君と会ったのは同年の堤ケ浦古墳群の調査からで、井尻B・片江B・那珂（第10～17・21次）・高畑・博多（第37・59・64次）遺跡、老司古墳など、福岡大学在学時から同大学を卒業して佐賀市教育委員会に奉職する1990年９月まで共に調査を行ないました。特に1989年以降は、調査補助員として私の良きパートナーとなり、調査・整理・報告書作製までよく頑張ってくれました。感謝しています。

貴君をパートナーとして、調査を実施した博多遺跡群第59次調査の報告書を発行する運びとなりました。貴君の現場での実測図・写真が適格で、整理作業も調査同様に順調に進めることができました。

貴君にとっては満足できる内容となっていないかもしれませんが、貴君のご両親、貴君の良妻に献呈いたします。

牟田裕二君　略歴

1965年２月13日	誕　生
1983年４月	福岡大学に入学 歴史研究会に入会
1985年	丸隅山古墳調査に従事
1987年３月	福岡大学卒業
1989年４月	福岡市教育委員会埋蔵文化財課の調査補助員となる
1990年10月	佐賀市教育委員会に奉職
1991年	田中利加子嬢と結婚
1992年７月10日	永　眠

博　多　36

－博多遺跡群第59次調査報告－

1993年（平成５年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　寿印刷株式会社
福岡市西区小戸四丁目５番42号